

東海環状自動車道建設事業に伴う

# 四辻遺跡・日尾塚状地 発掘調査報告

－いなべ市北勢町－

2020(令和2)年11月

三重県埋蔵文化財センター









S X 301・S X 302全景（北東から）



## 序

四辻遺跡は、いなべ市北勢町の丘陵上にあります。今回、東海環状自動車道建設に伴い発掘調査を行いましたところ、断続的ではありますが、縄文時代から近代までの遺構と遺物が発見されました。

現在は「里山」として地域の人びとに親しまれているこの丘の上には、何千年にもわたる人間活動の痕跡が残されていました。今回の調査によって、この地域のこれまで知られていなかった過去の姿を、またひとつ明らかにすることができました。

埋蔵文化財は、その地域に残された人びとの暮らしや活動の記録であり、国民共有の財産です。明らかになった過去の歴史が、現在から未来への「みちしるべ」として、今後の、まちづくり・ひとづくりにつながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、地元いなべ市北勢町にお住まいの皆さまをはじめとして、国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所、いなべ市教育委員会および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。みなさまの誠意あるご対応に、心から御礼申し上げます。

令和2年11月

三重県埋蔵文化財センター

所長 上村安生



## 例 言

- 1 本書は、東海環状自動車道建設事業に伴う、三重県いなべ市北勢町向平字四辻に所在する四辻遺跡の発掘調査（第1～4次）および同市北勢町二之瀬字日尾に所在する日尾塚状地の発掘調査にかかる発掘調査報告書である。
- 2 上記の調査にかかる費用は国土交通省中部地方整備局が負担した。
- 3 調査は下記の体制で実施した。

委託者	国土交通省中部地方整備局
受託者	三重県
調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター

※年度ごとの現地調査担当者は第1章 前言を参照。
- 4 出土遺物の整理および報告書作成は平成27～31年度・令和2年度に行った。
- 5 本書の執筆は勝山・竹田・松永・出口が行い、編集は勝山・松永が行った。遺構の撮影は現地調査の各担当者、遺物の撮影は勝山・松永が行った。なお、文責は目次に表記した。
- 6 発掘調査及び本報告書の作成に際しては、下記の機関と方々に、ご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）  
向平自治会・いなべ市教育委員会・藤澤良祐（愛知学院大学教授）・中野晴久（愛知学院大学講師）
- 7 本書に関連した四辻遺跡の調査成果については、発掘調査ニュース等で随時報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。
- 8 本書が扱う発掘調査の記録および出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

# 凡 例

## 地図類

- 1 本書で使用した地図は、国土地理院発行の1:25,000の地形図「駒野」「阿下喜」「菰野」「篠立」「竜ヶ岳」、三重県共有デジタル地図2011（数値地形図2500（道路線1000））を使用し、加筆作成したものである。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合組合の承認を得て使用した。（承認番号：令和2年度4月1日付 三総合地第2号）
- 2 本書で用いた座標値は、世界測地系による座標第VI系による。
- 3 挿図の方位はすべて座標北で示している。

## 遺構類

- 1 土色等の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（2011年第34版）を用いた。
- 2 遺構番号は、調査年次ごとに通し番号を付与した。付与した番号は、第2次調査では1から始まる通し番号、第3次調査では301から始まる通し番号、第4次調査では401から始まる通し番号とした。
- 3 遺構は、遺構の種類によって、以下の記号と数字の組み合わせにより表記した。  
SD：溝 SK：土坑 SH：堅穴建物 SX：墓・塚墓 Pit：小穴  
※溝で方形に区画され、区画内の中央部に土坑が設けられている中世の遺構について、本書では「塚墓」の名称を用いて報告した（詳細は第IV章参照）。

## 遺物類

- 1 遺物番号は、調査年次・遺物の種類にかかわらず、通し番号で付与した。
- 2 本書での遺物実測図の縮尺は、土器2/3、石器1/2、陶磁器等1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、そのつど表示している。
- 3 遺物観察表について、以下に留意点を記す。  
報告番号・・・挿図掲載番号である。  
実測番号・・・実測時の番号である。  
グリッド・・・遺物の出土位置である。  
色調・・・遺物の代表となる色調を記載した。表記は上記の『新版標準土色帖』に拠るが、これで表現することの困難な陶磁器の釉や兵須の色調については、DICグラフィックス株式会社発行『DICカラーガイド 日本の伝統色』（2010年第8版）を用いた。  
備考・・・遺物の特徴となる事項などを記した。

## 写真図版

- 1 遺物番号は、報告番号と対応している。
- 2 遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

# 目 次

第 I 章	前言	(勝山)	1
第 1 節	調査に至る経緯		1
第 2 節	調査の体制と経過		1
第 3 節	文化財保護法に係る諸通知		6
第 4 節	調査の方法		6
第 5 節	普及公開活動		9
第 II 章	位置と環境	(松永)	10
第 1 節	地理的環境		10
第 2 節	歴史的環境		10
第 III 章	基本層序	(松永)	15
第 IV 章	遺構	(勝山)	27
第 1 節	縄文時代		27
第 2 節	中世		30
第 3 節	近世		32
第 4 節	近代以降		36
第 5 節	時期不明		39
第 V 章	遺物	(勝山・竹田)	40
第 1 節	旧石器時代	(勝山)	40
第 2 節	縄文時代	(勝山)	40
第 3 節	中世	(竹田)	41
第 4 節	近世	(竹田)	41
第 5 節	篩掛けによりみつかった剥片	(勝山)	41
第 VI 章	自然科学分析	(勝山・株式会社パレオ・ラボ)	47
第 1 節	分析の目的と試料について	(勝山)	47
第 2 節	放射性炭素年代測定	(株式会社パレオ・ラボ)	47
第 3 節	出土炭化材の樹種同定	(株式会社パレオ・ラボ)	50
第 VII 章	調査のまとめ	(勝山)	53
第 1 節	遺跡の変遷		53
第 2 節	塚墓について		54
第 3 節	「京ヶ野」の開発について		56
第 4 節	結語		57
第 VIII 章	日尾塚状地	(出口)	64
第 1 節	前言		64
第 2 節	調査の経過		64
第 3 節	文化財保護法に係る諸通知		65
第 4 節	調査の方法		65
第 5 節	調査のまとめ		66

## 図版一覧

- 第1図 東海環状自動車道路線上の遺跡  
(1 : 80,000)
- 第2図 トレンチ・調査区位置図 (1 : 2,000)
- 第3図 地区割図1～3工区 (1 : 500)
- 第4図 地区割図4～6工区 (1 : 2,000)
- 第5図 遺跡位置図 (1 : 80,000)
- 第6図 遺跡地形図 (1 : 5,000)
- 第7図 1工区東壁土層断面図 (1 : 100)
- 第8図 1工区南壁土層断面図 (1 : 100)
- 第9図 2工区北壁土層断面図 (1 : 100)
- 第10図 2工区東壁土層断面図 (1 : 100)
- 第11図 3工区西壁土層断面図 (1 : 100)
- 第12図 3工区北壁土層断面図 (1 : 100)
- 第13図 4工区北壁土層断面図 (1 : 100)
- 第14図 4工区東壁土層断面図 (1 : 100)
- 第15図 4工区南壁土層断面図 (1 : 100)
- 第16図 4工区西壁土層断面図 (1 : 100)
- 第17図 5工区北壁土層断面図 (1 : 100)
- 第18図 5工区東壁土層断面図 (1 : 100)
- 第19図 5工区南壁土層断面図 (1 : 100)
- 第20図 5工区西壁土層断面図 (1 : 100)
- 第21図 6工区北壁土層断面図 (1 : 100)
- 第22図 6工区東壁土層断面図 (1 : 100)
- 第23図 6工区南壁土層断面図 (1 : 100)
- 第24図 6工区西壁土層断面図 (1 : 100)
- 第25図 1工区・3工区 東 遺構平面図  
(1 : 250)
- 第26図 2工区 北・3工区 遺構平面図  
(1 : 250)
- 第27図 2工区 南 遺構平面図 (1 : 250)
- 第28図 4工区遺構平面図 (1 : 250)
- 第29図 5工区遺構平面図 (1 : 250)
- 第30図 6工区遺構平面図 (1 : 250)
- 第31図 S H402実測図 (1 : 50)
- 第32図 S K403実測図 (1 : 10)
- 第33図 S H404・S H406実測図 (1 : 50)
- 第34図 S D405・S K408実測図 (1 : 50)
- 第35図 S X301・S X302実測図 (1 : 50)
- 第36図 近世区画溝想定図 (1 : 2,000)
- 第37図 S D303土層断面図 (1 : 40)
- 第38図 S D401土層断面図 (1 : 40)
- 第39図 S D405土層断面図 (1 : 40)
- 第40図 S X305実測図 (1 : 20)
- 第41図 S X304・S X309実測図 (1 : 20)
- 第42図 S X306実測図 (1 : 20)
- 第43図 S X307実測図 (1 : 20)
- 第44図 S X308実測図 (1 : 20)
- 第45図 出土遺物実測図1
- 第46図 出土遺物実測図2
- 第47図 暦年校正結果
- 第48図 四辻遺跡第4次調査出土炭化材の  
走査型電子顕微鏡写真
- 第49図 方形区画の規模 (m)
- 第50図 四辻遺跡の「塚墓」と類似例  
(すべて1 : 200)
- 第51図 経塚中世墓 上層遺構図 (1 : 300)
- 第52図 横尾墳墓群 A地区下層遺構図 (1 : 200)
- 第53図 横尾墳墓群 B地区下層遺構図 (1 : 200)  
・断面図 (1 : 150)
- 第54図 岩出遺跡群 S X350 (1 : 200)
- 第55図 岩出遺跡群 (旧称: 蚊山遺跡左郡地区)  
S X180・S X189 (1 : 200)
- 第56図 岩出遺跡群 (旧称: 蚊山遺跡左郡地区)  
S X215・S K229 (1 : 200)
- 第57図 遺跡位置図 (1 : 25,000)
- 第58図 遺跡地形図 (1 : 5,000)
- 第59図 調査区位置図 (1 : 250)
- 第60図 調査区土層断面図 (1 : 80)

## 表一覧

第1表 東海環状自動車道 路線上遺跡一覧

第2表 周辺遺跡一覧

第3表 微細剥片一覧表

第4表 遺構一覧表

第5表 遺物観察表（土器・陶磁器）

第6表 遺物観察表（石器）

第7表 測定試料および処理

第8表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

第9表 四辻遺跡第4次調査出土炭化材の樹種同定結果

第10表 塚墓一覧表

## 写真一覧

写真図版1 四辻遺跡①

写真1 四辻遺跡全景（北上空から）

写真2 1工区完掘状況（東から）

写真図版2 四辻遺跡②

写真3 2工区完掘状況（北から）

写真4 S D 3 南部完掘状況（北から）

写真図版3 四辻遺跡③

写真5 3工区完掘状況（東から）

写真6 S D 2 完掘状況（東から）

写真図版4 四辻遺跡④

写真7 4工区完掘状況（西から）

写真8 4工区完掘状況  
（上空から 上が北）

写真図版5 四辻遺跡⑤

写真9 S X 304 人骨出土状況（東から）

写真10 S X 304 完掘状況（東から）

写真図版6 四辻遺跡⑥

写真11 S X 305 棺痕跡出土状況（南から）

写真12 S X 306 人骨出土状況（西から）

写真図版7 四辻遺跡⑦

写真13 S X 307 完掘状況（北から）

写真14 S X 308 土層断面および  
棺痕跡出土状況（南から）

写真図版8 四辻遺跡⑧

写真15 S X 308 人骨出土状況（北から）

写真16 S X 308 完掘状況（南から）

写真図版9 四辻遺跡⑨

写真17 S X 309 棺痕跡出土状況（南から）

写真18 S X 309 人骨出土状況（南から）

写真図版10 四辻遺跡⑩

写真19 S X 309 人骨出土状況近景（南から）

写真20 S X 309 完掘状況（南から）

写真図版11 四辻遺跡⑪

写真21 5工区完掘状況（南から）

写真22 5工区完掘状況（上空から 上が北）

写真図版12 四辻遺跡⑫

写真23 S X 301・S X 302 全景（北東から）

写真24 S D 303 完掘状況（西から）

写真図版13 四辻遺跡⑬

写真25 S X 301 完掘状況（東から）

写真26 S X 302 全景（東から）

写真図版14 四辻遺跡⑭

写真27 S X 302 中央土坑出土状況  
（東から）

写真28 S X 302 中央土坑完掘状況（北から）

写真図版15 四辻遺跡⑮

写真29 6工区完掘状況（北から）

写真30 S D 401 完掘状況（北から）

写真図版16 四辻遺跡⑯

写真31 S H 402 検出状況（南から）

写真32 S H 402 完掘状況（北東から）

写真図版17 四辻遺跡⑰

写真33 S H 404・S H 406 完掘状況（北から）

写真34 S H 404・S H 406 完掘状況（東から）

写真図版18 四辻遺跡⑱

写真35 S K 403 遺物出土状況（西から）

- 写真36 S K 403完掘状況 (南から)
- 写真図版19 四辻遺跡⑨
- 写真37 S D 405完掘状況 (北から)
- 写真38 S K 408礎出土状況 (西から)
- 写真図版20 四辻遺跡⑨
- 写真39 S K 408礎出土状況近景 (南から)
- 写真40 S K 408完掘状況 (西から)
- 写真図版21 日尾塚状地①
- 写真41 南トレンチ調査前 (南西から)
- 写真42 南トレンチ掘削後 (南西から)
- 写真図版22 日尾塚状地②
- 写真43 北トレンチ調査前 (南から)
- 写真44 北トレンチ掘削後 (南から)
- 写真図版23 出土遺物①
- 写真図版24 出土遺物②
- 写真図版25 出土遺物③

# 第I章 前 言

## 第1節 調査に至る経緯

国道475号東海環状自動車道（以下、東海環状自動車道）は、名古屋市周辺の30～40km圏に位置する四日市市・東員町・いなべ市・大垣市・岐阜市・関市・土岐市・豊田市等の諸都市を有機的に結ぶ延長約160kmの高規格幹線道路である。

同路線は名古屋市と周辺諸都市の機能分担をより効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和および交通機能の回復を図るものとして計画されたものであり、三重県内の北勢地域においては、道路網の充実、四日市港の集積拡大による活性化、内陸部の適正な開発、地震や台風等の非常時の緊急輸送道路の確保等に寄与することが期待されている。

計画路線は、四日市市北山町の新四日市JCTで新

名神高速道路から分岐し、員弁川の右岸を北上し、東員町、いなべ市を経た後、岐阜県養老町と連絡するものとなっている。

三重県埋蔵文化財センターは、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いに関して、平成5年8月23日、建設省中部地方建設局北勢国道工事事務所（当時。以下、北勢国道工事事務所）と協議を行い、さらに、10月13日には北勢国道工事事務所、三重県土木部高速道推進室（当時）、文化振興課（当時）、埋蔵文化財センターの4者で協議を行った。これらの協議の結果、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることが決定された。

## 第2節 調査の体制と経過

東海環状自動車道の路線にある遺跡は、18遺跡である（第1図・第1表）。①～⑬までの遺跡については、既刊の報告書に評述されているため、詳細はそちらを参照されたい。ここでは、四辻遺跡に関する事項のみを記述する。

### （1）調査の体制

四辻遺跡の調査は平成27年度から始まり、令和2年度で終了した。

#### 【平成27年度】

担当：調査研究4課（田中久生・水谷豊・高松雅文）  
室内整理：小林由希絵・寺木恵・中村里美

#### 【平成28年度】

担当：調査研究4課（田中久生・松永公喜・水谷豊・出口真）

室内整理：近藤直美・寺木恵

#### 【平成29年度】

担当：調査研究4課（田中久生・水谷豊・谷口信博・松永達也・勝山孝文・出口真）

室内整理：唐木美早・近藤直美・寺木恵

#### 【平成30年度】

担当：調査研究4課（竹田憲治・水谷豊・谷口信博・

松永達也・勝山孝文・出口真）

室内整理：近藤直美・谷川知子・寺木恵・廣田洋子

#### 【平成31年度】

担当：調査研究4課（長谷川哲也・水谷豊・谷口信博・松永達也・勝山孝文・出口真）

室内整理：近藤直美・谷川知子・寺木恵・廣田洋子・松崎由里

#### 【令和2年度】

担当：調査研究4課（長谷川哲也・水谷豊・萩原義彦・松永達也・勝山孝文・河瀬敏也・山田紗恵子）

室内整理：谷川知子・寺木恵・廣田洋子・松崎由里

### （2）発掘調査の経過

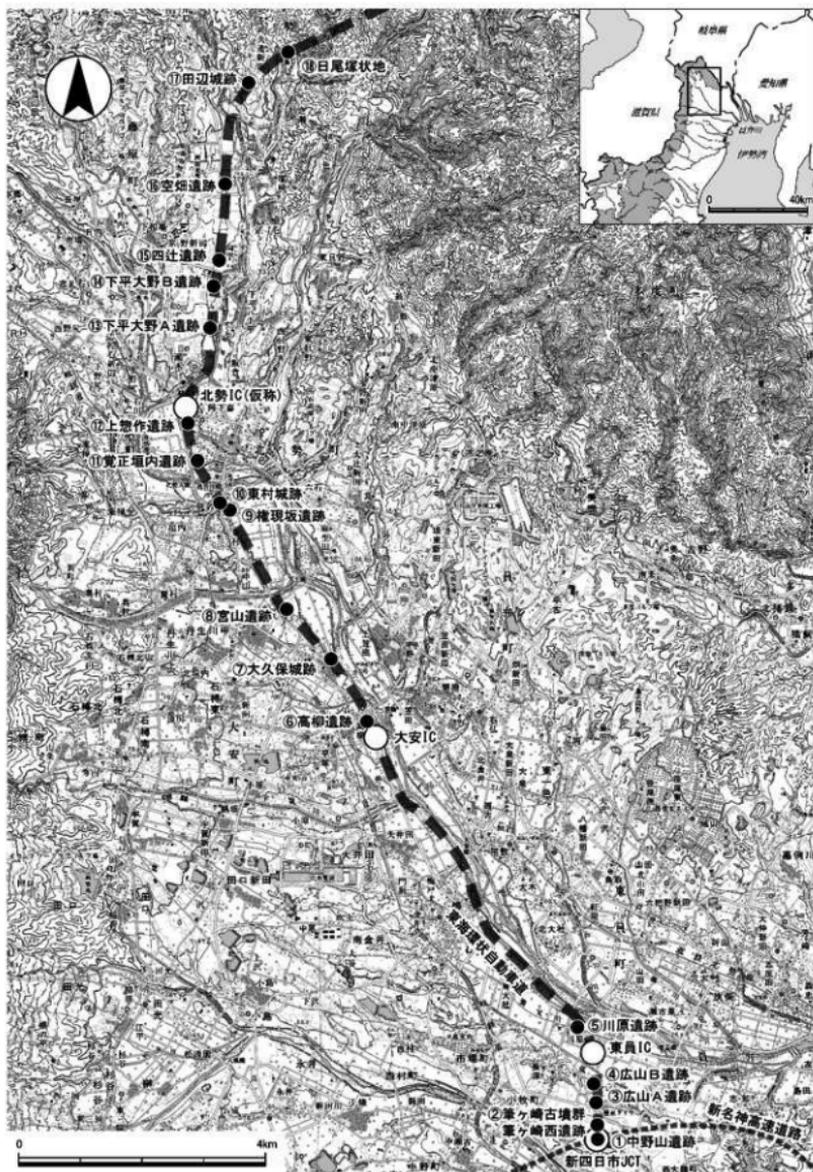
調査回数については、平成27～29年度に行ったトレンチによる先行調査（調査時は「一次調査」と呼称していたもの）を本書ではまとめて第1次調査①～③として扱い、それ以外の調査を第2～4次調査としてカウントしている。

#### 【平成27年度】

##### 第1次調査①

期間：平成27年10月14日～平成28年1月15日

面積：1,562㎡



第1図 東海環状自動車道路線上の遺跡 (1/80,000) 『国土地理院 (1/25,000) 『動野』『阿下藩』『龜野』『鶴立』『電ヶ岳』に加筆作成』



調査は遺跡のおもに北部で幅2mのトレンチを12本設定し行った(第2図)。平成27年10月14日～12月17日にトレンチ8本(1,120㎡)、平成27年11月25日～平成28年1月15日にトレンチ4本(442㎡)の2回に分けて調査を行っている。東西および南北に直行する溝を検出したが、この時点では遺物の出土がなく、遺構の時期は不明だった(詳細は第IV章参照。以下同じ)。

#### 【平成28年度】

##### 第2次調査

期間：平成28年6月17日～平成28年9月12日

面積：1,001㎡

調査は1工区(201㎡)、2工区(500㎡)、3工区(300㎡)の3カ所で行った(第2図)。

東西溝2条(SD1・2)と直交する南北溝1条(SD3)を確認した。溝からは近世の陶磁器類が出土した。

##### 第1次調査②

期間：平成28年9月21日～平成29年3月15日

面積：4,226㎡

調査は幅2mのトレンチを43本設定し行った(第2図)。平成28年9月21日～12月6日にトレンチ31本(2,566㎡)と、平成28年12月16日～平成29年3月15日にトレンチ12本(1,660㎡)の2回に分けて調査を行っている。

遺跡の中央部で土坑や溝を検出した。溝から土師器小皿1点が出土した。

#### 【平成29年度】

##### 第3次調査

期間：平成29年5月25日～平成29年10月10日

面積：2,000㎡

調査は4工区(1,270㎡)と5工区(730㎡)の2カ所で行った(第2図)。

4工区から近・現代の墓6基(SX304～309)、5工区から室町時代の塚墓2基(SX301・302)、4・5工区から近世の区画溝2条(SD303・310)を検出した。

前年度の調査で確認されていた溝が、塚墓(SX301)の東側周溝であることが判明した。

##### 第1次調査③

期間：平成29年11月13日～平成30年1月12日

面積：1,000㎡

調査は遺跡の中央部で幅2mのトレンチを14本(1,000㎡)設定し行った。ビット数基と堅穴建物の可能性のある土坑の一部を検出した。ビットと土坑から縄文時代早期の押型文土器小片が各1点出土した。

#### 【平成31年度】

##### 第4次調査

期間：平成31年4月22日～令和元年7月29日

面積：1,000㎡

平成29年度の第1次調査③において検出された堅穴建物の可能性のある土坑を中心に調査区(6工区)を設定し、調査を行った(第2図)。

縄文時代早期の堅穴建物3棟(SH402・404・406)・土坑1基(SK408)、近世の区画溝(SD401・405)、時期不明の土坑1基(SK403)を検出した。

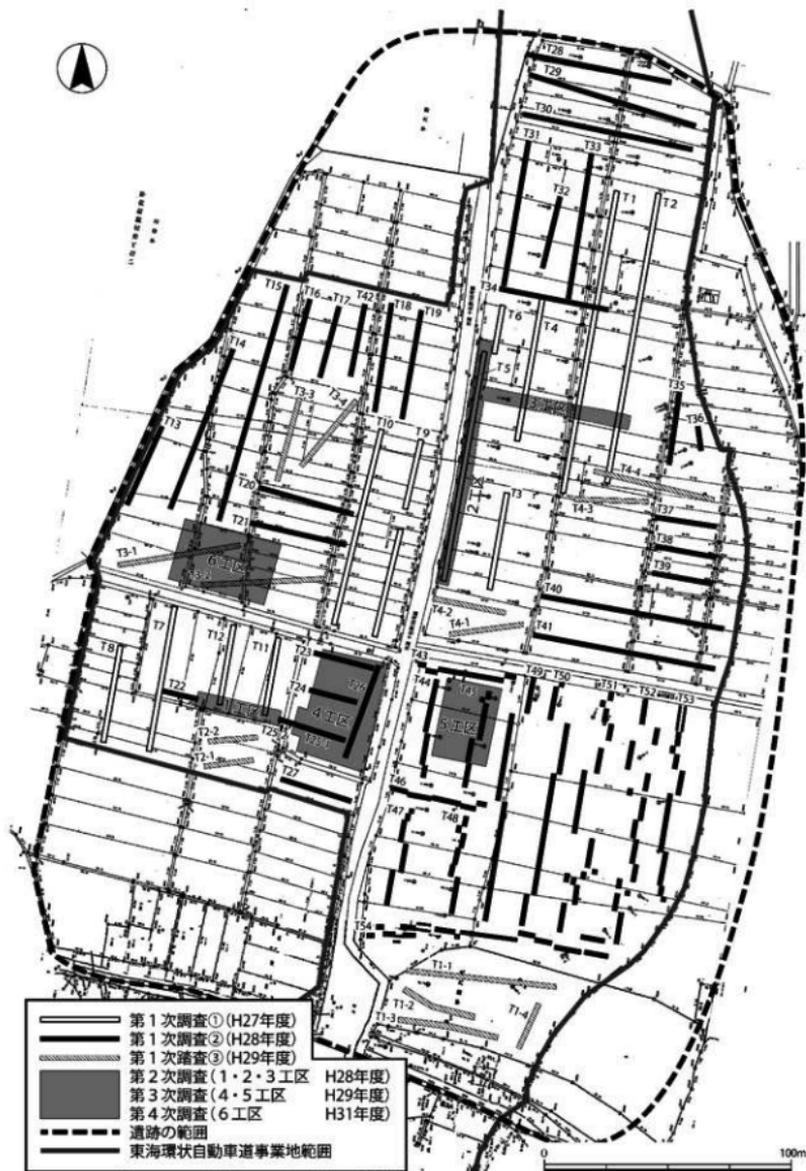
#### (3) 調査日誌(抄)

##### 第2次調査(平成28年度)

- 7月6日 1工区表土掘削開始
- 7月11日 1工区東側より遺構検出・掘削開始
- 7月12日 1工区北包含層より土器片1点出土
- 7月20日 3工区表土掘削開始
- 7月21日 3工区東側より遺構検出・掘削開始
- 8月2日 2工区表土掘削開始
- 8月4日 2工区南側より遺構検出・掘削開始
- 8月26日 調査区全景写真撮影
- 9月4日 現地説明会
- 9月5日 埋戻し開始
- 9月7日 現場撤収完了

##### 第3次調査(平成29年度)

- 6月12日 5工区北側より表土掘削開始  
方形に囲む溝2箇所あり
- 6月15日 5工区南側に溝1条確認
- 6月16日 4工区北側より表土掘削開始
- 6月29日 5工区北側より遺構検出・掘削開始  
SX301・SX302検出
- 7月11日 SX301掘削終了
- 7月18日 SX302掘削終了
- 7月20日 4工区北側より遺構検出・掘削開始
- 8月25日 調査区全景空中写真撮影
- 5工区全景写真撮影



第2図 トレンチ・調査区位置図 (1:2,000)

8月28日	4工区全景写真撮影	5月30日	S D 401・S H 402検出
9月1日	桑名警察署による人骨等出土状況現場確認	6月3日	S D 401掘削終了 S K 403検出
9月2日	現地説明会	6月4日	S H 404・406、S D 405検出
9月6日	北勢国道事務所管内埋蔵文化財協議にて人骨等の取り扱い決定	6月6日	S K 403掘削終了
9月11日	人骨等を北勢国道に引き渡す	6月13日	S K 408検出
9月29日	埋戻し開始	6月18日	S H 404・406、S K 408掘削終了
9月30日	現場撤収完了	6月20日	S H 402掘削終了
<b>第4次調査</b> (平成31年度)		6月26日	6工区全景写真撮影
5月16日	6工区南側より表土掘削開始	7月6日	現地説明会
5月27日	西側より遺構検出・掘削開始	7月15日	埋戻し開始
		7月22日	現場撤収完了

### 第3節 文化財保護法に係る諸通知

文化財保護法等に係る諸通知は、以下の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知（文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項）

【第1～4次調査】平成26年1月10日付け、国部整北調設第87号（国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

○発掘調査の着手報告（文化財保護法第99条第1項）

【第2次調査】平成28年6月17日付け、教埋第99号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

【第3次調査】平成29年5月25日付け、教埋第92号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

告）

【第4次調査】平成31年4月22日付け、教埋第49号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○文化財の発見・認定通知（文化財保護法第100条第2項）

【第2次調査】平成29年3月22日付け、教委第12-4428号（いなべ警察署長あて）

【第3次調査】遺物の出土なし（春光寺石塔群採集遺物は、いなべ市教育委員会が手続きをおこなっている）。

【第4次調査】令和元年7月31日付け、教委第12-4407号（いなべ警察署長あて）

### 第4節 調査の方法

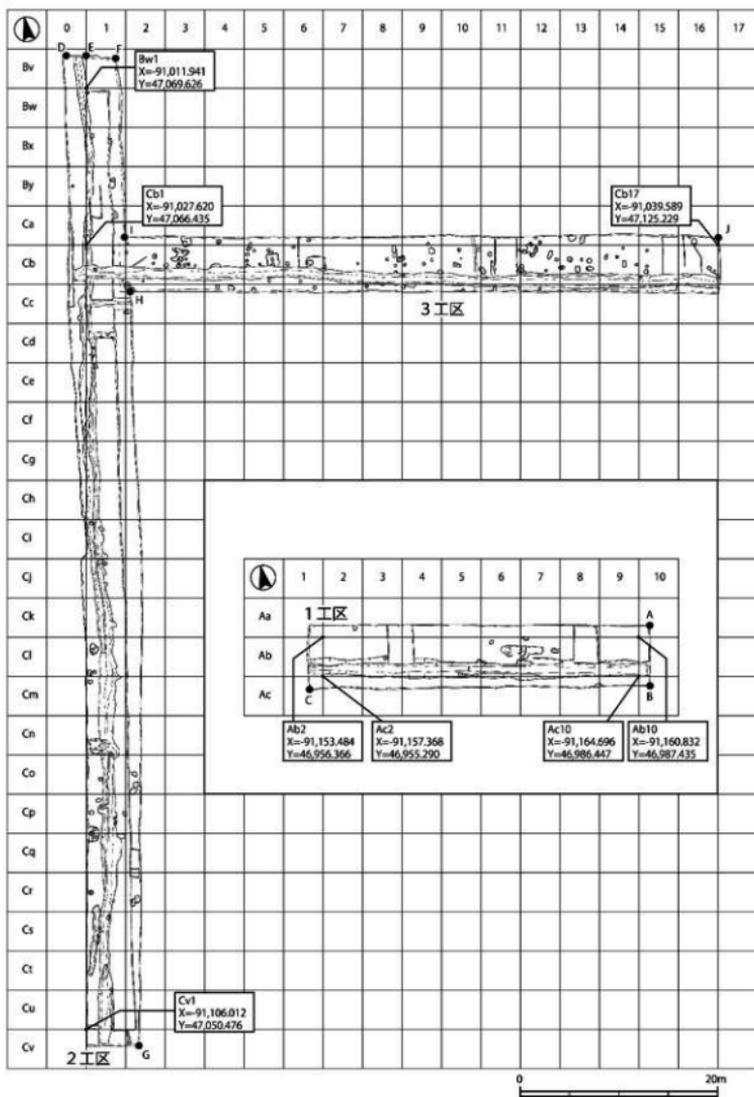
**地区設定** 第2次調査で設定した1～3工区では、調査区の形状に合わせて4m×4mを1単位とする小地区を設定した。各小地区は北西隅を基点とし、地区名称は、南北方向に付与したアルファベットと東西方向に付与した数字を組み合わせて表した。主な小地区の世界測地系における座標は第3図に記載したとおりである。

第3次調査では、調査面積の拡大や今後の調査の継承性等を勘案し、遺跡全体を網羅する大地区を設定した。大地区は世界測地系のX=90,900m・Y=46,900mの地点を基点として、100m×100mの方形

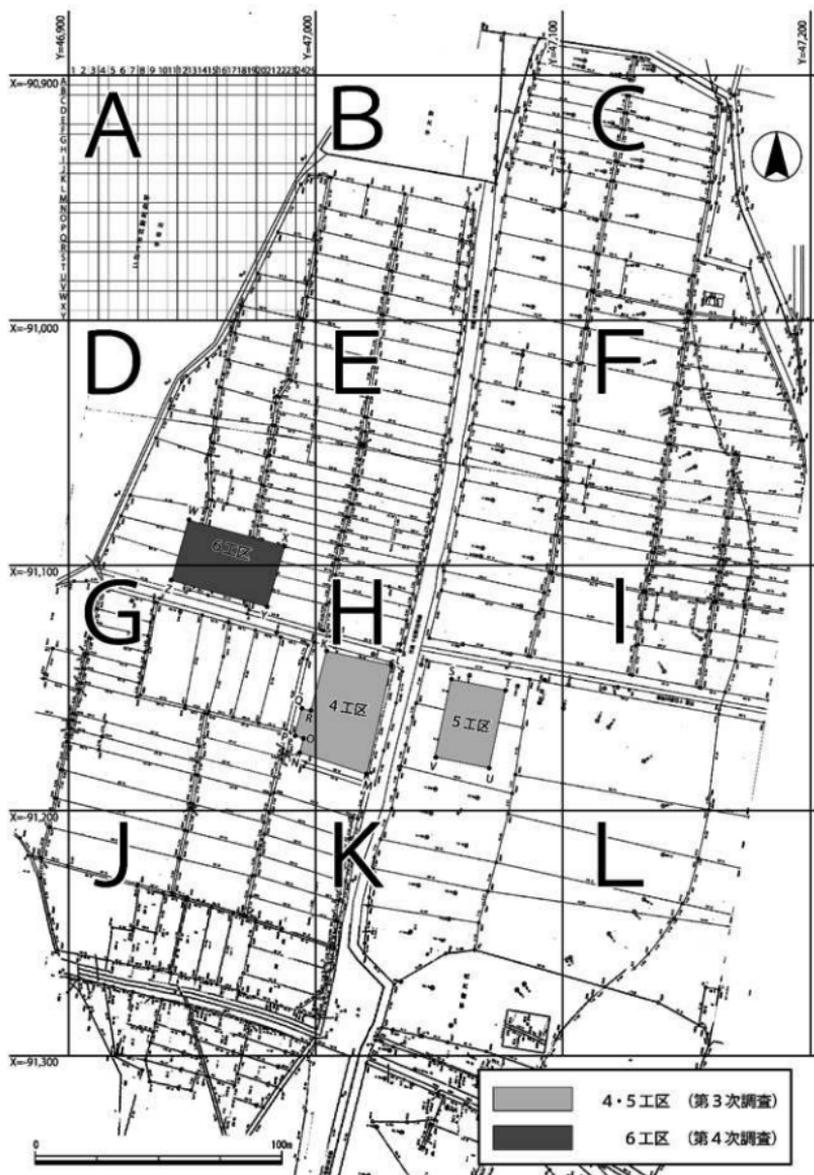
区画に、それぞれ、A～Lまでの地区名を付与したものである（第4図）。

さらに、大地区の中に4m×4mを1単位とする小地区を設定した。各小地区は北西隅を基点とし、西から東へは1～25の算用数字、北から南へはA～Yのアルファベットを付与した。地区名称は、大地区名を頭に、アルファベットと数字を組み合わせて表した（例：A-Y25）。第4次調査でも上記の大地区を踏襲して調査を行っている。

**掘削と検出** 表土掘削は重機（バックホウ）を用いて行い、地区杭の設置後は、ジョレン又はステーキ



第3图 地区剖面1~3工区 (1:500)



第4图 地区割图4~6工区 (1:2,000)

ホー等で遺構検出面を精査して遺構検出を行った。その際、遺構の重複関係など、検出状況を記録するために、1/40の縮尺で、遺構カードをグリッドごとに作成した。さらに、遺構カードをもとに1/100の

遺構略測図を作成し、掘立柱建物や遺跡全体の性格についての検討を行った。遺構掘削は、遺構カード記入後、順次、手作業で行った。

## 第5節 普及公開活動

発掘調査に伴う普及公開活動としては、現地説明会の開催、調査だよりの発行などを行った。

### 【第2次発掘調査現地説明会】

日時 平成28年9月4日(日)

参加者 67名

内容 遺跡内見学、出土遺物展示  
(空堀遺跡で採集した遺物も展示)

配布物 『東海環状自動車道発掘調査だより』  
第1号

### 【第3次発掘調査現地説明会】

日時 平成29年9月2日(土)



第2次発掘調査現地説明会

参加者 75名

内容 遺跡内見学、出土遺物展示

配布物 『東海環状自動車道発掘調査だより』  
第2号

### 【第4次発掘調査現地説明会】

日時 令和元年7月6日(土)

参加者 86名

内容 遺跡内見学、出土遺物展示

配布物 『東海環状自動車道発掘調査だより』  
第6号



第3次発掘調査現地説明会

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

四辻遺跡は三重県いなべ市北勢町向平宇四辻に所在する。いなべ市は藤原・北勢・大安・員弁の4つの町が2003年末に合併してできた市で、三重県の最北端に位置する。北東は養老山地を境に岐阜県と接し、南西は鈴鹿山脈で滋賀県と接する。市内は、養老山地や鈴鹿山脈などの山岳地帯と、その間を流れる員弁川の開析作用で形成された河岸段丘、員弁川流域に広がる沖積地の大きく3つの地形に分けられる。

四辻遺跡(1)は東の田切川、西の員弁川とその支流の相場川に挟まれた標高156m付近の河岸段丘上に立地する。この段丘の北方には空畑遺跡(2)、

塩崎京ヶ野遺跡(3)があり、南方には下平大野B遺跡(4)、下平大野A遺跡(5)がある。東方の斜面には春光寺石塔群(6)が所在する。またさらに東の斜面には向平城跡(7)があり、付近には向平の集落が広がっている。この丘陵は北から南へゆるやかに傾斜していく。丘陵南端で田切川などいくつかの支流は員弁川に合流し、員弁川は南へ大きく流れを変えたのち南東へ流れていく。流れを変える辺りには員弁川の低位段丘が広がり、川向遺跡(8)を始めとする多数の遺跡が存在している。その東にある一段高い段丘上には阿下喜の街が広がっている。

### 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 当該期の遺跡の調査事例は少ない。発掘調査では、川向遺跡で二側縁加工のナイフ形石器と思われる遺物が出土している<sup>9)</sup>。

**縄文時代** 員弁川の支流である田切川と二ノ瀬川に挟まれた段丘上では、田辺城跡(9)で縄文時代のものである石畿、石匙などが出土しており<sup>9)</sup>、空畑遺跡では前期後半とみられる土器、石匙や石鐘などの多様な石器が採集されている<sup>9)</sup>。

また、員弁川左岸の川向遺跡では、中期末の竪穴住居1棟と屋外炉3基、後期の竪穴住居2棟と埋設土器2基、石棒などが見つかっている<sup>9)</sup>。近くにある覚正垣内遺跡(10)では後期の土坑や埋設土器などが見つかっている<sup>9)</sup>。川を下った北野遺跡(11)では、前期後半の竪穴住居や土坑、土器、多様な石器が見つかり、球状耳飾などの装飾品も出土している<sup>9)</sup>。

右岸では、小高い丘陵の上にある権現坂遺跡(12)で晩期の深鉢を転用した合口土器棺墓2基が出土している<sup>9)</sup>。少し下流の宮山遺跡(13)では、後期～晩期の土器群、平地式住居、深鉢を転用した土器棺墓1基が見つかっている<sup>9)</sup>。中山遺跡(14)では、石畿を中心に、石斧や石棒などの多様な石器類が採

集されている<sup>9)</sup>。

**弥生時代** この時代の遺跡はほとんど知られていないが、宮山遺跡では、周辺の青川で採集されるハイアロクラスタイト製の磨製石斧の未成品が多数出土し、石器製作場であったと考えられている。また中期の竪穴住居や倉庫と考えられる掘立柱建物、弥生時代末期～古墳時代初頭の方形溝溝墓なども見ついている<sup>9)</sup>。

その他、東村城跡(15)では前期～中期の土器が見つかっており<sup>9)</sup>、川向遺跡では後期の土器が見つかっている<sup>9)</sup>。また見性寺遺跡(16)、正邸遺跡(17)などでも遺物が採集されている<sup>9)</sup>。

**古墳時代** 員弁川流域には多くの古墳が築造されている。旧北勢町阿下喜周辺では、町割古墳(18)、別当古墳(19)、鳥坂古墳(20)、谷坂古墳群(21)、堂ノ上古墳群(22)、八幡山古墳(23)が確認されており、大西神社古墳群(24)からは須恵器杯蓋、鉄刀、鉄鏃、金環などが出土している<sup>9)</sup>。遺跡では、上惣作遺跡(25)で前期の竪穴住居1棟<sup>9)</sup>、塚原遺跡(26)で前期の竪穴住居3棟が確認されている<sup>9)</sup>。

後期になると、宇賀川流域で群集墳が築造され始める。川の左岸には野々田古墳群(27)、南林古墳

群(28)、上小原古墳群(29)、上松崎古墳群(30)などが築造され、下小原古墳群(31)は6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室を主体とする群集墳で、22基の小円墳群が確認されている<sup>90</sup>。右岸では野添古墳群(32)、大辻古墳群(33)などがあり、宇賀新田古墳群(34)でも6世紀後半～7世紀前半の横穴式石室を主体とする群集墳が確認されている<sup>91</sup>。南の段丘上の坂井谷口古墳群(35)、上大谷古墳(36)、石仏古墳(37)、船臥古墳群(38)、蛇塚古墳(39)は、単独もしくは数基の円墳で形成されるものがほとんどである<sup>92</sup>。

その他、山田川流域には北野中古墳群(40)、二子塚古墳(41)、其原南古墳(42)がある<sup>93</sup>。また麻績塚1号墳(43)は、全長43mの前方後方墳と考えられている<sup>94</sup>。

**古代** 川向遺跡では奈良時代の掘立柱建物が見ついている<sup>95</sup>。上惣作遺跡からは、竪穴住居と掘立柱建物が多数見つかっており、7世紀半ばから集落を形成し、7世紀後半には住居として掘立柱建物を利用していたと思われる<sup>96</sup>。近くにある塚原遺跡でも奈良時代の竪穴住居3棟と掘立柱建物3棟が見ついている<sup>97</sup>。

権現坂遺跡では奈良時代末～平安時代前半の集落と思われる竪穴住居が見ついている。遺物では「衆名固依」刻印の須恵器が出土しており、他に緑釉陶器片、円面硯など、この地域における他の遺跡の出土傾向と異なる特徴がうかがえる<sup>98</sup>。

**中世** 川向遺跡、上惣作遺跡、覚正垣内遺跡、権現坂遺跡では、鎌倉時代～室町時代にかけての掘立柱建物が見ついている<sup>99</sup>。また川向遺跡、覚正垣内遺跡では、墨書山茶碗が出土している<sup>100</sup>。

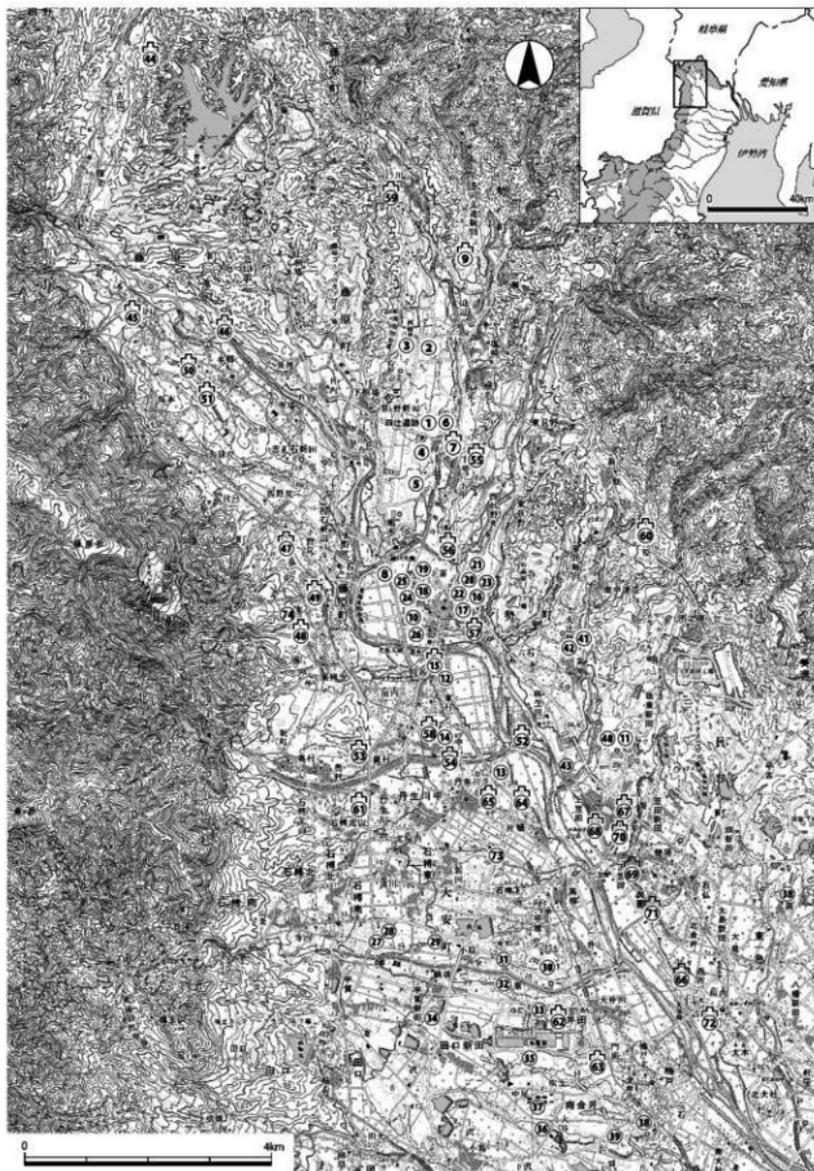
また、室町～戦国時代の当地域は「十ヶ所人数」「北方一揆」と呼ばれる室町幕府の奉公衆・地侍が支配しており<sup>101</sup>、員弁川流域の丘陵に多くの中世城館が築城されている。田藤原町では古田城跡(44)、上平野城跡(45)、白瀬城跡(46)、西野尻城跡(47)、東禅寺城跡(48)、石川城跡(49)、玉垣城跡(50)、本郡城跡(51)。旧北勢町では麻生田城跡(52)、治田城跡(53)、中山城跡(54)、田辺城跡、向平城跡、下平城跡(55)、飯倉城跡(56)、上木城跡(57)、東村城跡、東村B城跡(58)、川原城跡(59)、北中

津原城跡(60)。旧大安町では丹生川上城跡(61)、大井田城跡(62)、梅戸城跡(63)、大久保城跡(64)、野田丸城跡(65)。旧員弁町では金井城跡(66)、宇野城跡(67)、上笠田城跡(68)、下笠田城跡(69)、もんのしろ遺跡(70)、御園城跡(71)、大泉屋敷跡(72)が確認されている<sup>102</sup>。

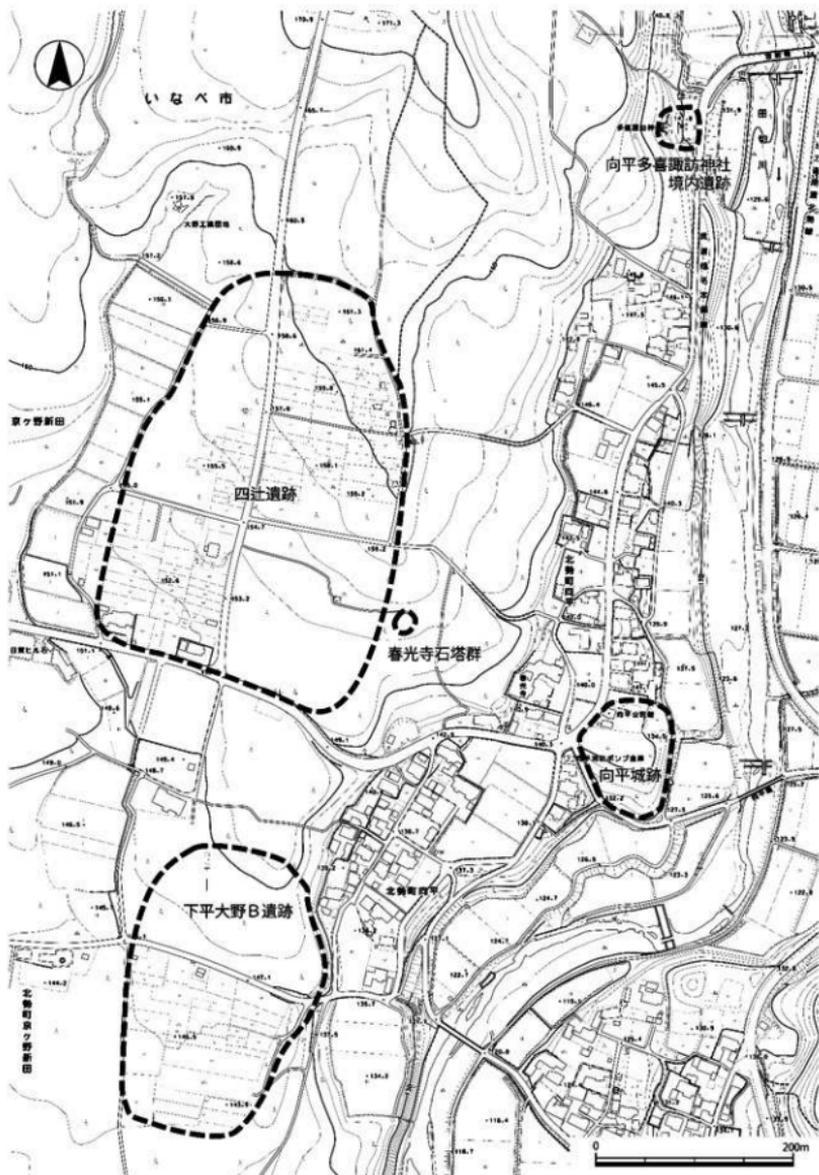
他に中世墓として、経塚中世墓(73)は、東に面する丘陵に営まれた鎌倉時代の塚、土坑墓、火葬土坑からなる遺跡である。頂上部に経を埋めた塚を築き、そのすぐ下に中心となる墓を、その下方に丘陵の等高線に沿うように数段の墓域を形成して墓が営まれたようである。中世墓は縄で覆われた土坑墓と蔵骨器、火葬墓からなる。発掘調査によって確認した土坑墓は22基、蔵骨器は18個以上あったものと思われる。加えて火葬墓2基、火葬土坑5基が確認されている<sup>103</sup>。東禅寺中世墓(74)では蔵骨器10点余が採集され、丹生川上城跡では12世紀後半～13世紀前半の土坑墓数基<sup>104</sup>、東村城跡では13世紀頃と思われる土坑墓1基が見ついている<sup>105</sup>。また四辻遺跡に隣接する春光寺石塔群では中世の宝篋印塔や五輪塔が確認されている<sup>106</sup>。

## 【註】

- ①北勢町教育委員会『川向遺跡発掘調査報告』1993。
- ②北勢町教育委員会『北勢町田辺城趾隣接地 遺跡調査報告』1980。
- ③勝山孝文「いなべ市空畑遺跡採集の縄文時代遺物が提起する問題」『研究紀要 第20号』三重県埋蔵文化財センター 2011。
- ④(前掲 註①)。
- ⑤三重県埋蔵文化財センター『覚正垣内遺跡発掘調査報告』2003。
- ⑥員弁町教育委員会『北野遺跡第2次発掘調査報告』1994。  
藤山誠一「北野遺跡」『三重県史 資料編 考古1』三重県 2005。
- ⑦三重県埋蔵文化財センター『権現坂遺跡発掘調査報告』2002。
- ⑧三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡発掘調査報告』1999。  
三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡(第2次)・大久



第5圖 遺跡位置圖 (1:80,000) 『國土地理院 (1:25,000)「駒野」「阿下暮」「菰野」「鶴立」「竜ヶ岳」に加筆作成』



第6図 遺跡地形図 (1:5,000) [三重県共有デジタル地図2011に加筆作成]

- 保城跡発掘調査報告』2003。
- ㉑川瀬聡『北勢町中山遺跡とその遺物』『研究紀要 第8号』三重県埋蔵文化財センター 1999。
- ㉒(前掲 註⑤)
- ㉓三重県埋蔵文化財センター『東村城跡』2000。
- ㉔(前掲 註①)
- ㉕いなべ市教育委員会『三重県いなべ市 市内遺跡分布地図』2009。
- ㉖北勢町『北勢町史』2000。
- ㉗いなべ市教育委員会『上惣作遺跡第2次発掘調査報告』2013。
- いなべ市教育委員会『上惣作遺跡発掘調査報告』2008。
- 三重県埋蔵文化財センター『上惣作遺跡発掘調査報告』2001。
- ㉘北勢町教育委員会『塚原遺跡』2002。
- ㉙大安町教育委員会『下小原古墳群発掘調査報告』1993。
- 大安町『大安町史 第一巻』1986。
- ㉚大安町教育委員会・三重大学人文学部考古学研究室『宇賀新田古墳群』2003。
- 大安町『大安町史 第一巻』1986。
- ㉛大安町『大安町史 第一巻』1986。
- ㉜(前掲 註③)
- ㉝(前掲 註④)
- ㉞(前掲 註①)
- ㉟(前掲 註⑤)
- ㊱(前掲 註⑥)
- ㊲(前掲 註⑦)
- ㊳(前掲 註①・⑤・⑦・⑧)
- ㊴(前掲 註①・⑤)
- ㊵飯田良一「北伊勢の国人領主 ～十ヶ所人数、北方一揆を中心として～」『年報中世史研究9』中世史研究会 1984。
- ㊶(前掲 註③)
- ㊷三重県埋蔵文化財センター『経塚中世墓発掘調査報告 研究紀要 第19-2号』2010。
- ㊸いなべ市教育委員会『第二十四輯 ふるさと的心をたずねて』2004。
- ㊹三重県教育員会『丹生川上城跡発掘調査報告』1985。
- ㊺(前掲 註⑩)
- ㊻(前掲 註③)

1 四辻遺跡	20 鳥坂古墳	39 蛇塚古墳	58 東村B城跡
2 空畑遺跡	21 谷坂古墳群	40 北野中古墳群	59 川原城跡
3 塩崎京ヶ野遺跡	22 堂ノ上古墳群	41 二子塚古墳	60 北中津原城跡
4 下平大野B遺跡	23 八幡山古墳	42 其原南古墳	61 丹生川上城跡
5 下平大野A遺跡	24 大西神社古墳群	43 麻績塚1号墳	62 大井田城跡
6 春光寺石塔群	25 上惣作遺跡	44 古田城跡	63 梅戸城跡
7 向平城跡	26 塚原遺跡	45 上平野城跡	64 大久保城跡
8 川向遺跡	27 野々田古墳群	46 白瀬城跡	65 野田丸城跡
9 田辺城跡	28 南林古墳群	47 西野尻城跡	66 金井城跡
10 覚正垣内遺跡	29 上小原古墳群	48 東禅寺城跡	67 宇野城跡
11 北野遺跡	30 上松崎古墳群	49 石川城跡	68 上笠田城跡
12 権現坂遺跡	31 下小原古墳群	50 玉垣城跡	69 下笠田城跡
13 宮山遺跡	32 野添古墳群	51 本郷城跡	70 もんのしろ遺跡
14 中山遺跡	33 大辻古墳群	52 麻生田城跡	71 御園城跡
15 東村城跡	34 宇賀新田古墳群	53 治田城跡	72 大泉屋敷跡
16 見性寺遺跡	35 坂井谷口古墳群	54 中山城跡	73 経塚中世墓
17 正邸遺跡	36 上大谷古墳	55 下平城跡	74 東禅寺中世墓
18 町割古墳	37 石仏古墳	56 飯倉城跡	
19 別当古墳	38 船臥古墳群	57 上木城跡	

第2表 周辺遺跡一覧

### 第三章 基本層序

四辻遺跡は、標高156m付近、員弁川の北にある中位段丘面<sup>3)</sup>に立地する。調査前の現況は、畑地や山林、荒地であった。段丘面は北から南へゆるやかに下がっており、遺跡内の南北の高低差は約5mある。また東側より西側が約2m低くなっている。

調査は、1～3工区（第2次調査）、4・5工区（第3次調査）、6工区（第4次調査）と、6つの工区に分けて行った（第3・4図）。

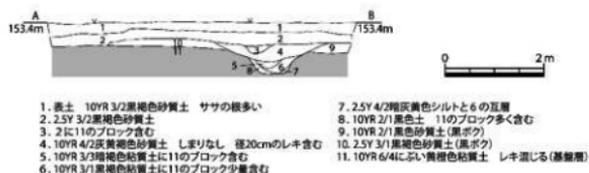
各調査区の層序は基本的に、①表土（盛土・整地土等を含む）、②黒ボク層：黒色～黒褐色砂質土～シルト、③黒ボク層と基盤層の漸移層：黒褐色～暗褐色粘質土～シルト、④基盤層：暗オリーブ褐色～明黄褐色粘質土～シルトの4層である<sup>2)</sup>。

縄文時代早期の遺構は漸移層、それ以降の新しい遺構は黒ボク層の途中から確認できる部分もあったが、遺構埋土の上層部は周囲の土壌と同化が進んでおり明確に識別することは困難であった。そのため、いずれの時代の遺構も、漸移層の下層～基盤層の上層で検出を行っている。

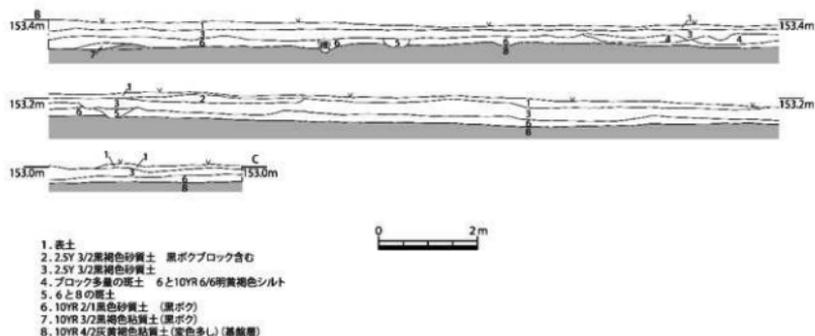
#### 【註】

①吉田史郎・栗本史雄・宮科学「桑名地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』通商産業省工業技術院地質調査所 1991。

②1～3工区の土層断面図では黒ボク層に漸移層を含んでいる。



第7図 1工区東壁土層断面図 (1:100)

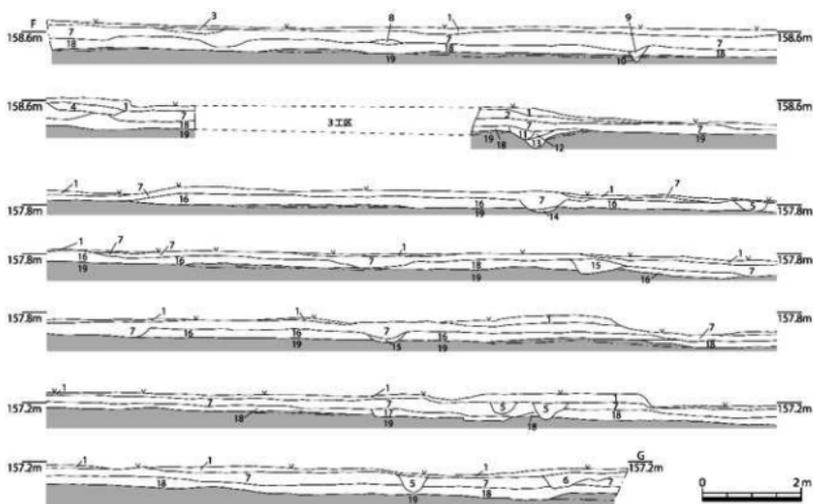


第8図 1工区南壁土層断面図 (1:100)



- |                    |                              |
|--------------------|------------------------------|
| 1. 10YR 4/1 褐灰色砂質土 | 5. 10YR 2/2 黒褐色粘質土 (黒ボク)     |
| 2. 10YR 3/2 黒褐色粘質土 | 6. 10YR 6/4C にふい 黄褐色粘土 (基盤層) |
| 3. 2.5Y 4/1 黄灰色砂質土 | 7. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (基盤層) |
| 4. 3 に 7 のブロック含む   |                              |

第9図 2工区北壁土層断面図 (1:100)



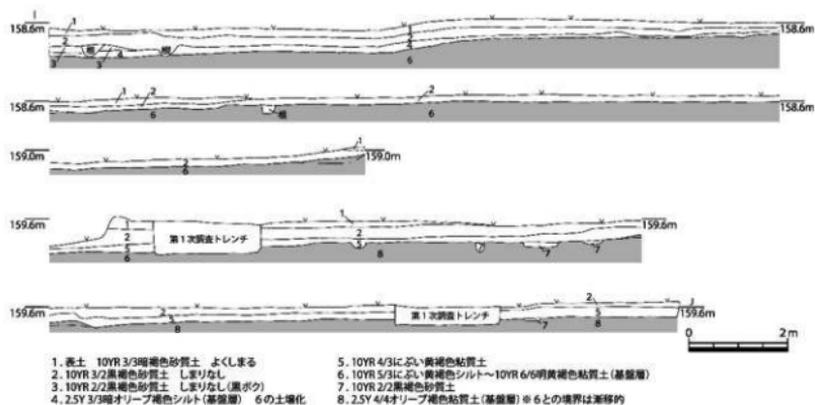
- |   |                                    |
|---|------------------------------------|
| 1. 表土   | 10. 10YR 2/1 黒色粘質土                 |
| 2. 10YR 3/3 暗褐色砂質土                                  | 11. 10YR 3/1 黒褐色粘質土                |
| 3. 礫  | 12. 10YR 2/1 黒色粘質土                 |
| 4. 10YR 3/1 黒褐色砂質土 (下部に10YR 6/4C にふい 黄褐色粘土ブロック多く含む) | 13. 12に19のブロック多く含む                 |
| 5. 2.5Y 4/1 黄灰色砂質土                                  | 14. 10YR 2/1 黒色砂質土に19のブロック多く含む     |
| 6. 7に18のブロック含む (増丸)                                 | 15. 2.5Y 4/1 黄灰色砂質土                |
| 7. 10YR 4/1 褐灰色砂質土                                  | 16. 19のブロック含む10YR 2/1 黒色砂質土        |
| 8. 10YR 4/2 灰黄褐色粘質土                                 | 17. 18に19のブロック含む                   |
| 9. 10YR 2/2 黒褐色粘質土 (10YR 6/4C にふい 黄褐色粘土ブロック含む)      | 18. 10YR 2/1 黒色砂質土 (黒ボク) (上部で遺構検出) |
|   | 19. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (基盤層)      |

第10図 2工区東壁土層断面図 (1:100)

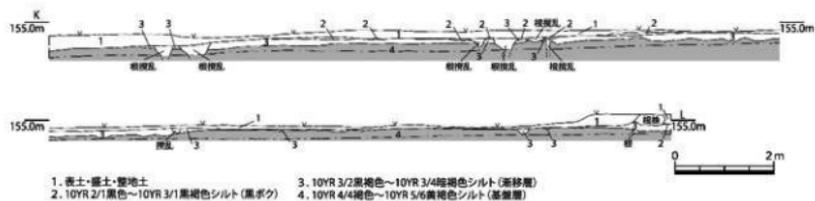


- |                                 |                             |
|---------------------------------|-----------------------------|
| 1. 表土                           | 10YR 3/3 暗褐色砂質土 よくしまる       |
| 2. 10YR 3/2 黒褐色粘質土              | しまりなし                       |
| 3. 2.5Y 2/1 黒色砂質土 (黒ボク)         |                             |
| 4. 10YR 3/3 暗褐色粘質土              |                             |
| 5. 10YR 2/1 黒色砂質土               | 10YR 5/6 黄褐色粘土 (基盤層) ブロック含む |
| 6. 10YR 2/2 黒褐色に9と10の小ブロックを多く含む |                             |
| 7. 10YR 2/2 黒褐色に9と10の大ブロックを多く含む |                             |
| 8. 10YR 2/2 黒褐色砂質土              | しまりなし (黒ボク)                 |
| 9. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色シルト (基盤層)    | 10の土壌化                      |
| 10. 10YR 5/3 にふい 黄褐色シルト (基盤層)   |                             |

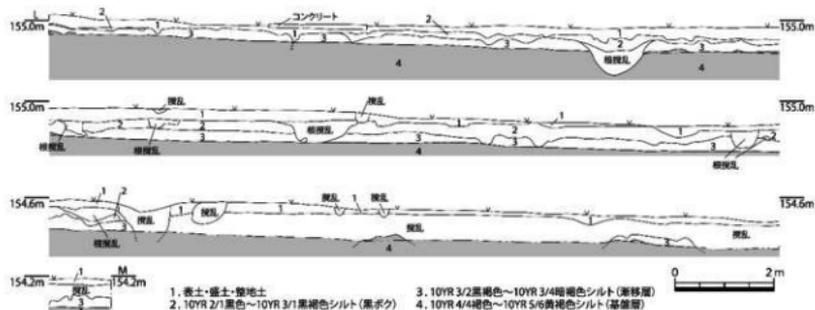
第11図 3工区西壁土層断面図 (1:100)



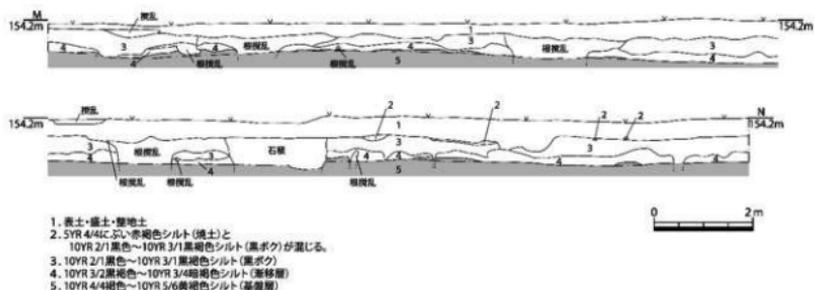
第12図 3工区北壁土層断面図(1:100)



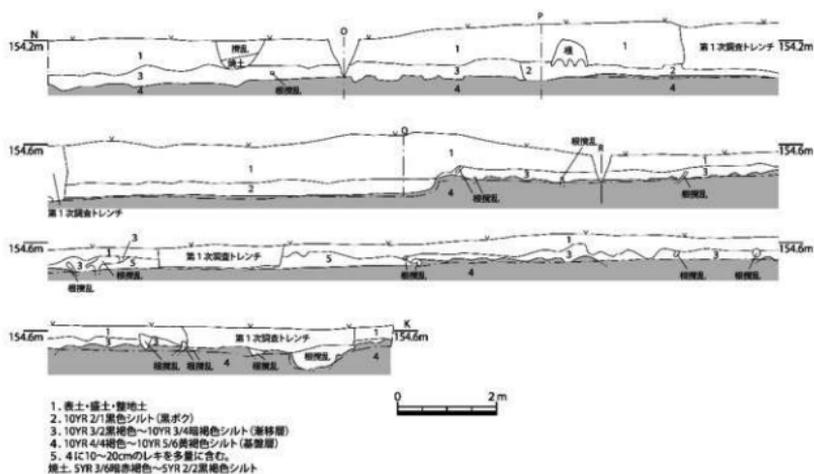
第13図 4工区北壁土層断面図(1:100)



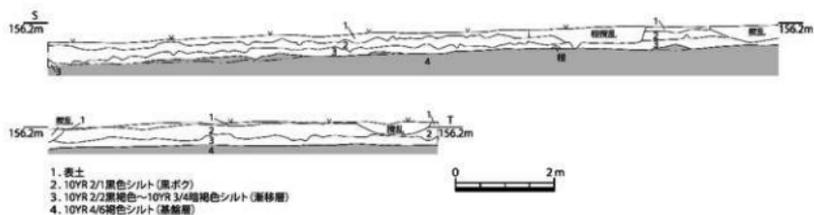
第14図 4工区東壁土層断面図(1:100)



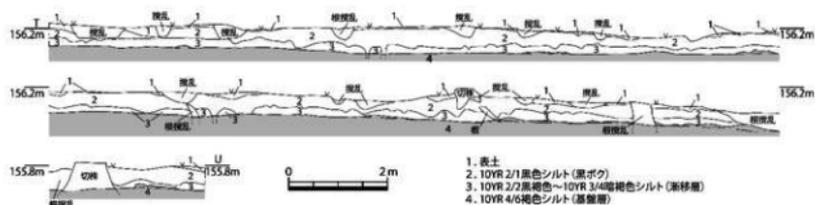
第15図 4工区南壁土層断面図 (1:100)



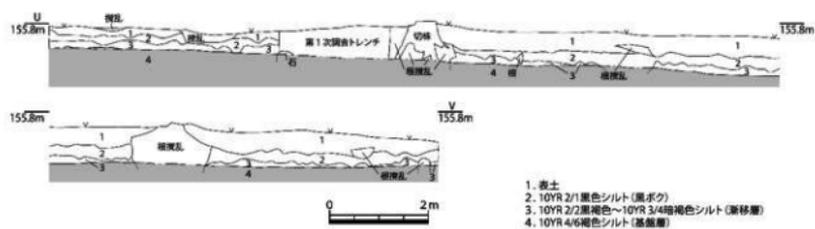
第16図 4工区西壁土層断面図 (1:100)



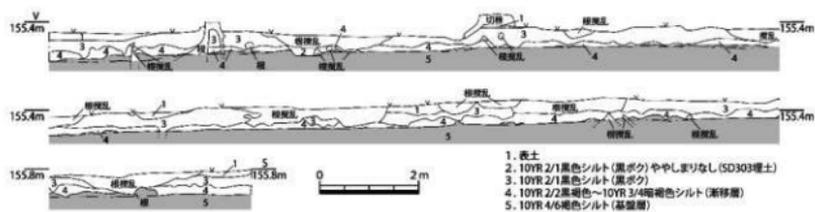
第17図 5工区北壁土層断面図 (1:100)



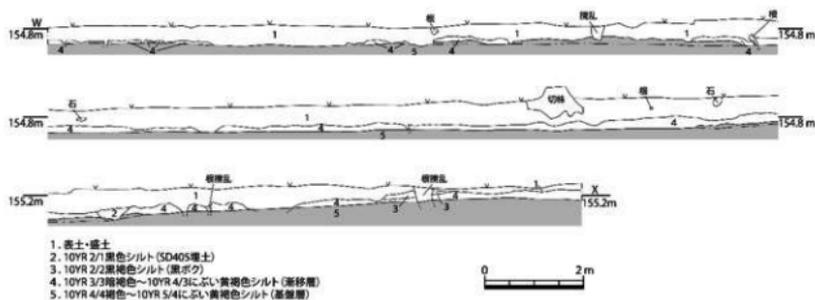
第18図 5工区東壁土層断面図 (1:100)



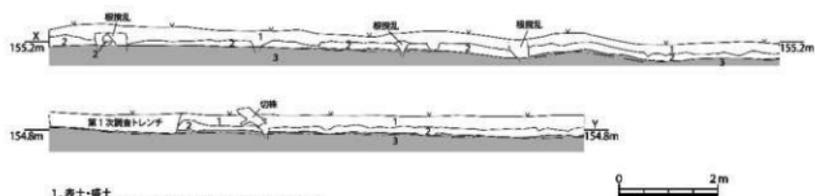
第19図 5工区南壁土層断面図 (1:100)



第20図 5工区西壁土層断面図 (1:100)

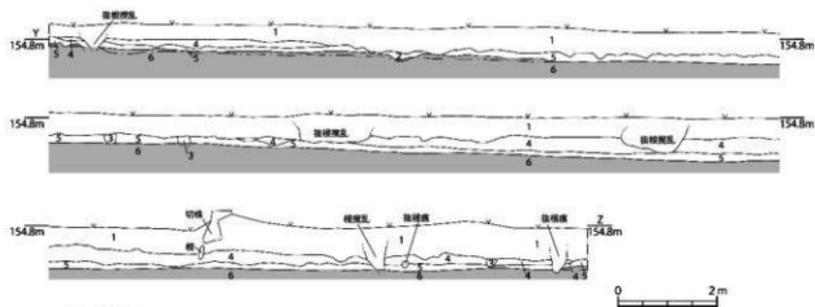


第21図 6工区北壁土層断面図 (1:100)



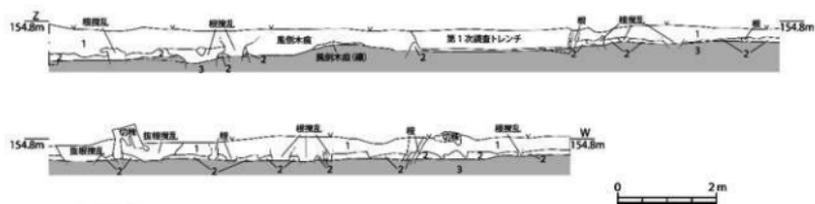
1. 表土・盛土
2. 10YR 3/3暗褐色～10YR 4/3にぶい黄褐色シルト(漸移層)
3. 10YR 4/4褐色～10YR 5/4にぶい黄褐色シルト(基盤層)

第22図 6工区東壁土層断面図 (1:100)



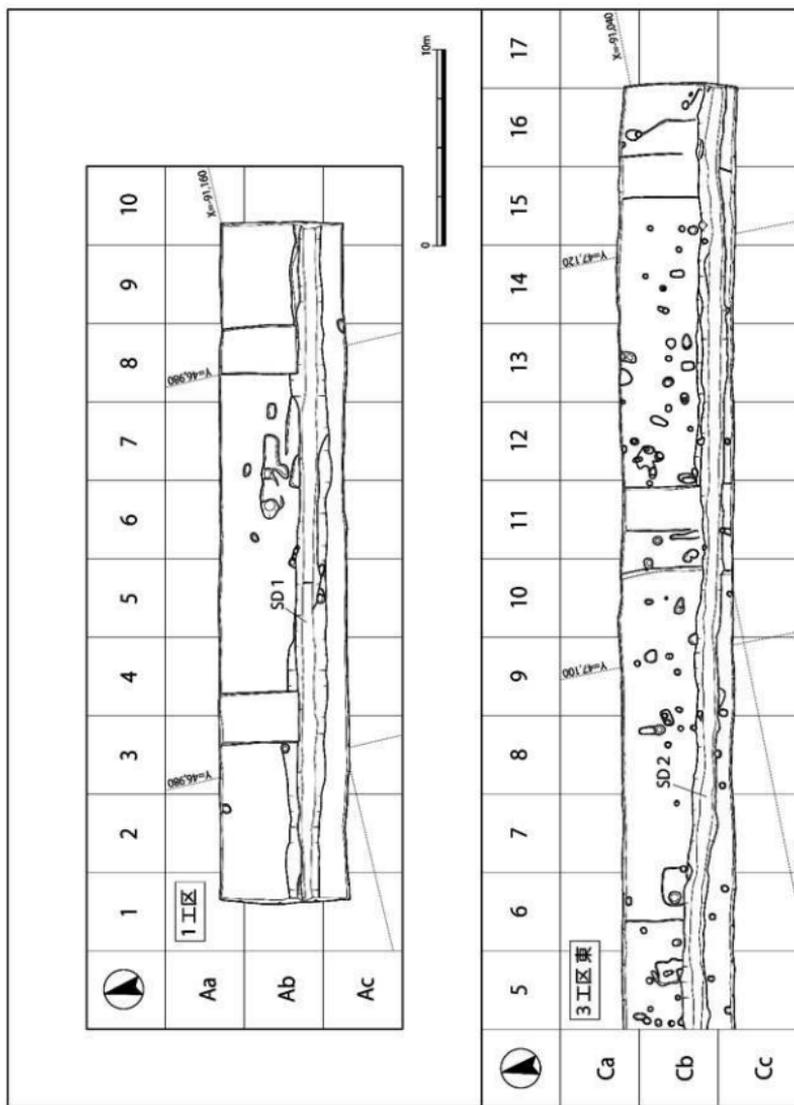
1. 表土・盛土・埋瓦
2. 10YR 1.7/1黒色シルトに10YR 3/4暗褐色シルトがブロック状に混じる(SD405埋土)
3. 10YR 1.7/1黒色シルト(近世の埋土)
4. 10YR 2/7黒色～10YR 2/2紫褐色シルト(黒ボク)
5. 10YR 3/3暗褐色～10YR 3/4暗褐色シルト(漸移層)
6. 10YR 4/4褐色シルト～10YR 5/4にぶい黄褐色シルト(基盤層)

第23図 6工区南壁土層断面図 (1:100)

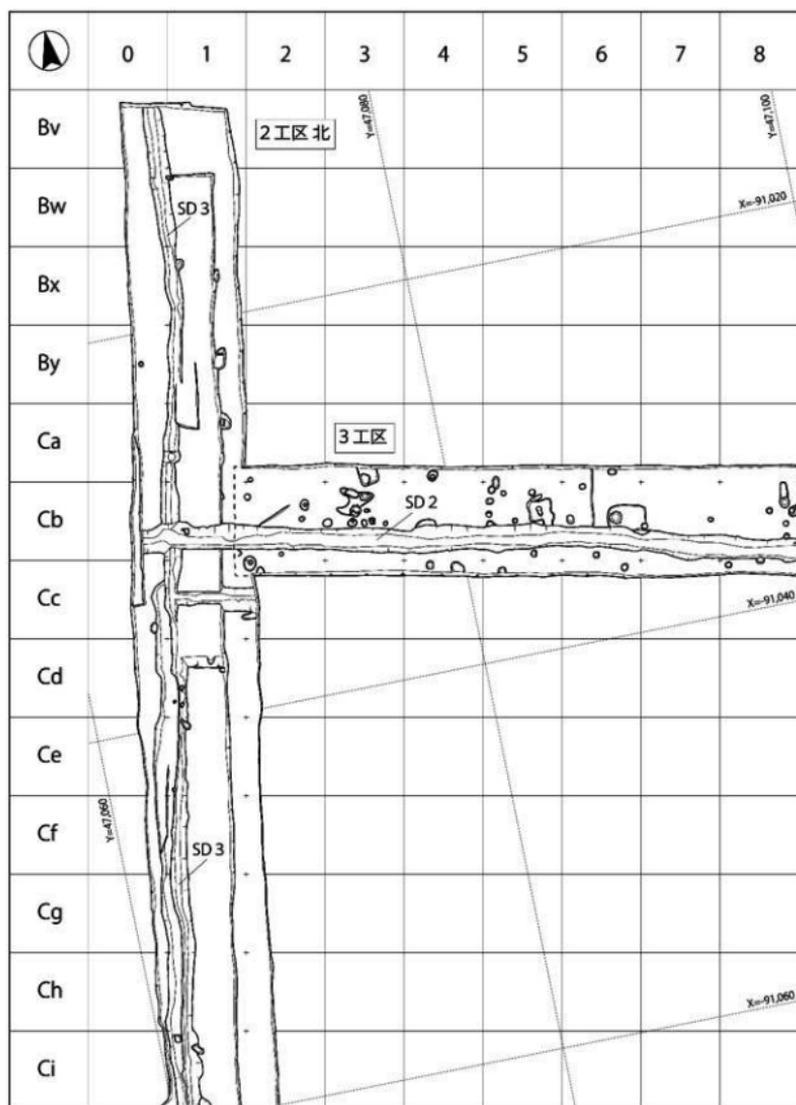


1. 表土・盛土・埋瓦
2. 10YR 3/3暗褐色シルト～10YR 3/4暗褐色シルト(漸移層)
3. 10YR 4/4褐色シルト～10YR 5/4にぶい黄褐色シルト(基盤層)

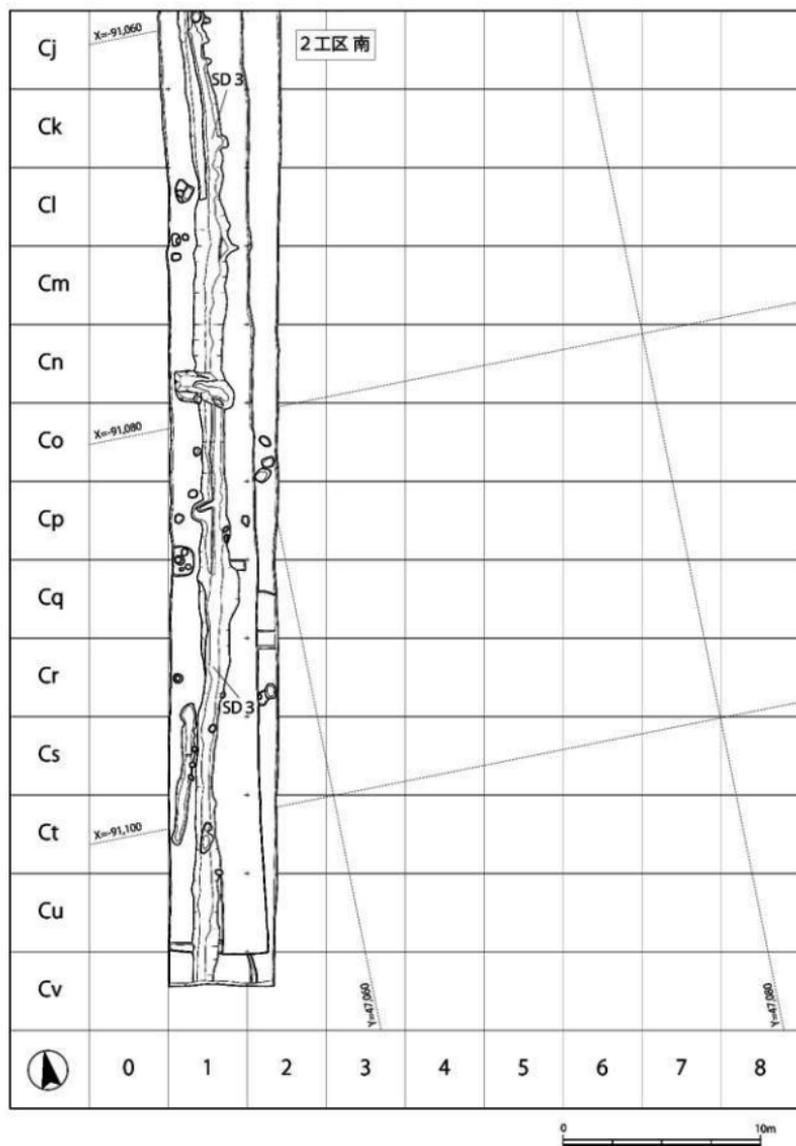
第24図 6工区西壁土層断面図 (1:100)



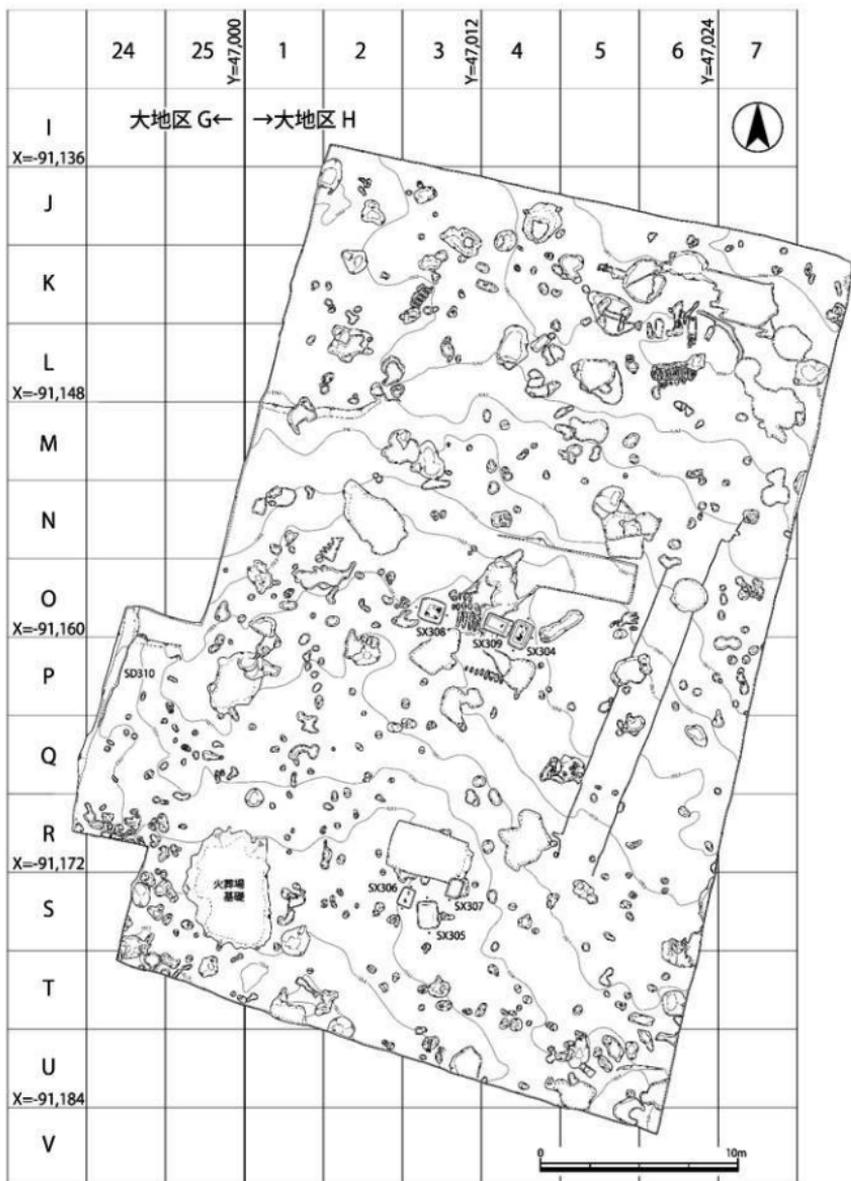
第25図 1区・3区東 遺構平面図 (1:250)



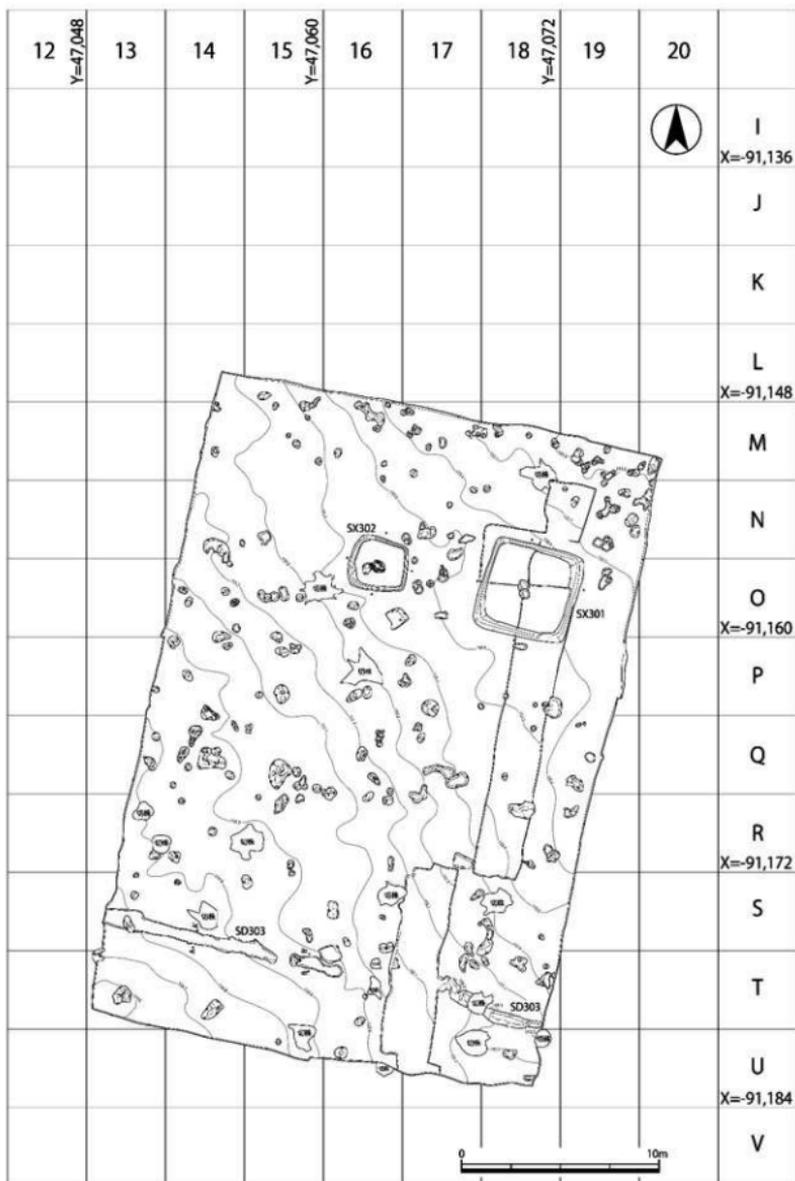
第26图 2工区北・3工区 遺構平面図 (1:250)



第27图 2工区南 遺構平面図 (1:250)



第28图 4工区遺構平面図 (1:250)



第29图 5工区遺構平面図 (1:250)



## 第IV章 遺構

四辻遺跡の遺構には、縄文時代、中世、近世、近代以降および時期不明のものがある。旧石器時代の可能性のある遺物もみつかっているが、当該期の遺

構は確認できなかった。以下、各時代ごとに記述する。

### 第1節 縄文時代

縄文時代早期前半の竪穴建物3棟、土坑1基を確認した。

#### (1) 竪穴建物

**S H402** (第31図) 6工区の中央南側で検出した竪穴建物である。平面形は径4.5m～4.7mの円形を呈する。検出面からの深さは0.3mである。遺構埋土は黒褐色～褐色シルトの1層として記録したが、上層ほど色調の暗くなる漸移的な堆積である。建物内に炉跡は確認できず、支柱穴といえる穴も確認できなかった。

遺物は、押型文土器片が7点(うち、実測できたものは5点(第45図2～6))、打欠石鏝1点(7)、チャート製の石核1点(1)が出土した(第V章参照)。チャート製の石核は、細石刃核の可能性があり、旧石器時代のものが埋設過程で混じり込んだ可能性がある。押型文土器は文様の判別できるものは、いずれもネガティブ文であり、口縁部小片(2)の特徴は神宮寺式に相当する。遺構の所属時期はこれら押型文土器と同じ縄文時代早期前半とみられ、遺構の規模や構造もこの時期の竪穴建物として矛盾しないものである<sup>3)</sup>。

**建物内土坑** S H402内の北東部で0.7m×0.5m、深さ0.2mの土坑を検出した。この土坑は、S H402の埋土を切って掘削されていないことは平面検出の際に確認できたが、逆に、S H402に切られているかどうかについては断面で検証することができなかったため不明である。土坑の埋土はS H402の下層付近のものと色調・土質ともに類似しており、S H402の埋土と同一のものであるならば、建物使用時に開口していた可能性も考えられる。その場合、規模・形状等から貯蔵穴的な施設である可能性が考えられるが、この時期の竪穴建物から貯蔵穴が確認された例はほとんどない<sup>4)</sup>。

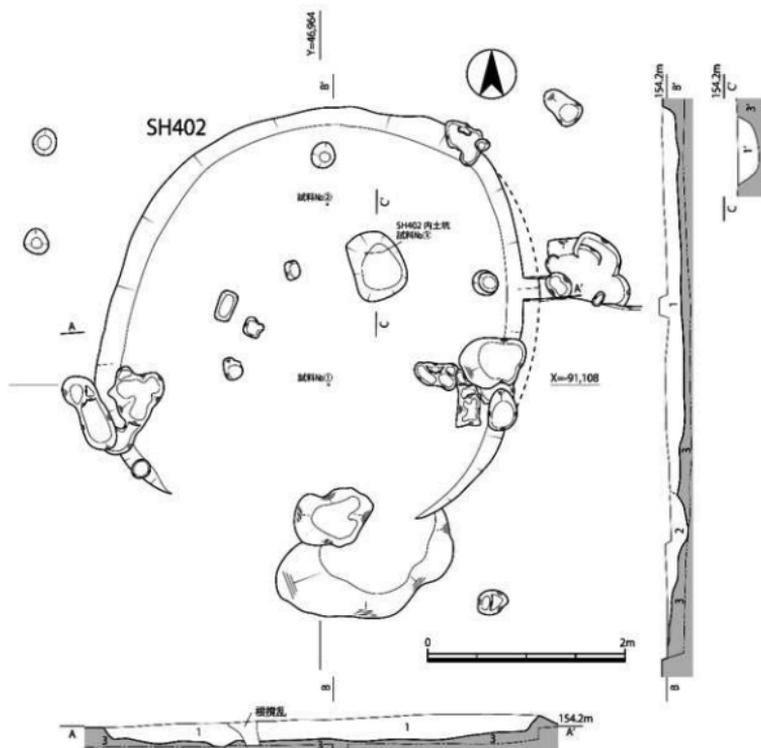
土坑からは土器細片が1点出土している。胎土・焼成等の特徴は先述のS H402出土の押型文土器に類似しているが、文様等が残っていないため、この遺物からの時期の特定は難しい。

現地調査終了後、土坑の性格・用途およびS H402との新旧関係を探るため、土坑底面から採取した木炭(試料№③)の樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。その結果、木炭の樹種はコナラ属コナラ節の植物であり、測定年代はS H402から採取した木炭(試料№①・②)の測定年代とほぼ重なるものであった(詳細は第VI章を参照)。建物使用時に開口していた可能性は残るものの、遺構の性格については不明である。

**南側の凹み** S H402の南側に重複して浅い土坑状の凹みが存在する。S H402とは埋土が類似しており、平面検出時はS H402との切り合いを識別できなかった。断ち割って土層断面を確認したところ、埋土にやや色調の違いが認められたため、不明瞭ではあったが、この色調の違いをもとにS H402との切り合いを検討し、S H402より新しい凹みと判断した。また、凹みの断面や底面の形状がいびつであることから、浅く小規模な風倒木痕と解釈した。しかし、切り合いが不明瞭であるため、仮に切り合いの有無を誤認していた場合、この凹みはS H402の入口施設等の痕跡である可能性も考えられる。

**S H404** (第33図) 6工区の東側で検出した竪穴建物である。後述のS H406と重複しており、新旧関係はS H406よりS H404が新しい。ただし、切り合いは不明瞭であった。

平面形は3.5m～3.8mの円形を呈し、検出面からの深さは0.2mである。遺構埋土は黒褐色～暗褐色シルトで、S H402同様に上層ほど色調の暗くなる漸移的な堆積である。建物内に炉跡は確認できず、



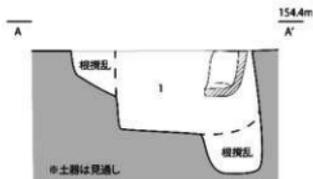
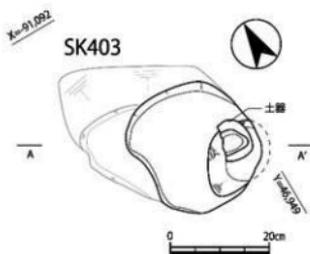
【SH402】

- 1 10YR2/2黒褐色～10YR4/4暗色シルト 上層ほど暗色になる (SH402雑土)
- 2 10YR2/2黒褐色～10YR4/4暗色シルト 上層ほど暗色になるが、1より全体的にやや明るい  
1との境界は不明瞭 (黒色木炭雑土)
- 3 10YR3/4暗褐色～10YR5/4にぶい黄褐色シルト 上層ほど暗色になる やや粘質 (基礎層)

【SH402内土坑】

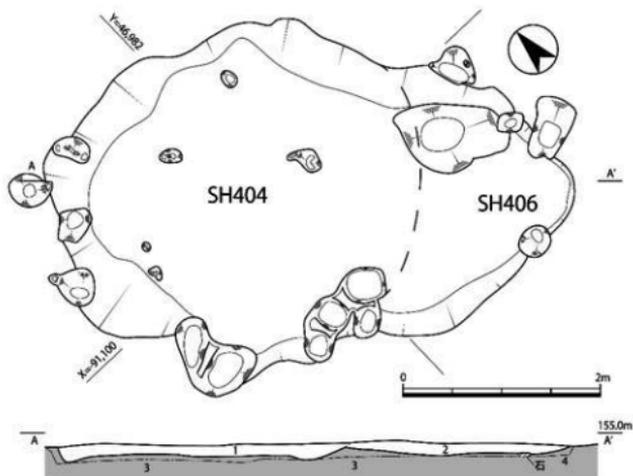
- 1' 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (土坑雑土)
- 3' 10YR5/4にぶい黄褐色シルト (基礎層)

第31図 SH402実測図 (1:50)



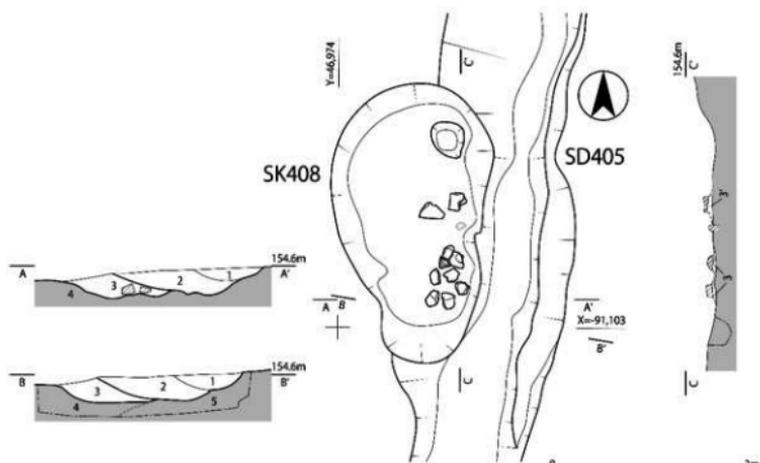
1 10YR2/2黒褐色シルト 根攪乱との境界は不明瞭  
◎土器は見出し

第32図 SK403実測図 (1:10)



- 1 10YR2/3黒褐色シルト～10YR3/4暗褐色シルト 上面ほど暗色になる(SH404埋土)
- 2 10YR2/3黒褐色シルト～10YR3/4暗褐色シルト 上面ほど暗色になる(SH406埋土) ※1と2の境界は不明瞭
- 3 10YR4/6褐色粘質シルト(基盤層)
- 4 10YR4/6褐色シルト 礫を多く含む(基盤層) ※3と4の境界は漸移的で不明瞭

第33図 SH404・SH406実測図(1:50)



- 1 10YR2/1黒色シルト(SD405新埋土)
  - 2 10YR4/6褐色シルトに10YR2/1黒色シルトが混じる(SD405旧埋土)
  - 3 10YR2/3黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト 土層中、炭化物粒を少量含む(SK408埋土)
  - 4 10YR4/6褐色シルト(基盤層)
  - 5 10YR4/6褐色シルト 礫を多く含む(基盤層)
- ※4と5の境界は漸移的で不明瞭

第34図 SD405・SK408実測図(1:50)

主柱穴といえる穴も確認できなかった。

遺物は、押型文土器片が17点（うち、実測できたものは2点（8・9））とチャートの剥片1点（10）が出土した（第V章参照）。出土した押型文土器は特徴から縄文時代早期前半のものとみられ、遺構の構造等もこの時期のものとして大きな矛盾はみられないものである。

**SH406**（第33図） 6工区の東側で検出した堅穴建物である。上述のSH404と重複しており、新旧関係はSH404よりSH406が古い。ただし、切り合いは不明瞭であった。

遺構の上層を後世の耕作により、また、西側の大半をSH404に削平されているため全体形は不明であるが、底面の一部を2.5m×2.7m、深さ0.1mの範囲で検出できた。形状等から堅穴建物の一部であると判断した。

遺構埋土は黒褐色～暗褐色シルトで上層ほど色調の暗くなる漸移的な堆積である。建物内にが跡は確認できず、主柱穴といえる穴も確認できなかった。

遺物は、押型文土器片が2点（細片のため実測できず）、チャート製の石礫1点（11）、チャートの剥片1点（12）が出土した（第V章参照）。

遺構埋土の篩掛けで得られた炭化物（木炭）の年代測定を行ったところ、縄文時代早期前半に相当する結果が出ている（第VI章参照）。

## （2）土坑

**SK408**（第34図） 6工区の東側で検出した土坑である。近世の溝（SD405）に遺構の東側を削平されている。平面形は、長径2.9m・短径1.6mの楕円形を呈し、深さは0.3mである。底面から礫が10

点出土した。いずれの礫も使用痕はなく、被熱している様子もみられないが、うち4点は摩耗していない破断面があり、人為的に破砕されている可能性が窺えた。破砕された可能性の窺える礫はいずれも接合するものではなく、別個体である。すべての礫の下には土坑の埋土と同様の黒褐色～暗褐色シルトが入っており、地山に直接、接していないことは明瞭に確認できた。礫は土坑中央部の2点と南部の8点の2群に分かれており、中央部の2点はやや大ぶりで破断面が多く、南部の8点はやや小ぶりで破断面のないものが多い。礫の石材はいずれも砂岩であり、同様の大きさ・形状のものは、遺跡内の地山に多数含まれており、また丘陵下の田切川の川原でも容易に入手できるものである。

遺物は、押型文土器小片1点（15）とチャートの剥片1点（16）が出土した（第V章参照）。押型文土器は特徴から縄文時代早期前半のものとみられる。埋土の篩掛けで得られた炭化物（木炭）の樹種同定と放射性炭素年代測定を行った結果、樹種はクリ、年代は他の堅穴建物とほぼ同じで土器から想定される年代とも整合的な結果であった（第VI章参照）。

南北方向の土層断面で切り合い関係を確認できないまま掘削してしまったため、断定はできないが、遺構の形状や礫の出土状況等から、径1.0～1.5m程度の円形の土坑が2～3基、重複している可能性も考えられる。仮に重複しているならば、この規模の土坑で底面に礫が入れられる例として、「集石<sup>12)</sup>」があげられるが、被熱礫がまったくみられず、埋土に含まれる炭化物も少ないことからその可能性は低い。現時点では、遺構の性格は不明である。

## 第2節 中世

この時期の遺構として5工区で確認された塚墓が2基ある。

### （1）塚墓

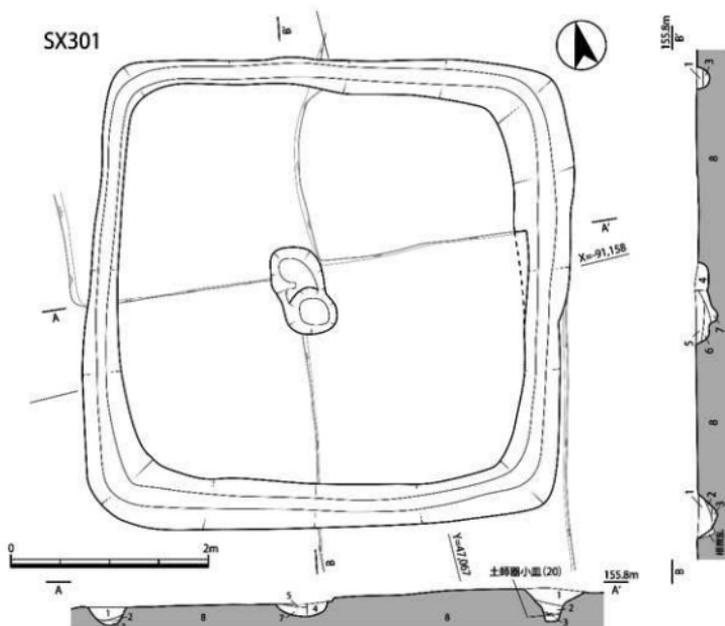
**SX301**（第35図） 5工区の北東部で検出された塚墓である。中央に土坑があり、その周囲は溝で方形に区画されている（以下、周溝）。周溝の南北軸は北に対して12°東に傾いている（N12°E）。

中央の土坑は、平面形が径0.5m×0.9mの楕円形を呈し、深さは約0.2mである。土坑の側面や底面

に焼土や赤変等の被熱痕は確認できなかった。土坑内の埋土は、黒色シルト主体の3層に分層したが、各層の境界はあまり明瞭ではなかった。現地での肉眼観察ではこれらの埋土中に木炭や骨片の含有は認められなかった。また、土坑内からの遺物の出土はなかった。

周溝は、最も残りの良い北東部で、幅0.7m、深さ0.4mの規模がある。溝の1辺の長さは東西南北のいずれも4.5mで統一されているが、断面形は、

SX301



【周溝埋土】

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR2/1黒色シルトに10YR3/2黒褐色シルトが混じる
- 3 10YR2/1黒色シルトに10YR3/3暗褐色シルト～細粒砂が層状に混じる (厚1mm程度の10YR4/4褐色シルト粒を含む)

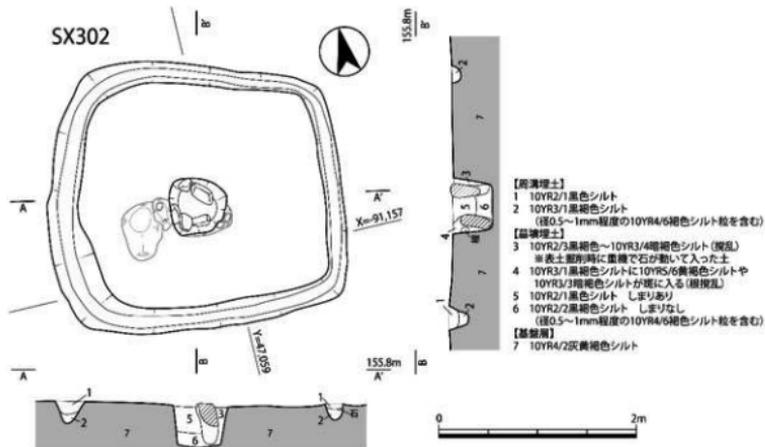
【基礎埋土】

- 4 H28年度の第1次調査で掘削された部分(記述なし)
- 5 10YR2/1黒色シルト
- 6 10YR2/1黒色シルトに10YR4/4褐色シルトがマール状に混じる
- 7 10YR2/1黒色シルトに10YR4/4褐色シルトがブロック状に入る ※5との境界は不明瞭

【基礎層】

- 8 10YR4/4褐色～10YR5/6黄褐色シルト

SX302



【周溝埋土】

- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 10YR3/1黒褐色シルト

【基礎埋土】

- 3 10YR2/3黒褐色～10YR3/4暗褐色シルト (混乱)  
※表土層形成に重層で石が動いて入った土
- 4 10YR3/1黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトや10YR3/1暗褐色シルトが層に入る (層状混)
- 5 10YR2/1黒色シルト しまりあり
- 6 10YR2/2黒褐色シルト しまりなし

【基礎層】

- 7 10YR4/2黄褐色シルト

第35図 S X 301・S X 302実測図 (1:50)

北・南・西辺が単純な丸底であるのに対し、東辺は底面を平坦に整え、側面も途中から角度を変えて屈折させるなど、やや手の込んだ作りとなっている(第35図土層断面参照)。後述するS X302も東辺のみ延長が他の溝と異なっており、東側が墓の正面である可能性が考えられる。

周溝の埋土は2～3層に分層できた。なかでも第2層は、内側から外側に向かって土砂が流れ込んで斜めに堆積しており、周溝の内側に塚状の盛土が存在していたことが想定できるものであった。

遺物は、土層断面図(A-A')をとった位置の第3層から土師器小皿(20)が1点出土した。

出土した土師器小皿の時期から、この塚墓は14世紀に営まれたものと考えられる(第V章参照)。

**S X302**(第35図) 5工区の北部、S X301の西側約4mの位置で検出された塚墓である。中央に土坑があり、その周囲は溝で方形に区画されている(以下、周溝)。周溝の南北軸は北に対して12°東に傾いている(N12°E)。

中央の土坑は、平面形が直径0.6mのやや角張った円形を呈し、深さは0.4mである。側面には部分的に川原石が貼り付けられていた。川原石に加工痕

はみられなかったが、扁平な形状のものを選択して使用している様子が窺えた。川原石および土坑の側面や底面に焼土や赤変等の被熱痕は確認できなかった。

土坑内の埋土は表土掘削時や根による攪乱によって入った土を除外すると第5層と第6層の2層に分層できた。この2層の土色はよく似ていたが、第5層は比較的締まりがあるのに対し、第6層は締まりがなくふわふわした状態で明確に区別できるものであった。現地での肉眼観察ではこれらの埋土中に木炭や骨片の含有は認められなかった。

周溝は、最も残存の良い南西部で、幅は0.4m、深さ0.3mの規模がある。溝の1辺の長さは、北辺・南辺・西辺が2.5mだが、東辺のみ2.0mと短く、東側から見ると平面形は、奥に向かって広がるような台形になる。東辺の溝のみ他の溝と異なっており、前述のS X301と同様に東側が正面である可能性が考えられる。

中央の土坑および周溝のいずれからも遺物の出土はなかったが、S X301とほぼ方位を揃えて作られていることなどから、比較的近い時期に造営されたものと思われる。

### 第3節 近世

この時期の溝7条を確認した。なお、第1次調査において検出された溝についても、ここで報告することとする。

#### (1) 溝

**SD1**(第25図) 1工区で検出した溝である。東西ともに1工区の外まで続いている。この延長部分については、平成28年度の第1次調査において、西側は第22トレンチの西端まで続き、東側は第25-2トレンチ内でSD310に合流していることが確認されている(第28図参照)。なお、SD1とSD310には切り合いが認められ、SD1はSD310に切られていた。

第1次調査で確認された部分を合わせると、溝の延長は50.4mとなる。溝の幅は広いところで1.8m、平均的な検出面からの深さは0.4mである。溝の方位は東に対して12°南に傾いている(E12°S)。

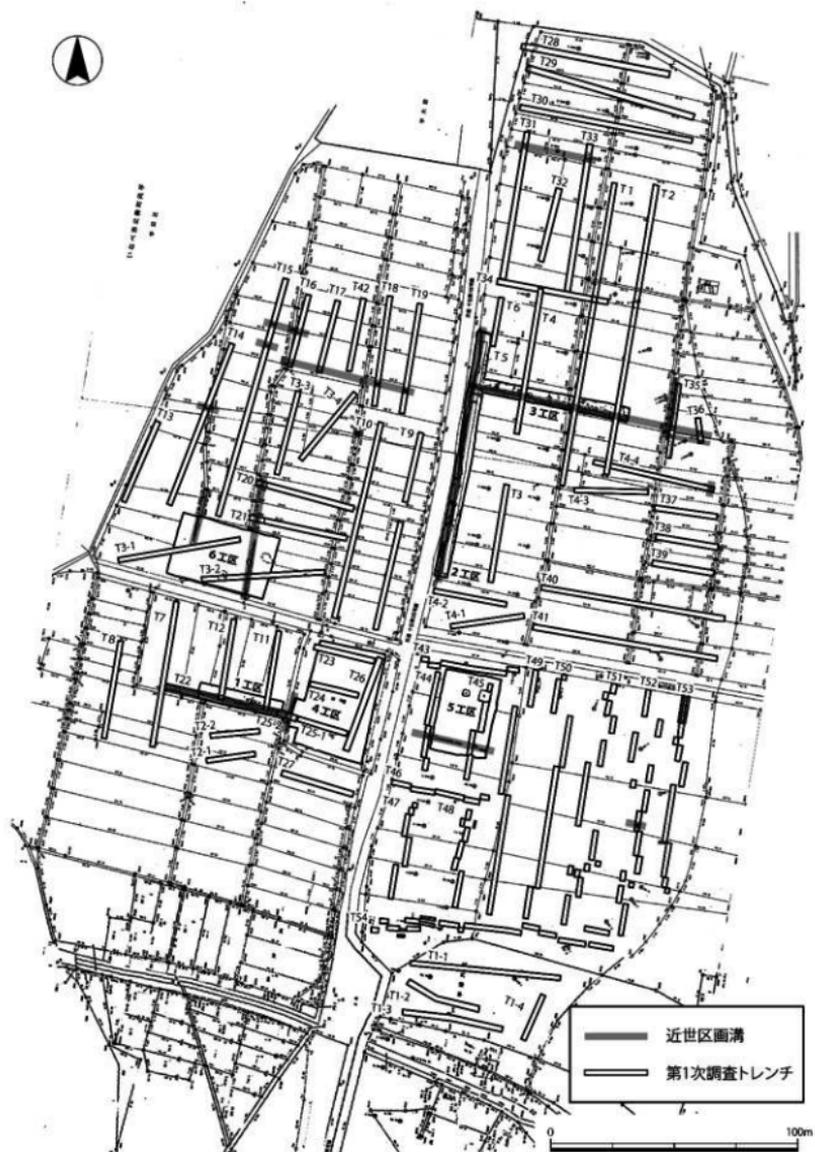
出土遺物は無かったが、後述するSD2やSD3

などと方位がほぼ同じで幅や深さも同規模であることから、このSD1もそれらの溝と同じ時期に掘削されたものと思われる。

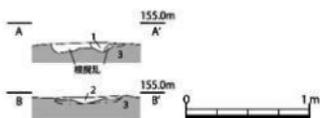
**SD2**(第25・26図) 3工区で検出した溝である。溝の東側の延長が第1次調査の第35トレンチと第36トレンチで確認されている。第1次調査で確認された結果と合わせると、溝の延長は95.5m以上と推定される。溝の幅は広いところで1.8m、検出面からの平均的な深さは0.3mである。溝の方位は東に対して11°南に傾いている(E11°S)。

出土遺物は、藤澤編年<sup>9</sup>登窯第8小期(18世紀後葉)～第9小期(19世紀第1四半期)とみられる美濃産陶器(27)が1点あるが、それ以外は登窯第10小期(19世紀第2四半期)の瀬戸美濃産の陶器である(第V章参照)。

SD3とは切り合いが認められ、SD2がSD3を切っていた。SD3からは近代の陶磁器類が出土

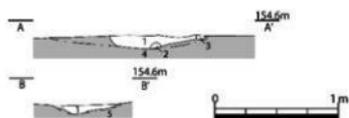


第36図 近世区画清想定図 (1:2,000)



1. 10YR 2/1黒色シルト(溝埋土)
2. 10YR 2/3黒褐色～10YR 3/1黒褐色シルト(溝埋土)
3. 10YR 4/3暗褐色シルト(基盤層)

第37図 S D 303土層断面図 (1:40)



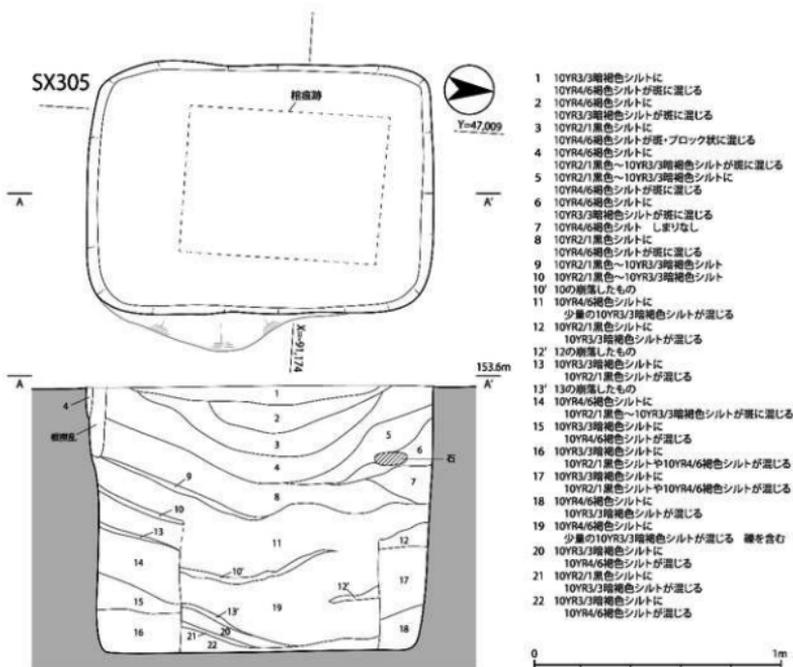
1. 10YR 2/1黒色シルトに10YR 5/6黄褐色シルトの粒がわずかに混じる(溝埋土)
2. 10YR 2/1黒色シルトに10YR 5/6黄褐色シルトが混じる(層積乱)
3. 10YR 3/2黒褐色シルトに10YR 4/4暗褐色シルトが混じる(層積乱)
4. 10YR 5/6黄褐色シルト(基盤層)
5. 10YR 4/4暗褐色シルト～10YR 5/6黄褐色シルト(基盤層)

第38図 S D 401土層断面図 (1:40)

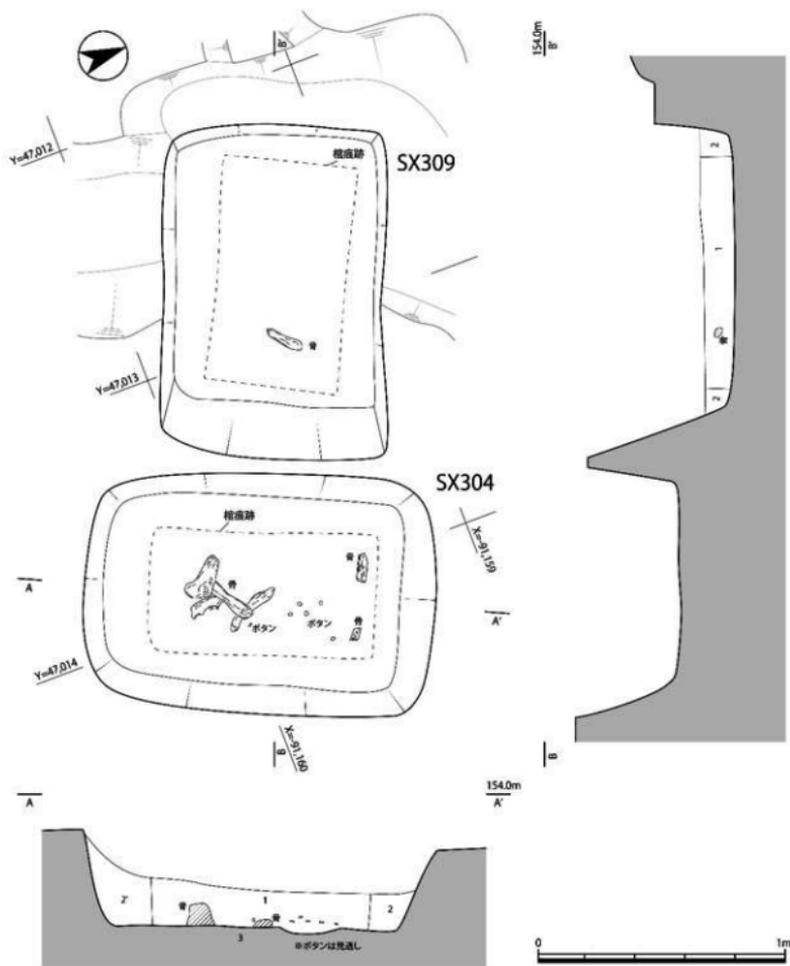


1. 10YR 2/1黒色シルトに10YR 4/6褐色シルトのブロックが混じる(溝埋土)
2. 10YR 4/6褐色シルト(基盤層)

第39図 S D 405土層断面図 (1:40)



第40図 S X 305実測図 (1:20)



SX304

- 1 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトが斑に混じる 人骨・ボタン出土(棺内埋土)
- 2 10YR4/4褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトが斑に混じる
- 3 10YR4/4褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトが斑に混じる(2より深い)
- 3 10YR6/4にぶい黄褐色シルト(基盤層)

SX309

- 1 5YR2/1黒褐色シルトに5YR2/4暗暗赤褐色シルトが斑に混じる  
一部に10YR4/4褐色シルトがブロック状に混じる
- 2 10YR4/4褐色～10YR5/6暗褐色シルトに10YR2/2黒色～10YR3/3暗褐色シルトが斑に混じる

第41図 S X 304・S X 309実測図 (1:20)

していることから、このSD2も近代まで機能していたものと思われる。

**SD3** (第26・27図) 2工区で検出した溝である。溝は西側の市道に沿うようにやや湾曲しながら、南北とも調査区外まで延びている。調査で確認できた長さは100.5m、幅は広いところで1.8mあり、平均的な検出面からの深さは0.3mである。溝の方位は北に対して10°東に傾いている(N10°E)。

出土遺物は、藤澤福平家登第10~11小期(19世紀第2四半期~第3四半期)の瀬戸美濃産陶磁器や近代の陶磁器類があり、プラスチックやビニール等は出土していない。19世紀半ばにはすでに掘削されており、近代まで機能していたものと思われる。

直交するSD2とは切り合いが認められ、SD3はSD2に切られていた。埋没はSD3の方が早かったことが分かる。

**SD303** (第29図) 5工区の南部で検出した溝である。第1次調査の第44トレンチで西側の延長が確認されており、その結果を合わせると溝の延長は25m以上と推定できる。

溝の幅と深さは、最も残りの良い5工区東壁の土層断面でみると、幅は0.9m、深さは0.2mである。

溝の方位は東に対して12°南に傾いている(E12°S)。

出土遺物が無いため、時期の特定は難しいが、方位が同じ(または直交する)SD1~3などと比較すると、幅と深さがそれらの溝のほぼ1/2であり、規則性が窺えることから、規模の大きなSD1~3などの溝を補充する溝として掘削された可能性も考えられる。

**SD310** (第28図) 4工区の西部で検出した溝である。調査で確認できた延長は11.9mであるが、南北ともに4工区の外まで伸びている。溝の幅と深さは、最も残りの良い4工区東壁の土層断面でみると、幅は1.8m、深さは0.3mである。

溝の方位は東に対して12°南に傾いている(E12°S)。

第1次調査の第25-2トレンチ内でも検出されており、SD1が合流していることを確認している。SD1とは切り合いが認められ、SD310がSD1を切っていた。

出土遺物は無いが、SD1~3などと、方位・幅・深さがほぼ同じであることから、この溝も同じ時期に掘削されたものと思われる。

**SD401** (第30図) 6工区の北西部で検出した溝である。調査で確認できた延長は10.1mである。溝の幅と深さは、最も残りの良い中央部で幅1.2m、深さは0.1mである。

溝の方位は北に対して12°東に傾いている(N12°E)。

**SD405** (第30図) 6工区の東部で検出した溝である。調査で確認できた延長は22.5mである。溝の幅と深さは、最も残りの良い中央部で幅1.4m、深さは0.3mである。

溝の方位は北に対して10°東に傾いている(N10°E)。

#### 第1次調査において検出された溝(第36図)

第1次調査では幅2mのトレンチによる調査(合計69本、6,788㎡)を行った。その結果、事業地内のほぼ全面で溝を検出した。これらの溝からは、溝が掘削された時期を特定できる遺物は出土しなかったが、明らかにSD1~3の延長と考えられるものがあり、また、そうでないものでもSD1~3に平行、または直交して掘削されている。

規模の小さいものが多く、一部には中世まで遡る溝が含まれている可能性も否定できないが、埋土や埋没の状況などは、SD1~3と大差なく、現段階では、これらの溝のほとんどはSD1などと同じ時期かそれ以降に掘られた耕地を区画するための溝と考えている。

なお、溝と溝との間隔に、規則性(例えば1町ごとの間隔で掘られているなど)がないか検討したが、そのような状況は確認できなかった。

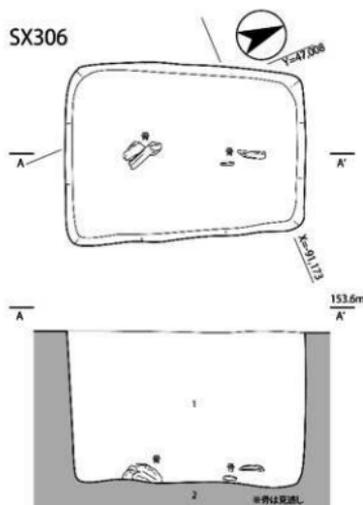
## 第4節 近代以降

4工区において墓6基を確認した。人骨の残存度からみて最も新しいと思われるSX308は、ビニール状の遺物が出土していることから、第二次大戦後につくられたものと考えられる。他の墓も人骨の残

るものが多い。

墓は調査区中央部(SX304・308・309)と南部(SX305・306・307)の2箇所3基ずつまとまって作られている。

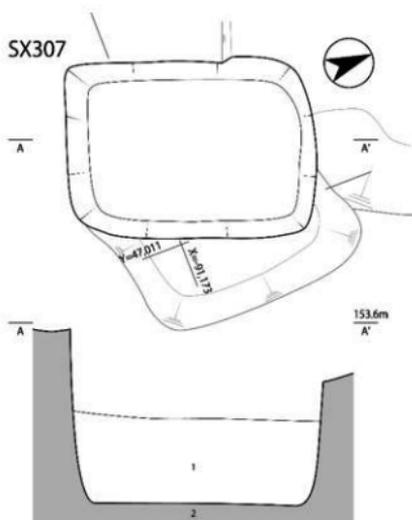
SX306



- 10YR2/1黒色～10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/3Cに多い黄褐色～10YR4/6褐色シルトが厚くはびこる。しまりなし
- 10YR6/4Cに多い黄褐色～10YR4/6褐色シルト(基盤層)

第42図 S X306実測図 (1:20)

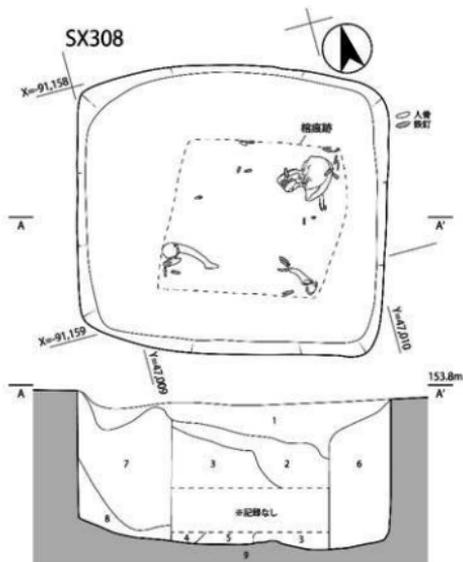
SX307



- 10YR2/1黒色～10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/3Cに多い黄褐色～10YR4/6褐色シルトが厚くはびこる。しまりなし
- 10YR6/4Cに多い黄褐色～10YR4/6褐色シルト(基盤層)

第43図 S X307実測図 (1:20)

SX308



- 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが混入。しまりなし
- 10YR1/1黒色シルト
- 10YR2/2黒褐色シルトと10YR4/6褐色シルトが半々ぐらい混じる。しまりなし
- 10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが混入
- 10YR3/3暗褐色シルト
- 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトが少し混じる
- 10YR4/4褐色シルト
- 10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/4Cに多い黄褐色シルトが少し混じる
- 10YR5/4Cに多い黄褐色シルト(基盤層)

第44図 S X308実測図 (1:20)

## (1) 墓

**S X304** (第41図) 4工区の中央部で検出した墓である。平面形は1.4m×1.0mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.4mである。土坑の長軸方位は北に対して25°東に傾いている(N25°E)。

埋土を半分ほど掘り下げた段階で、棺痕跡を検出した。棺の規模は平面形が90cm×50cmの長方形を呈し、痕跡の残存高は18cmである。棺の部材はすでに消滅していたが、棺内からは人骨6点と全く劣化していないことからガラス製かプラスチック製とみられる白色のボタン6個が出土した。

ボタンの大半は棺内の北側からややまとまって出土している。被葬者が弾かれた際に着用していた、いわゆる「死に装束」がボタン留めであったとは考えにくい。これらのボタンは副葬品として棺内に入れられた衣服が埋葬の際に棺上に被せられた覆い等に伴うものである。

人骨は棺内の北側から2点、南側から4点が出土した。このうち、大白歯の残る下顎の骨は南側の方から出土しており、頭部は棺の南側にあったことが分かる。棺の規模や形状を考慮すると、被葬者は南を背にして棺の側面にもたれる様な状態で葬られたものと考えられる。

このS X304の西側に隣接してS X309が存在する。切り合いは無いが、人骨の残存度から推測すると、このS X304の方が新しいと思われる。

**S X305** (第40図) 4工区の南部で検出した墓である。平面形は1.4m×1.0mの長方形を呈し、検出面からの深さは1.1mである。土坑の長軸方位は北に対して3°西に傾いている(N3°W)。遺物の出土は無かった。

埋土を半分以上掘り下げた段階で、棺痕跡を検出できた。棺の規模は平面形が80cm×60cmの長方形を呈し、痕跡の残存高は55cmである。

土層断面からは、棺が朽ちたあと、その中に土砂が流入し、それに伴って上部の土砂が落ち込んでいった様子が明瞭に窺える。調査中に地区住民から聞いた話では、土砂が落ち込んで凹むことを見越して、埋葬の際には土を塚状に盛っておくのが通例であったというが、このような例がそれにあたるものと思われる。

**S X306** (第42図) 4工区の南部で検出した墓である。平面形は1.0m×0.7mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.6mである。土坑の長軸方位は北に対して23°東に傾いている(N23°E)。

棺痕跡は確認できなかったが、底面および底面からやや浮いた位置で人骨が数点出土した。人骨以外の遺物の出土は無かった。

人骨は分解が進んでおり、部位や点数を正確に把握することはできなかったが、大きな塊になっている方に頭部や胴体があったものと思われる。その場合、棺の規模や形状を考慮すると、被葬者は南を背にして棺の側面にもたれる様な状態で葬られたものと考えられる。

約2m東にあるS X307はこのS X306と規模・形状・長軸方位がほぼ同じであることから、この2つは作られた時期が比較的近い、もしくは、なんらかの規格に基づいて作られた可能性が考えられる。なお、このS X306には人骨が残っていたのに対し、S X307には人骨が残っていなかった。人骨の残存度からみるとS X307の方がやや古いと思われる。

**S X307** (第43図) 4工区の南部で検出した墓である。平面形は1.0m×0.7mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.7mである。土坑の長軸方位は北に対して22°東に傾いている(N22°E)。

棺痕跡は確認できず、遺物の出土も無かった。

約2m西にあるS X306はこのS X307と規模・形状・長軸方位がほぼ同じであり、作られた時期が近い、もしくは、なんらかの規格に基づいて作られた可能性が考えられる。

なお、S X306には人骨が残っていたのに対し、このS X307には人骨が残っていなかった。人骨の残存度からみるとS X307の方がやや古いと思われる。

**S X308** (第44図) 4工区の中央部で検出した墓である。平面形は1.25m×1.2mのほぼ正方形を呈し、検出面からの深さは0.6mである。土坑の長軸方位は北に対して75°西に傾いている(N75°W)。

埋土を10cmほど掘り下げた段階で、棺痕跡を検出できた。棺の規模は平面形が60cm×60cmの正方形で、痕跡の残存高は50cmである。

棺の部材はすでに消滅していたが、棺内からは多

数の人骨と鉄釘22点、ビニール状の皮膜の断片、針金1点、樹脂で固められた網状小片1点が出土した。

人骨のうち、頭蓋骨は棺の北東隅に右側面を上にして横倒しの状態で出土し、大腿骨と脛骨は南東隅と南西隅に膝を上を折り曲げた状態で出土した。これらの骨の出土状況から、被葬者は北を背にして棺の側面にもたれ、両膝を立てた状態で葬られたことが分かる。

上述のビニール状の皮膜断片は黒色を呈するもので、非常に薄く、劣化が進んでいたため、掘削の際に破れて2～3の断片になったが、合わせると概ね10cm四方の大きさに復元できるものである。針金は黒色のビニールで被覆されており、長さは7～8cm程度、手で容易に曲げられる固さのものである。樹脂で固められた網状小片は、目の大きさが2～3mmのメッシュを2～3枚貼り合わせて樹脂状の接着剤で固めたもので、概ね10cm四方の大きさである。

上記のビニール膜、針金、網状小片はすべて頭蓋骨の頭頂部から左側面にかけて貼り付くような状態で出土した。出土状況や素材等からこれらは「かつら」を構成する部品であると思われる。

このS X 308は調査区内で確認された墓の中では最も良好に人骨が残っていたことから、最も新しい墓と考えられ、また、出土した「かつら」の材質等を考慮すると、葬られた時期は、戦後まで下るものと思われる。

**S X 309** (第41図) 4工区の中央部で検出した墓である。平面形は1.35m×0.9mの長方形を呈し、検出面からの深さは0.6mである。土坑の長軸方位は北に対して68°西に傾いている(N68°W)。

埋土を掘り下げていくと、棺痕跡が検出できた。棺の規模は平面形が90cm×55cmの長方形で、痕跡の残存高は14cmである。

棺の部材はすでに消滅していたが、棺内から人骨が1点出土した。それ以外に遺物は出していない。

人骨は棺内の東側の位置から出土したが、どの部位であるかは、現地では判断できなかった。

この遺構の東隣にS X 304が存在する。切り合いは無いが、人骨の残存度から推定すると、このS X 309の方が古いと思われる。

## 第5節 時期不明

### (1) 土坑

**S K 403** (第32図) 6工区の西側で検出した土坑である。平面形は径27cmの円形を呈し、深さは16cmである。根拠乱のため断面形に乱れがある。

土器の底部状の遺物が出土したが、早期前半の深鉢にみられるような尖底ではなく、また、胎土には繊維状の物質が多く混和されている痕跡がみられた。この遺物は、洗浄の際に溶解し、本来の形が失われてしまったため、遺物実測図が作成できなかった。

器壁に厚みがあり、胎土等からも縄文土器の可能性が考えられるが、文様の有無や正確な形状が示せないため、遺構の時期は不明とする。

### 【註】

①三重県埋蔵文化財センター『大鼻遺跡』1994、三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡』1998など。

②たとえば、大鼻遺跡、鴻ノ木遺跡では皆無である。

③三重県埋蔵文化財センター『大鼻遺跡』1994、三重県

埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡』1998。

④三重県埋蔵文化財センター『大鼻遺跡』1994、三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡』1998など。

⑤「集石野」の用語および北勢地域の事例については、三重県埋蔵文化財センター『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』2016による。

⑥溝で方形に区画され、区画内の中央部に土坑が設けられている中世の遺構2基について、本書では「塚墓」と呼称して報告する。2基ともに塚は削平されて検出できなかったが、後述のようにS X 301は溝の埋土の堆積状況などから塚の存在が想定でき、また、S X 302も残存する遺構の形態がS X 301と同様の要素で構成されていることから2基ともに塚墓の名称を用いた。

⑦以下、編年と実年代については、愛知県『愛知県史別編 富業2 中世・近世 瀬戸系』2007の表記に従った。

## 第V章 遺物

### 第1節 旧石器時代

#### 包含層・その他出土遺物 (第45図1)

1は、縄文時代の竪穴建物(SH402)の埋土から出土したチャートの石核である。形状や剥離面等の状況から細石刃核の可能性があり、平らな面を上

面とし、上方から打撃を加え、細石刃を剥いだ痕跡が3箇所程度確認できる。旧石器時代のものであるならば、縄文時代の竪穴建物の埋没過程で入り込んだものと思われる。(勝山)

### 第2節 縄文時代

#### SH402出土遺物 (第45図2～7)

2は、深鉢の口縁部小片である。器壁が薄く、口縁端部は外側に面がつくられている。大鼻式や大川式にみられるような頭部の屈曲は無く、全体にゆるく外反している。外面には押型文が施されており、文様はネガティブな楕円文または格子目文とみられるが風化しており判然としない。器形等の特徴は神宮寺式に相当するものである。

3、4、5は、深鉢の体部小片である。外面にはいずれもネガティブな楕円文とみられる押型文が施されている。

6は、屈曲や器壁の厚さからみて、深鉢の底部に近い部分と考えられる小片である。外面にはネガティブな楕円文または格子目文とみられる押型文が施されている。

7は、打欠石錘。両端に打ち欠きがある。下端の打ち欠きは一見すると切目のようにも見えるが、石の節理に沿って割れており、打ち欠きによって作出されたものである。

#### SH404出土遺物 (第45図8～10)

8、9は深鉢の体部小片である。どちらも外面に格子目文の押型文が施されている。文様・器壁の厚さが似ており、接合できなかったが同一個体の可能性はある。

10は、チャートの剥片、あるいは未使用の楔形石器か。色調は赤色を呈する。石英の脈が無数に入っているため、リングやフィッシャーが大きく乱れている。

#### SH406出土遺物 (第45図11・12)

11は、石鏃である。片脚を欠損している。石材は

やや透明感のある灰色のチャートが使用されている。片面に主要剥離面が大きく残されている。

12は、チャートの剥片である。色調は灰色を呈する。剥片石器の素材となるものか。

#### SH404またはSH406出土遺物 (第45図13・14)

遺構検出中に出土したため、重複するSH404とSH406のいずれに属するか判別できなかった遺物である。

13は、深鉢の体部小片である。外面には格子目文の押型文が施されている。外面に炭化物の付着が少量みられる。文様、器壁の厚さなどはSH404出土の8、9と類似しており、同一個体の可能性も考えられる。

14は、深鉢の体部小片である。外面には長大化した楕円文の押型文が施されている。器壁は8、9、13より薄い。

#### SK408出土遺物 (第45図15・16)

15は、深鉢の体部小片である。外面には縦長に市松文とネガティブな楕円文とみられる押型文が施されている。

16は、チャートの剥片である。色調は赤褐色を呈する。剥片石器の素材となるものか。

#### 小穴(T3-1 Pit1)出土遺物 (第45図17)

17は、深鉢の口縁部小片である。H29年度に行われた第1次調査のトレンチT3-1の東から18m地点で検出された小穴(Pit1)から出土した。口縁端部がやや肥厚している。外面には押型文が施されており、文様は斜傾した格子目文と思われるが、全体的な風化と表面の剥離で判然としない。口縁端部の施文も同様の理由で判別できない。

#### 包含層・その他出土遺物 (第45図18・19)

18は、I工区の遺物包含層から出土した。外面に山形文と小さい格子目文の押型文が施されている。文様構成等から口縁部～頭部までの横位施文部付近の小片である可能性が高い。

19は、近世の区画溝(SD405)から出土したチャートの剥片である。色調は黒色を呈し、比較的不純物の少ない良質のチャートである。剥片石器の素材となるものか。(勝山)

### 第3節 中世

#### S X301出土遺物 (第46図20)

20は、土師器小皿である。塚墓S X301の周溝埋土から出土した。体部内面、口縁部に強いヨコナデが施され、底部に突出がある。口縁部の内外面に炭化物が付着する。体部と底部の境あたりに、焼成後穿孔がある。孔は、内面から外面に向けて穿たれている。

#### 包含層・その他出土遺物 (第46図21)

21は、陶器の四耳壺である。四辻遺跡に隣接する春光寺石塔群で現地調査中に採集されたものである。古瀬戸前II b期のものと考えられる。

口縁部が打ち欠かれており、火葬墓の蔵骨器として使用されていたものであろう。(竹田)

### 第4節 近世

#### SD2出土遺物 (第46図22～27)

瀬戸産の腰鉾碗(22、23、24)、染付皿(25)、美濃産の広東碗(26)、蓋物の身(27)がある。

27が登窯8小期か9小期である以外、22、23、24、25、26は、すべて登窯10小期のものである。

#### SD3出土遺物 (第46図28～30)

端反碗(28、29)、播鉢(30)がある。28、29は登窯11小期、30は登窯10小期か11小期のものである。

#### 包含層・その他出土遺物 (第46図31・32)

いずれも表面採集された遺物である。仏蘭具(31)と湯呑(32)がある。31は肥前産か。(竹田)

### 第5節 篩掛けによりみつかった剥片

小型石器の回収率向上と微細剥片の存在確認を目的として、縄文時代早期の遺構(SH402・SH404・SH406・SK408)の埋土の一部について、篩掛けを行った。作業工程は、以下の通りである。

- ①遺構の底面付近の埋土を土嚢袋に取り分け、ナンバリングして管理。
- ②2mmメッシュの篩を使用し、水道水を用いて水洗。土や木の根などを除去。
- ③残留物を乾燥させ、遺物を選別。

作業の結果、石器類4点と微細剥片、および若干の炭化物(木炭)が得られた。篩掛けによってみつかった石器類はその旨を遺物観察表(石器)(第6表)の備考欄に記載している。炭化物は一部を用いて、自然科学分析(放射性炭素年代測定・樹種同定)を行った(詳細は第VI章を参照)。

微細剥片については、微細剥片一覧表(第3表)のとおりである。石材はすべてチャートで、サヌカ

イトや黒曜石等は確認できなかった。このうち、SK408は1m<sup>2</sup>あたりの出土量が特に少なく、遺構の性格の違いをあらわしているものと思われるが、詳細は不明である。(勝山)

#### 【参考文献】

遺物の記述については以下の文献を参考とした。  
矢野健一「押型文系土器(大川式・神宮寺式土器)」『総覧縄文土器』小林達雄編(株)アム・プロモーション2008年。

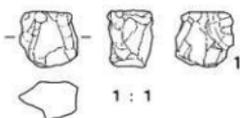
伊野近富「土師器Ⅱ」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年。

藤澤良祐「編年表」『愛知県史 別冊 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県史編さん委員会編 2007年。

なお、陶磁器類については、平成30年4月23日に愛知学院大学日進キャンパスにおいて藤澤良祐氏に実見して頂いている。

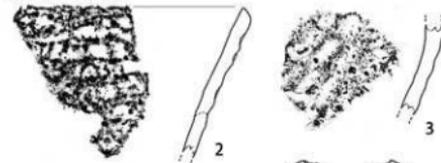
旧石器時代

包含層・その他 (1)



縄文時代

SH402 (2~7)



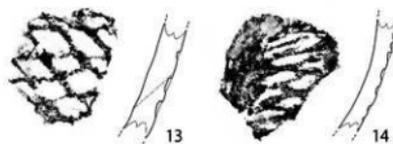
SH404 (8~10)



SH406 (11・12)



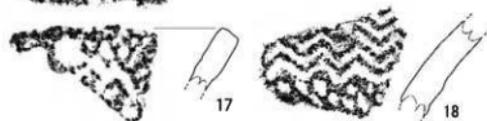
SH404 または SH406 (13・14)



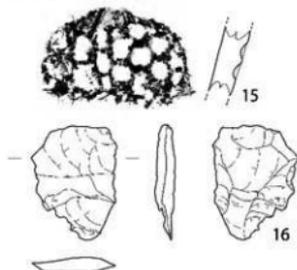
小穴 T3-1Pit1 (17)



包含層・その他 (18・19)



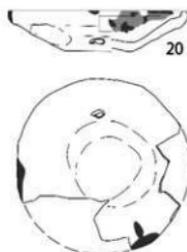
S K 408 (15・16)



第45図 出土遺物実測図 1 (1・11は1:1、他は2:3)

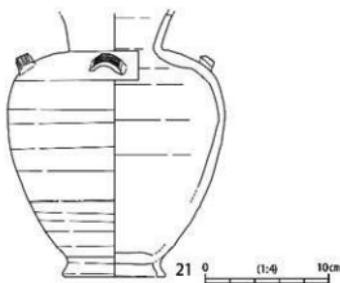
## 中世

S X 301 (20)



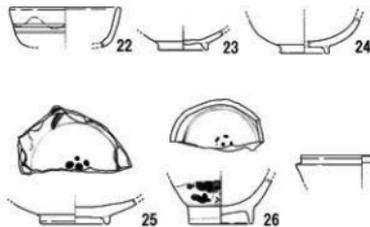
0 (1:2) 5cm

包含層・その他 (21)

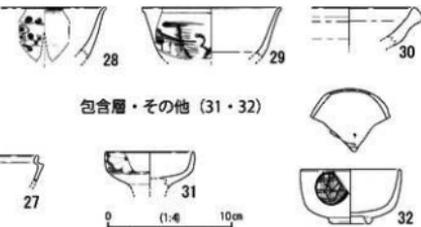


## 近世

SD 2 (22~27)



SD 3 (28~30)



第46図 出土遺物実測図2 (20は1:20、他は1:4)

第3表 微細剥片一覧表

遺構名	篩掛け土量(m <sup>3</sup> )	剥片の重量(g)	1 m <sup>3</sup> あたり(g)	石材の種類
S H 402	1.62	1.0	0.6	すべてチャート
S H 404	0.98	2.0	2.0	すべてチャート
S H 406	0.46	1.7	3.7	すべてチャート
S K 408	0.68	0.2	0.3	すべてチャート

第4表 遺構一覧表

調査 次数	遺構 番号	主なグリッド	種別	時代	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	主な遺物	切合い (旧→新)	備 考
第2次	SD1	Abl~10	溝	近世	50.4	1.8	0.4	なし	SD1→SD310	長さはH27・28年度第1次調査の結果を含む
	SD2	C10~16	溝	近世	95.5<	1.8	0.3	陶器類・磁器類・ 染付皿	SD1→SD2	長さは28年度第1次調査の結果を含む
	SD3	Bv0~Bv6 Ca0~Cg0 Bw1~Cv1	溝	近世	100.5<	1.8	0.3	播鉢・磁器類	SD3→SD2	
第3次	SK301	H-N18・19 H-O17・18・19 H-P18・19	塚墓	中世後期	4.5	4.5	0.4	土師器皿	なし	
	SK302	H-N16・17 H-O16・17	塚墓	中世後期	2.5	2.0	0.3	なし	なし	墓壘側面を石で補強
	SD303	H-S13・14・15 H-T14・15・16 ・17・18	溝	近世	25<	0.9	0.2	なし	なし	長さはH28年度第1次調査の結果を含む
	SK304	H-O4, P4	墓	近・現代	1.4	1.0	0.4	人骨・ボタン	なし	棺痕跡(0.90×0.50)
	SK305	H-S3	墓	近・現代	1.4	1.0	1.1	なし	なし	棺痕跡(0.80×0.60)
	SK306	H-S2・3	墓	近・現代	1.0	0.7	0.6	人骨	なし	
	SK307	H-S3	墓	近・現代	1.0	0.7	0.7	なし	なし	
	SK308	H-O3	墓	近・現代	1.25	1.2	0.6	人骨・鉄釘・ビニール 膜・針金・網状 小片	なし	棺痕跡(0.60×0.60)
	SK309	H-O4	墓	近・現代	1.35	0.9	0.6	人骨	なし	棺痕跡(0.90×0.55)
	SD310	G-Q21, P21, Q21	溝	近世	11.9<	1.8	0.3	なし	SD1→SD310	幅・深さはH28年度第1次調査の結果を含む
第4次	SD401	D-U14, V14, W14, X14	溝	近世	10.1<	1.2	0.1	なし	なし	
	SH402	G-B16・17 G-C16・17	堅穴建物	縄文早期	4.7	4.5	0.3	打欠石罫 縄文土器(押型文)	SH402→SH407	
	SK403	D-X13	土坑	不明	0.27	0.27	(0.10)	土器底部片 (縄文土器?)	なし	根拠乱あり
	SH404	D-Y21 G-A21	堅穴建物	縄文早期	3.8	3.5	0.2	縄文土器(押型文)	SH406→SH404	
	SD405	D-X20, Y19・20 G-A19・20, B19 ・20, G-C19, D19	溝	近世	60.0<	1.4	0.3	なし	SK408→SD405	長さは28年度第1次調査の結果を含む
	SH406	D-Y21 G-A21・22	堅穴建物	縄文早期	2.7<	2.5<	0.1	石罫 縄文土器(押型文)	SH406→SH404	
	(SH407)	G-C16・17	風倒木痕	不明	-	-	-	-	SH402→SH407	調査時は堅穴建物として番号を付与したが風倒木痕とみて遺構から除外
	SK408	G-A19	土坑	縄文早期	2.9	1.6	0.3	縄文土器(押型文)	SK408→SD405	

第5表 遺物観察表(土器・陶磁器)

法量の( )は還元または焼存計測値

報告番号	実測番号	種類 器種	グリップ	遺構	法量(cm)	残存	調査・文様など	胎土	焼成	色調	備考
2	008-02	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-C16	S0402	(4.75)	口縁部 小片	押型文(ネズ精肉or 格子目?) 杵風化	やや密 砂粒 ~0.3cm	良	(内) 10108/3浅黄褐色 ~10107/2に赤い黄緑 ~10107/3~6に赤い黄緑	
3	001-01	縄文土器 深鉢?	G-B07	S0402	(2.9)	小片	押型文(ネズ精肉)	やや密 砂粒 ~0.4cm	良	(外) 7.5106/9黄褐色~7.5103/1黒褐色 (内) 10107/4に赤い黄緑 ~10103/2黒褐色	H29第1次調査T3-2 東6~5.0m地点出土
4	008-01	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-B16	S0402	(2.4)	小片	押型文(ネズ精肉)	密	良	(外) 10107/6明黄褐色 ~10105/4に赤い黄緑 (内) 10104/2浅黄褐色~10103/2黒褐色	
5	008-03	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-C16	S0402	(2.3)	小片	押型文(ネズ精肉?)	やや密 砂粒 ~0.1cm	良	(外) 7.5106/6黄褐色~7.5106/1黒褐色 (内) 7.5106/3黒褐色	
6	008-04	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-C17	S0402	(2.1)	小片	押型文(ネズ精肉?)	密	良	(外) 10106/4に赤い黄緑 (内) 10105/2に赤い黄緑	
8	009-01	縄文土器 深鉢?	6.上区 D-Y21	S0404	(2.3)	小片	押型文(格子目)	密	良	(外) 10105/2浅黄褐色 (内) 10105/2に赤い黄緑	
9	009-02	縄文土器 深鉢?	6.上区 D-Y21	S0404	(2.3)	小片	押型文(格子目)	密	良	(外) 7.5106/4に赤い黄緑 ~7.5105/1黒褐色 (内) 7.5104/1黒褐色	
13	009-03	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-A21	S0404・406 横出面	(3.3)	小片	押型文(格子目)	やや密 砂粒 ~0.4cm	良	(外) 7.5105/3黒褐色 (内) 7.5106/6黄褐色~7.5105/1黒褐色	
14	009-04	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-A21	S0404・406 横出面	(3.6)	小片	押型文(ネズ精肉 (長大化))	密	良	(外) 10107/4~6に赤い黄緑 (内) 10106/4に赤い黄緑	
15	009-05	縄文土器 深鉢?	6.上区 G-A19	S0408	(3.6)	小片	押型文(市松・ネズ 精肉)	やや密 砂粒 ~0.2cm	良	(外) 10105/6黄褐色~10104/2浅黄褐色 (内) 10105/6黄褐色~10104/1黒褐色	
17	001-02	縄文土器 深鉢?	H29第1次 T3-1	F141	(2.6)	口縁部 小片	押型文(網格子?) 杵風化	やや密 砂粒 ~0.2cm	良	(外) 10103/1黒褐色 (内) 10105/4に赤い黄緑	H29第1次調査T3-1 東6~5.1m地点出土
18	001-03	縄文土器 深鉢?	1.上区 A67	包含層	(3.1)	小片	押型文(山形・菱形)	やや密 砂粒 ~0.3cm	良	(外) 10107/6明黄褐色 (内) 10107/4に赤い黄緑	
20	002-01	土器器 小皿	5.上区 H-018	SX301 両溝(縦)	口径(7.2) 器高1.6	5/12	ヨコナゲ(摩滅激しい) 底部突出(へそ型)	密	良	(内外) 10108/4浅黄褐色	口縁部内外面スエ 付着(他明黄) 内部からの焼成後穿孔 1箇所あり
21	005-01	陶器 四耳瓶	-	表裏	底径8.4	底部定形	ロコロナゲ・自然釉・ 施釉 貼付ナゲ、ロコケ ズリ	やや密 砂粒	良	(内) 10107/1灰白 (外) 10104/2オリーブ灰 (輪?) 10108/3浅黄褐色	赤文字石塔形採集 古瀬戸群B
22	003-01	陶器 磁鉢碗	3.上区 C67	S02	口径 (10.0)	口縁部 1/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 10108/1灰白 (輪) 517/3浅黄~10101.7/3黒	瀬戸 器型10
23	003-04	陶器 磁鉢碗	3.上区 C612	S02	底径(4.0)	底部 2/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 518/1灰白 (外輪) 10102/2黒褐色~10101.7/1黒 (内輪) 518/2灰白	瀬戸 器型10
24	003-05	陶器 磁鉢碗	3.上区 C614	S02	底径4.0	底部 6/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 10106/2浅黄褐色 (外輪) 10103/4暗褐色~10102/3黒褐色 (内輪) 517/2灰白	瀬戸 器型10
25	003-06	磁器 染付皿	3.上区 C614	S02	底径5.4	底部 7/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 2.510/3浅黄 (外) 赤褐色 (底面) コバルトブルー	瀬戸 器型10
26	004-02	磁器 立兼瓶	3.上区 C615	S02	底径(5.0)	底部 5/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(輪) 10107/2に赤い黄緑 (底面) 濃赤	美濃 器型10. 拓器型
27	004-05	陶器 蓋物身	3.上区 C615	S02	口径(9.8)	口縁 1/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 10107/2に赤い黄緑 (外輪) 赤褐色 (内輪) 烏の色	美濃 器型8-9
28	003-02	磁器 染反碗	2.上区 C71	S03	(4.3)	口縁部 1/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 2.510/1灰白 (底面) コバルトブルー	器型11
29	003-03	磁器 染反碗	2.上区 C71	S03	口径 (11.2)	口縁部 1/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 518/1灰白 (底面) 濃褐色	器型11
30	004-01	陶器 磁鉢	2.上区 C71	S03	(3.5)	口縁部 1/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(内) 2.517/2浅黄 (輪) 7.5104/6~7.5103/4暗褐色	瀬戸 器型10-11
31	004-04	磁器 仏蘭具	-	表裏	口径(7.0)	口縁 3/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(輪) 2.510/1灰白 (底面) コバルトブルー	器型成? H29第1次調査T29 西6~5.0m地点
32	004-03	磁器 湯呑	-	表裏	口径(8.0) 底径(2.9) 器高4.5	口縁1/12 底部3/12	ロコロナゲ・施釉	密	良	(輪) 2.510/1灰白 (底面) 濃褐色	器型11 H29第1次調査T29 西6~5.0m地点

第6表 遺物観察表（石器）

報告 番号	実測 番号	器種等	グリッド	遺構	法量 (cm)	重さ (g)	残存	石材	備 考
1	006-02	細石刃状?	G-B16	SH02	1.2 × 1.2 × 0.8	1.4	完形	チャート	隠掛け 旧石器?
7	007-01	打欠石錘	G-B16	SH02	3.6 × ( 1.7) × 0.75	7.3	一部欠損	泥岩	隠掛け
10	007-02	剥片	D-V21	SH04 核出面	4.5 × 3.7 × 0.85	19.2	—	チャート	
11	006-01	石鏝	G-A21	SH06	1.6 × 1.1 × 0.3	0.5	片脚部欠損	チャート	隠掛け
12	006-04	剥片	G-A21	SH06	3.35 × 2.15 × 0.25	2.4	—	チャート	隠掛け
16	006-05	剥片	G-A19	SK08	3.45 × 2.6 × 0.45	4.5	—	チャート	
19	006-03	剥片	D-V20	SD05	3.25 × 2.3 × 0.6	5.7	—	チャート	

## 第Ⅵ章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的と試料について

四辻遺跡第4次調査では竪穴建物と土坑から木炭とみられる炭化物が出土した。この炭化物を用いて放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。分析の目的と試料の採取、保管方法などについては以下のとおりである。

**放射性炭素年代測定** 炭化物の出土した遺構からは、押型文土器などが出土しており、それらを参考に遺構のおおよその年代を推定することは可能であるが、土器はすべて小片であり、量も少ない。土器以外の遺物の測定データを参照することにより、遺構の年代をより明確にしたいと考えた。

また、押型文土器の歴年代については近年、測定データが増加し、それらを用いた研究もすすめられてはいるものの、いまだ完全に一致した見解は得られていない状態である。四辻遺跡で出土した炭化物の年代を測定し、データを蓄積していくことは、そのような問題解決の一助となるものであろう。

**樹種同定** 出土した炭化物は肉眼での観察で木炭であることが推察された。樹種同定を行うことで当時の遺跡周辺の植生や環境、また、植物資源の利用の実態などを知る手がかりが得られると考えた。

**試料について** 分析試料は6点あり（第7表）、いずれも第4次調査で検出された竪穴建物と土坑から出土したものである。

試料№①・②はSH402の底面の埋土に少量含ま

れていた木炭のなかから、分析に耐えられると思われるサイズのものを選択して採取したものである。竪穴建物内には確認できず、おそらくは建物の廃絶後に入ったものであると考えられるが、底面からの出土であるため、比較的、建物の使用時期に近い時期のものと思われる。試料を採取した位置は第Ⅳ章の第31図中に記したとおりである。

試料№③はSH402内土坑の底面から採取した。この土坑からは時期の特定できない土器細片が1点出土しているのみで、SH402との関係も不明な点が多い。試料を採取した位置は第Ⅳ章の第31図中に記した。試料№①・②・③とも出土後すぐに採取し、土のついたままアルミホイルで包み、ビニル袋に入れ、カビなどが発生しないよう冷蔵庫内で保管した。

試料№④・⑤・⑥はSH404・SH406・SK408の埋土を篩掛けした際に得られたものである。遺構の底面付近の埋土を土嚢袋に取り分け、現場作業中に2mmメッシュの篩を使用し、水道水を用いて水洗いを行った後、残留物を乾燥させ選別したものである。この篩掛けは小型石器や微細剥片の存在を確認するために行ったものであるため、試料№①～③のように明確な出土位置は記録できなかった。選別後は試料№①～③同様にアルミホイルで包み、ビニル袋に入れ、カビなどが発生しないよう冷蔵庫内で保管した。

### 第2節 放射性炭素年代測定

#### 1 はじめに

三重県いなべ市の四辻遺跡第4次調査で出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている（第3節参照）。

#### 2 試料と方法

試料は、竪穴住居跡であるSH402の底面から2

点（試料№①：PLD-39252、試料№②：PLD-39253）、SH402内土坑から1点（試料№③：PLD-39254）、SH404から1点（試料№④：PLD-39255）、SH406から1点（試料№⑤：PLD-39256）、SK408から1点（試料№⑥：PLD-39257）の、計6点の出土炭化材である。発掘調査所見では、いずれも縄文時代早期の遺構と考えられている。

試料№①は最終形成年輪が残っていたが、それ以外の試料は最終形成年輪が残っていなかった。ま

た、樹種同定の結果、試料No. ③はコナラ属コナラ節で、それ以外の試料はいずれもクリであった。測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS；NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$ 年代、暦年代を算出した。

### 3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年代校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した $^{14}\text{C}$ 年代、図1に暦年代校正結果をそれぞれ示す。暦年代校正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年代校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年代校正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代（yrBP）の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年代校正の詳細は以下のとおりである。

暦年代校正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い（ $^{14}\text{C}$ の半減期5730 $\pm$ 40年）を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年代校正にはOxCal4.3（校正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代校正曲線を示す。

### 4 考察

以下、 $^{14}\text{C}$ 年代および $2\sigma$ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。なお、縄文土器編年と暦年代との対応関係については、小林（2017）、工藤（2012）、矢野（2008）を参照した。

S H402底面の試料No. ①（PLD-39252）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が9470 $\pm$ 35  $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が9111-9084 cal BC（2.9%）、9049-9026 cal BC（2.2%）、8839-8638 cal BC（90.3%）であった。同じくS H402底面の試料No. ②（PLD-39253）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が9510 $\pm$ 30  $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が9121-9003 cal BC（36.3%）、8919-8894 cal BC（3.5%）、8884-8736 cal BC（55.6%）であった。また、S H402内土坑の試料No. ③（PLD-39254）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が9545 $\pm$ 30  $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が9131-8985 cal BC（49.6%）および8930-8764 cal BC（45.8%）であった。いずれも縄文時代早期前半に相当する暦年代である。

S H404の試料No. ④（PLD-39255）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が9475 $\pm$ 30  $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が9113-9081 cal BC（4.0%）、9053-9022 cal BC（3.4%）、8841-8698 cal BC（81.9%）、8680-8641 cal BC（6.1%）であった。これは、縄文時代早期前半に相当する。

S H406の試料No. ⑤（PLD-39256）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が9485 $\pm$ 30  $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が9116-9070 cal BC（7.2%）、9060-9012 cal BC（6.4%）、8911-8906 cal BC（0.3%）、8846-8702 cal BC（78.3%）、8676-8647 cal BC（3.2%）であった。これは、縄文時代早期前半に相当する。

S K408の試料No. ⑥（PLD-39257）は、 $^{14}\text{C}$ 年代が9520 $\pm$ 30  $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が9122-9001 cal BC（41.6%）および8920-8749 cal BC（53.8%）であった。これは、縄文時代早期前半に相当する。

いずれも発掘調査所見では縄文時代早期の遺構と考えられており、調査所見と測定結果は整合的であった。

（パレオ・ラボAMS年代測定グループ 伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・小林克也）

【引用・参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2006) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 小林謙一 (2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p, 同成社.
- 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—. 373p, 神泉社.
- 矢野健一 (2008) 押型文系土器(大川式・神宮寺式土器). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 154-161, アム・プロモーション.

ション.

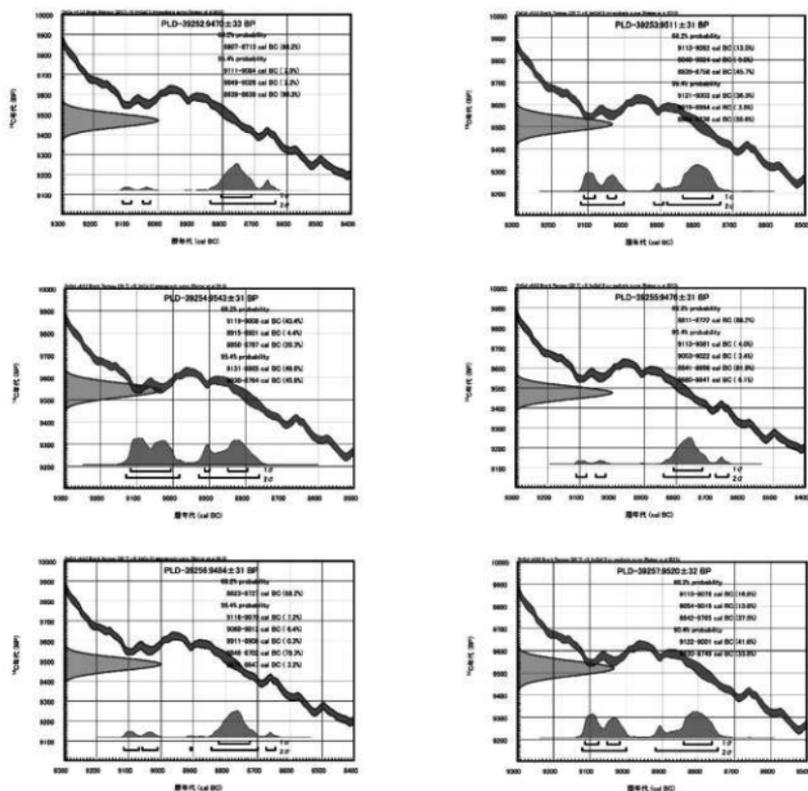
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hoffmann, B., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

第7表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-39252	試料No.① グリッド: G-C17 遺構: SH402底面 炭化物No. 1	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39253	試料No.② グリッド: G-B17 遺構: SH402底面 炭化物No. 2	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39254	試料No.③ グリッド: G-B17 遺構: SH402内土坑 炭化物No. 1	種類: 炭化材 (コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39255	試料No.④ グリッド: D-Y21 遺構: SH404	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39256	試料No.⑤ グリッド: G-A21 遺構: SH406	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39257	試料No.⑥ グリッド: G-A19 遺構: SK408	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第8表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号 (遺構)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
				PLD-39252 試料No.① (SH402底面)	-24.73 $\pm$ 0.24
PLD-39253 試料No.② (SH402底面)	-27.76 $\pm$ 0.16	9511 $\pm$ 31	9510 $\pm$ 30	9113-9082 cal BC (13.5%), 9048-9024 cal BC (9.0%), 8839-8758 cal BC (45.7%)	9121-9003 cal BC (36.3%), 8919-8894 cal BC (3.5%), 8884-8736 cal BC (55.6%)
PLD-39254 試料No.③ (SH402内土坑)	-23.21 $\pm$ 0.14	9543 $\pm$ 31	9545 $\pm$ 30	9119-9008 cal BC (43.4%), 8915-8901 cal BC (4.4%), 8850-8797 cal BC (20.3%)	9131-8985 cal BC (49.6%), 8930-8764 cal BC (45.8%)
PLD-39255 試料No.④ (SH404)	-27.40 $\pm$ 0.14	9476 $\pm$ 31	9475 $\pm$ 30	8811-8722 cal BC (68.2%)	9113-9081 cal BC (4.0%), 9053-9022 cal BC (3.4%), 8841-8698 cal BC (81.9%), 8680-8641 cal BC (6.1%)
PLD-39256 試料No.⑤ (SH406)	-26.20 $\pm$ 0.16	9484 $\pm$ 31	9485 $\pm$ 30	8823-8727 cal BC (68.2%)	9116-9070 cal BC (7.2%), 9060-9012 cal BC (6.4%), 8911-8896 cal BC (0.3%), 8846-8702 cal BC (78.3%), 8676-8647 cal BC (3.2%)
PLD-39257 試料No.⑥ (SK408)	-25.52 $\pm$ 0.19	9520 $\pm$ 32	9520 $\pm$ 30	9115-9078 cal BC (16.8%), 9054-9019 cal BC (13.8%), 8842-8765 cal BC (37.5%)	9122-9001 cal BC (41.6%), 8920-8749 cal BC (53.8%)



第47図 暦年較正結果

### 第3節 出土炭化材の樹種同定

#### 1 はじめに

三重県いなべ市の四辻遺跡第4次調査から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（第2節参照）。

#### 2 試料と方法

試料は、竪穴住居跡SH402の底面から出土した炭化材2点、SH402内土坑、SH404、SH406、

土坑SK408から出土した炭化材各1点の、計6点である。放射性炭素年代測定の結果、いずれも縄文時代早期前半に相当する暦年を示した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパックにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

### 3 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属コナラ節（以下、コナラ節）とクリの2分類群がみられた。クリが5点で、コナラ節が1点であった。同定結果を表9に示す。以下に、同定された材の特徴を記載し、第48図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold, et Zucc.

ブナ科 第48図 1a-1c(試料No.⑤), 2a(試料No.①), 3a(試料No.④), 4a(試料No.⑥)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus*

ブナ科 第48図 5a-5c(試料No.③)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものとは広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

### 4 考察

SH402、SH404、SH406、SK408から出土した炭化材はクリ、SH402内土坑から出土した炭化材はコナラ節であった。いずれも微細な試料で、用途は不明である。クリおよびコナラ節は堅硬な樹種であり、薪炭材としても有用な樹種である（伊東ほか、2011）。

四日市市の中野山遺跡第3・7次調査および、松阪市の鶴ノ木遺跡で検出された、縄文時代早期の煙道付炉穴および集石炉では、クリが非常に多く確認されている（小林、2016a・2016b；バリノ・サーヴェイ株式会社、1998）。出土した遺構の種類は異なるが、クリを多く利用していたという点で、用材傾向は類似していると考えられる。

（小林克也（バレイオ・ラゴ）

#### 【引用文献】

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。

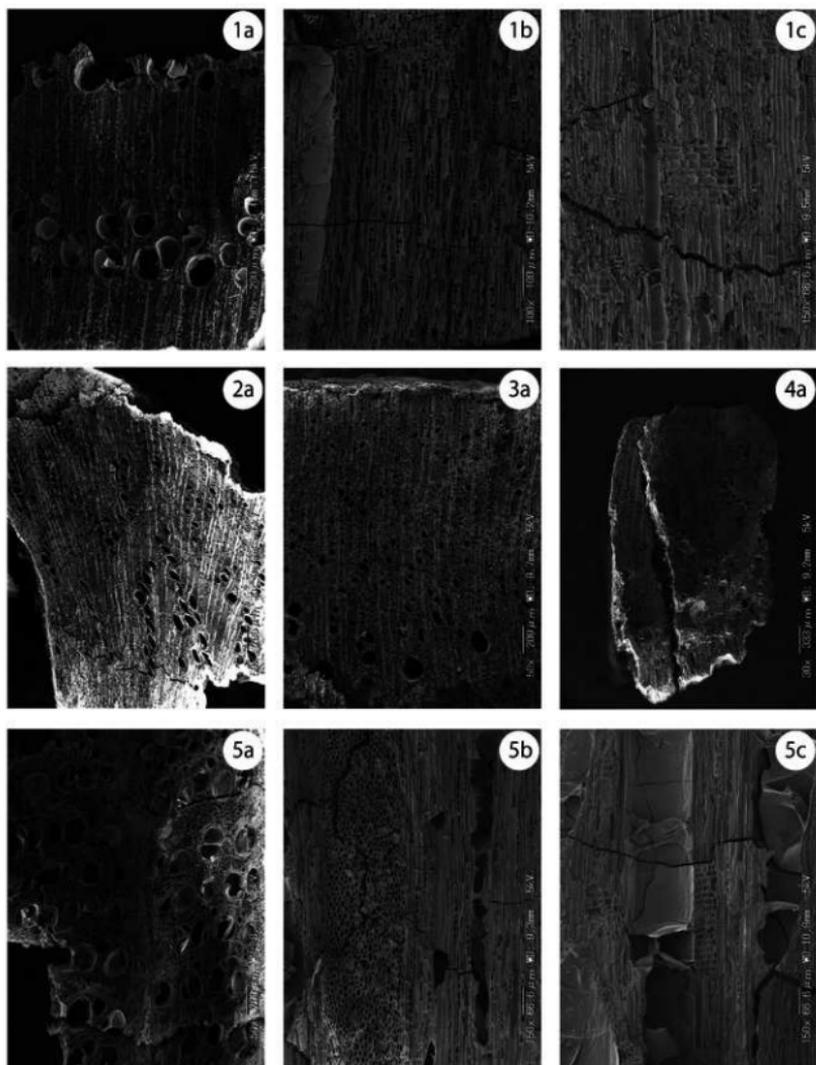
小林克也（2016a）炉跡出土炭化材の樹種同定（第3次調査）、三重県埋蔵文化財調査センター編「中野山遺跡（第2・3・6・7次）発掘調査報告」：194-195、三重県埋蔵文化財センター。

小林克也（2016b）炉跡出土炭化材の樹種同定（第7次調査）、三重県埋蔵文化財調査センター編「中野山遺跡（第2・3・6・7次）発掘調査報告」：196、三重県埋蔵文化財センター。

バリノ・サーヴェイ株式会社（1998）炭化物の放射性炭素年代・炭化材の樹種、三重県埋蔵文化財センター編「鶴ノ木遺跡（下層編）」：181-185、三重県埋蔵文化財センター。

第9表 四辻遺跡第4次調査出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	グリッド	出土遺構	炭化材No.	種類	樹種	時期	年代測定番号
①	G-C17	SH402底面	1	炭化材	クリ	縄文時代早期	PLD-39252
②	G-B17	SH402底面	2	炭化材	クリ	縄文時代早期	PLD-39253
③	G-B17	SH402内土坑	1	炭化材	コナラ属コナラ節	縄文時代早期	PLD-39254
④	D-Y21	SH404		炭化材	クリ	縄文時代早期	PLD-39255
⑤	G-A21	SH406		炭化材	クリ	縄文時代早期	PLD-39256
⑥	G-A19	SK408		炭化材	クリ	縄文時代早期	PLD-39257



第48図 四辻遺跡第4次調査出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

## 第七章 調査のまとめ

### 第1節 遺構の変遷

#### 第1期 縄文時代 早期

四辻遺跡の歴史の中で唯一、調査区内に人間が居住していたことが確認できる時期である。

6工区において、縄文時代早期前半の竪穴建物3棟、土坑1基を確認した。1工区の包含層からも当該期の土器片が1点出土しており、集落としての範囲は1工区あたりまで広がる可能性がある。

出土した土器片はいずれも押型文土器であり、文様等の特徴から神宮寺式のものと思われる。

竪穴建物SH404とSH406は重複しており、四辻遺跡が一時的な居住地ではなく、継続的または回帰的に営まれた集落であったことが想定できる。

また、この時期の遺跡でみつかることの多い煙道付炉穴や集石炉が確認できなかったことは、当該期の集落構造や竪穴建物とこれらの遺構との関係を考えるうえで留意すべき点であると思われる。

#### 第2期 中世

5工区において、この時期の塚墓2基(SX301・SX302)を確認した。SX301の周溝からは、14世紀とみられる土師器小皿が出土している。全工区において、中世の遺物の出土はこの1点のみである。

2基の塚墓は、切り合いがなく、遺物も上記の1点のみであることから、どちらが先につくられたかは不明であるが、第IV章で述べたように、2基ともに東側を正面としてつくられたと考えられ、周溝の方位も揃えられており、墓の造営には、計画性・規則性が窺える。また、塚墓の正面が東側であることは、塚墓の東方にある向平集落(第6図)との関係を考えるうえでも重要であろう。

なお、塚墓に採用されている方位は、後述する近世後期の開発に伴う区画溝の方位にも踏襲されており、周辺には、塚墓以外に基準となる地割りや道路などが存在していた可能性も考えられる<sup>5)</sup>。

#### 第3期 近世

1～6工区において、この時期の溝を7条確認した。このほか、第1次調査でも、部分的であるが、

多数の溝が確認されている(第36図)。これらの溝は、方位を揃えて平行、もしくは直交しており、計画的に掘削された様子が窺える。

このうち、遺物が出土した溝はSD2とSD3である。出土遺物の状況から、SD2とSD3はともに19世紀前半にはすでに掘削されていたことが窺える(第IV・V章参照)。形状や規模が類似するSD1等の溝も上記の溝と同様の時期のものである可能性が高い。

また、SD2からは、1点だが18世紀後葉まで遡る可能性のある遺物が出土しており、溝の掘削や周辺の開発が18世紀まで遡る可能性も考えられる。しかし、これ以外に18世紀まで遡る遺物が包含層出土遺物を含め、全く確認されていない状況を踏まえると、やはり、大規模な溝の掘削を伴う開発は19世紀前半まで下るものと思われる。

一方、SD3には近代の遺物も含まれることから、溝は近代までは開口していたことが窺える。また、近代の遺物の出土は無いものの、土層断面をみると、SD2がSD3を切っていることから、SD2も近代まで機能していたものとみられる。

以上のように今回の調査で明らかとなった状況は、後述の文献史料から想定される京ヶ野新田の開発時期とも符合することから、溝の多くは、耕地の区画や排水を目的として掘削された溝であると考えられる(第3節参照)。

なお、溝の方位は中世の塚墓に採用されている方位を踏襲していることから、規模は不明だが、当地においてこの開発以前に、基準となる地割りや道路などが存在していた可能性も考えられる。

また、現在の土地台帳や公園にみえる境界も基本的に上記の方位に沿っており、溝が埋没した後も地割りは踏襲されていたことが分かる。この地割りは、東海環状自動車道の路線形状にも影響を与えており、後世の人間活動に与えた影響は非常に大きいものがあるといえる。

#### 第4期 近代以降

4工区においてこの時期の墓を6基確認した。墓壇の形状、規模、棺痕跡、人骨の出土状況等からみて、いずれの墓も土葬であり、かつ、座棺が用いられたことがわかる（第IV章参照）。

墓は中央部（S X 304・S X 308・S X 309：以下、「A群」と表記）と、南部（S X 305・S X 306・S X 307：以下、「B群」と表記）の、2箇所に3基ずつまとまってつくられている。このまとまりが、いわゆる「家」を単位としていると考えるならば、A・B群どちらも最大で3世代を想定することができるが、夫婦や兄弟姉妹等の可能性を考慮すれば、世代の幅はさらに小さくなるだろう。

群単位でみていくと、A群では3基すべての墓に人骨が遺存していたのに対し、B群では1基（S X 306）のみに遺存していた。人骨が分解されて消滅している墓のあるB群の方が、墓の造営は早かったものと考えられる。

さらに、B群内で比較すると、人骨の残っていないS X 305とS X 307は、人骨の残っていたS X 306より古いことが想定できるが、その中で、S X 307は人骨の残っていたS X 306と墓壇の規模・深さ・長軸の方位がほぼ等しく、S X 305はそれらの要素がS X 306とは大きく異なっている。この相違をS X 306との時期差とみるならば、S X 306とS X 307は埋葬の時期が近く、S X 305は埋葬の時期がこの2基とは離れている（古い）ということになる。以上のことから埋葬順は次のように想定できる（S X 305→S X 307→S X 306）。

B群の墓からは時期の特定できる遺物の出土がなかったため、各墓の実年代の特定は難しいが、人骨の残っている墓があることや、最大でも3世代の時期幅であることを考慮すると、おおむね明治から昭和にかけての埋葬を想定してよいのではないだろう

か。

一方のA群であるが、全ての墓の中で最も良好な状態で人骨が遺存していたのが、A群のS X 308である。このS X 308からは人骨とともにビニールなども出土しており、埋葬時期は戦後にまで下るものと考えられる。また、S X 308は全ての墓の中で唯一、墓壇の平面形がほぼ正方形を呈しており、この点も他とは大きく異なる特徴である。

S X 308の属するA群では3基全ての墓から人骨が出土しているが、そのなかで最も人骨の分解が進んでいたのはS X 309である。A群ではS X 309が最も古い埋葬と考えられる。以上のことから、埋葬順は次のように想定できる（S X 309→S X 304→S X 308）。

以上をまとめると、南部のB群でまず、S X 305の埋葬が始まり、次いでS X 307、S X 306と埋葬が続けられた。人骨の遺存状況からみて、B群最後のS X 306に前後して、A群でS X 309の埋葬が始まり、次いでS X 304、S X 308と埋葬が行われた、ということになる。S X 308を最後に調査区内では新たな埋葬は行われていない。

埋葬が途絶えた理由として、遺体の処理方法の変化が考えられる。4工区の南西部でレンガ造りの火葬施設の基が確認されている。この施設がつけられたことを契機に、この地区でも遺体を火葬するようになり、遺骨を別の場所に葬るようになったものとみられる。この火葬施設は、1991年に北勢町内の別の場所に、より大規模な「北勢町斎場」が建設されるまで使用された後、取り壊されている<sup>9</sup>。

地元住民の話では、火葬施設撤去後、4工区一帯はゲートボール場として改修され、ごく短期間であったが、老人たちの憩いの場として利用された時期があったという。第三章の基本層序にみられる整地層はこの際のものと考えられる。

## 第2節 塚墓について

本書では凡例で示したように、四辻遺跡（第3次）調査で検出された「溝で方形に区画され、区画内の中央部に土坑が設けられている中世の遺構」について、溝の埋土の堆積状況等から、区画内に塚が築かれていた可能性が窺えたこともあり、「塚墓」の名

称を用いて報告した（第IV章参照）。

この節では、四辻遺跡の塚墓のほか、県内の発掘調査事例から四辻遺跡の塚墓に類似する遺構を抽出し、それらを概観したうえで、共通点などをまとめておくこととする。

**対象とする遺構** 「塚墓」の分類基準は、報告書や研究者によって揺らぎがあり、完全に統一されていないとはいえない状況である。いくつかの基準（たとえば、中世墓であること、塚が構築されていること、その周囲が溝で方形に区画されていることなど）が挙げられているが<sup>29</sup>、遺構の残存状況や、その遺跡内にある他の形態の墓との相対的な状況等によって若干の拡張や差異がみられる<sup>30</sup>。

そのため、今回は、「塚墓」の名称にはこだわらず、以下の3点のすべてに該当している遺構を、四辻遺跡の塚墓に類似する遺構（以下、類似例）として抽出することとした。

1. 中世の遺構である<sup>31</sup>
2. 溝で方形に区画されている<sup>32</sup>
3. 中央部に土坑がある<sup>33</sup>

県内において、上記の条件<sup>34</sup>に該当する遺構は、四辻遺跡の2例を含めて17例確認できた（第10表、第50～56図）<sup>35</sup>

**各遺構の概略** 以下、各報告書の記述に基づいて、①～⑦の概略を記す。

①と②は四辻遺跡で検出された遺構である。どちらも、溝で方形に区画されており、中央に土坑が設けられている。①の溝は、東側のみ深く、断面形も他とは異なる。唯一の遺物である土師器小皿も東側の溝の中央部から出土している。②も東側の溝のみ延長が短く、他の3方とは異なっている。また、②の土坑は、側面に扁平な石を貼り付けて補強されている。

③は畜宮跡で検出された遺構である。溝は東側で一部途切れており、陸橋状になっている。土坑から硯1点・短刀1点・土師器皿9点が出土している。

④は北野遺跡で検出された遺構である。中央部に土坑が確認できないが、塚状の盛土とともに削平され、消失した可能性を考え、今回は類似例として扱うこととした。報告書では溝の出土遺物から、16世紀の遺構として報告されている。ただし、溝の遺物には、それより古い時期のものも含まれており、溝の掘削自体はもう少し遡る可能性も考えられる。

⑤～⑧は経塚中世墓で検出された遺構である。溝による区画は部分的にしか確認できないが、斜面につくられているため谷側部分が崩落した可能性を考

え、今回は類似例として扱うこととした<sup>36</sup>。いずれも遺構の上層で多数の礫が検出されている（第51図）。⑧の土坑からは短刀が1点出土している。

⑨は東庄内B遺跡で検出された遺構である。区画内の四隅でピットが検出されている。中央の土坑は底部が赤く焼けており、骨片・木炭・釘・鋸、および「灯明皿」が出土している。

⑩～⑬は横尾墳墓群で検出された遺構である<sup>37</sup>。⑩は溝と土坑（SK514）の谷側の半分が消滅している。遺構の上層で方形の配石が確認されている。土坑から青磁碗が1点出土している。

⑪は溝の西側が一部途切れており、陸橋状になっている。遺構の上層で方形の配石が確認されている。土坑（SK533）は側面が赤く焼けており、炭化物・人骨・刀子1点が出土している。

⑫は谷側以外の3方で溝が検出されている。遺構の上層で方形の配石が確認されている。土坑（SK570）は、「ムササビ形」を呈し、側面が赤く焼けており、炭化物・人骨・土師器小皿が出土している。

⑬は区画内に高さ0.8mの「墳丘」が確認されている。断面図には、「墳丘」内に土坑が記録されている。溝は東側で一部途切れており、陸橋状になっており、陸橋部には石段が4段ほど残存していた。

⑭は区画内に高さ0.9mの「墳丘」が確認されている。溝は谷側（南側）以外の3方で検出されている。土坑（SK610）は、墳丘上から掘削され、検出面まで達しており、「常滑産大甕」が底部を欠いた状態で埋設されていた。報告書では「納骨堂」の可能性が指摘されている。

⑮・⑯・⑰は岩出遺跡群で検出された遺構である。

⑮は溝の一部がL字形に検出されている。「墓壇」からは、木棺の痕跡が確認されており、土師器皿1点・土師器小皿7点・青磁碗1点・短刀2点・複数の釘が出土している。

⑯・⑰（SX180・SX215）は、報告書では古墳時代の方墳の周溝として報告されている遺構である。同じ岩出遺跡群で⑱が検出されていることや、後述のような遺物の出土状況から、中世の遺構である可能性を考え、今回は類似例として扱うこととした。

⑲は溝（SX180）から中世の土師器皿1点と古墳時代の須恵器高杯2点が出土している。土坑（S

X189)は報告書でも「中世墓」として報告されており、土師器小皿が3点出土している。

⑭は、溝(SX215)から中世の土師器皿・小皿・鍋の破片が出土しており、古墳時代の遺物は無い。土坑(SK229)は報告書では時期不明とされている遺構である。土師器皿と小皿が出土している。

**方形区画の規模について** 溝による方形区画の大きさは、最大が7.5m×7.5m(⑩)、最小が2.5m×2.8m(②)である。5.3m×6.0mの⑨を境に、規模に隔絶がみられ、小型の一群をA群、大型の一群をB群としてまとめてみた。(第49図)。今回は詳細な検討を行わないが、A群に比べるとB群は異質なものが多く、たとえば、⑬が棺痕跡や出土遺物などから個人の墓(中世墓)であることは明確であるが、それ以外は、古墳時代の方墳の周溝である可能性の残るものや(⑮⑯)、土坑が確認されていないもの(④)、大甕が埋設されており、「納骨堂」の可能性が指摘されているもの(⑭)などである。また、A・B群どちらにも入らない⑩は唯一、四隅にピットが検出されており、こちらも特異である。

**遺物について** 最も多く出土しているのは、土師器皿および小皿である。8例(①③④⑨⑫⑬⑮⑯)で確認できた。このうち、土坑と溝の両方から出土している例が5例(⑨⑫⑬⑮⑯)、土坑のみが1例(③)、溝のみは2例(①④)である。

次いで多く出土しているのが、短刀・刀子である。

4例(③⑧⑫⑯)で確認できた。短刀・刀子はすべて土坑からの出土である。

**土坑内の被熱** 土坑内が被熱している例が3例(⑨⑫⑯)みられた。土坑内で火葬を行ったあと、その上に塚を構築した可能性が想定できる。ただし、⑨のように四隅にピットが検出されているものは、塚の有無を含めて、ピットとの関係を検討する必要があるだろう。

**土葬** 土葬を想定できる例が、8例(③⑤⑥⑦⑧⑫⑬⑯)みられた。具体的には、土坑の平面形が長方形を呈するもの(③⑤⑥⑦⑧⑫⑬⑯)、正方形であっても規模が大きく、底面から短刀や青磁碗が出土しているもの(⑧⑫⑬)を土葬と想定した。また、これらの土坑は総じて溝よりもかなり深く掘削されていることも大きな特徴といえる。

**陸橋と墓の向き** 溝の一部が途切れ、陸橋状になっている例が、3例(③⑫⑯)みられた。陸橋のある方が墓の正面である可能性が考えられる。

**まとめ** 県内の調査事例から、四辻遺跡の塚墓に類似する遺構を抽出したところ、四辻遺跡例を含め、17例を確認することができた。土師器皿類が出土する例が多いなど一定の共通性もみられるが、遺構の規模や構造、埋葬法などに差異がみられた。周辺の遺構との関係なども視野に入れて比較することで、遺構の性格がより明確になるものと思われる。

### 第3節 「京ヶ野」の開発について

四辻遺跡が立地する段丘面<sup>①</sup>一帯は、地元住民からは「京ヶ野」と呼ばれており、『北勢町史』<sup>②</sup>では「京ヶ野台地」の名称で記述されている。

現在この台地には田畑や住宅、工場などが点在しているものの、この台地の歴史を伝える良好な史料はあまり残されておらず、開発の起源や経緯は詳らかではない。

明治時代に編纂された地誌である『續員辨雑誌』<sup>③</sup>には、京ヶ野は「往古」より「田切郡八ヶ村」<sup>④</sup>共有の「荒蕪タル原野」であったが、文化年間に上記8か村が共同で開墾を行い、文化8(1811)年に桑名藩の検地を受けたことを契機に「京ヶ野新田」の名称で「一村」として扱われるようになったとの記述

がある<sup>⑤</sup>。それ以降の編纂である『北勢町風土記』<sup>⑥</sup>なども上記に従い、概ね同様の記述がなされている。ただし、このような経緯を客観的に裏付ける史料は現在、確認されていない。

京ヶ野新田に関する最も古い文字史料として、文政7(1824)年に桑名藩に差し出された「員弁郡京ヶ野新田明細帳」<sup>⑦</sup>がある。少なくとも近世後期には実際に耕作が行われ、年貢が納められていたことが確認できる。

この他に、上記8か村のひとつである小原一色村で代々屋屋を務めた川瀬家に残る文書<sup>⑧</sup>(以下『川瀬家文書』)の中に「年貢割付状」の「写し」があり、そこに、「正保四年<sup>⑨</sup> 米式斗四升老合 京ヶ野

年貢」、「慶安五年」式斗四升式合 京ヶ野米」等の記述がみられる。このことから、京ヶ野の開発年代を、文化年間より古くみる説もあるという<sup>9)</sup>。

以上のように、京ヶ野の開発年代については諸説あるが、すでに報告したように、今回の四辻遺跡の調査で出土した遺物の状況は、溝の掘削や周辺の開発が18世紀まで遡る可能性はあるものの、大規模な溝の掘削は19世紀前半から始まったことを示しており、17世紀の遺物は1点も出土していない。これは、「員弁郡京ヶ野新田明細帳」の記録や、『續員弁雜誌』の伝えるところにも矛盾しないものである。

では、17世紀から年貢を納めていたことを伝える『川瀬家文書』の「年貢割付状」はどのように解釈すればよいのだろうか。これについては、既に『北勢町史』が、この史料が「写し」であることだけでなく、作成年代の確実な文政7年の「員弁郡京ヶ野新田明細帳」と比較して、年貢割付額にやや不整合な

点のあることを指摘している<sup>10)</sup>。『北勢町史』が指摘する年貢割付額の整合性については評価の分かれるところと思われるが、いずれにせよ「写し」である同史料の記述をそのまま受け入れることは現段階では避けるべきだろう。

ただし、既に述べたように、近世後期の開発に先行して中世にまで遡る地割りや道路などが周辺に存在した状況も考えられ、その場合は、『續員弁雜誌』の記す「荒蕪タル原野」とはやや様相の異なる光景がひろがっていた可能性もある。

いずれにせよ、現在確認されている文字史料と今回の調査結果のみでは、近世後期の大規模な開発に先立って、「京ヶ野」でどの程度の開発がなされていたのかについて確定的なことを論ずることはできず、今後もこの地域の発掘調査成果等が蓄積されていくことが期待されるものである。

## 第4節 結語

今回おこなわれた一連の発掘調査成果の意義について簡単にまとめておく。

まず、1点目として、縄文時代早期の遺構と遺物、なかでも竪穴建物跡を複数棟確認できたことは大きな成果である。これまで県内のこの時期の遺跡は河川中流域の段丘縁辺や段丘面に立地することが多いとされてきた<sup>11)</sup>。今後は四辻遺跡のような河川上流域でも当該期の遺跡の存在を十分に想定した調査が必要だろう。

また、この地域は現在においても岐阜県西濃地域との繋がり強い地域であるが、そのなかで、西濃南部（不破郡・養老郡）はこれまでに縄文時代早期の遺跡が確認されていない空白地帯である<sup>12)</sup>。四辻遺跡の調査結果はその空白を埋めていくための一里塚としての意義も持つだろう。

2点目は、中世の塚墓を確認できたことである。県内において塚墓（類似例を含む）の検出例は17例とそれほど多くないため、この地域の塚墓だけでなく中世の葬墓制について知るうえでも四辻遺跡の調査例は貴重である。また、これまで「塚墓」と分類されているものでも、実際に「塚」が構築されていたことが確認できる例は多くないが、SX301の区

画溝の上層断面では内側から土が流れ込んでいる様子が明瞭に確認できた。これにより、「塚」の存在を十分想定することができた。

3点目は、近世後期の区画溝を確認できたことである。これまでも「京ヶ野」の開発時期については諸説あったが、今回、四辻遺跡で確認できた区画溝の状況は、文字史料が伝える文化年間（19世紀前半）に行われたとされる周辺8か村による共同開発の年代と矛盾しないものであった。また、この溝の方位は中世の塚墓の方位ともほぼ合致するため、開発の際に基準となる道路や地割りが、既に存在していた可能性も窺える。「京ヶ野」開発の起源を探る上で重要な手がかりとなるだろう。

最後に4点目だが、結果として近・現代の墓の調査を行ったことである。検出段階では時期が分からなかったため、他の遺構と同様に掘削を行った結果であるが、県内でもあまり調査例のない時期の遺構であり、貴重な事例といえるだろう。

以上、現在は集落の裏山や里山などとして把握・認識されている土地が、時代によって様々なかたちで利用されてきたことを明らかにすることができた。

四辻遺跡の調査成果が、より深みのある地域史の

把握につながり、未来への「みちしるべ」として、今後のまちづくり・ひとづくりの一助となれば幸いです。

## 【註】

①第IV章で述べたように、トレンチ調査で確認された溝のなかに中世まで遡るものが含まれている可能性がある。

②北勢町『北勢町史』2000。

③石井達・萩原三雄編『中世社会と墳墓-考古学と中世史研究3-』名著出版1993、小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会2001など。

④例えば、磐田市教育委員会編『一の谷中世墳墓群遺跡』1993では、上記以外に、「溝を掘らずに削り出して造っている例」について、「集石墓や土坑墓と区別した場合には塚墓の範疇に入る」として、塚墓として扱っている。また、斜面に造られ、コの字形に区画溝が検出されている墓については、「塚墓（中略）斜面部においても平面状が方形を呈し、地形によって平面形が左右されることはない」として、塚墓ではなく「コの字形区画墓」と分類して報告している。

⑤その可能性のあるもの（報告書では別の時代の遺構として報告されているもの）を含む。

⑥陸橋のあるものや、斜面につくられて部分的に崩落している可能性のあるもの（前掲註④の分類で「コの字形区画墓」に分類されるもの）などを含む。なお、方形に塚が削り出されているものや、方形に区画されていても溝の確認できないものは、今回は外した。

⑦平面図中で確認できないものも、塚の断面図などに土坑が記録されているもの、塚とともに土坑が削平され失われた可能性の高いものを含む。

⑧どこまでを「方形」とするのかなど、それぞれの条件をさらに厳密に規定することは今回はしていない。あくまでも筆者の主観で判断した。その点は今後の課題である。

⑨第10表における各遺構の規模や年代等は、それぞれの報告書の記述に従い、そのまま掲載している。今後、出土遺物などを再検討することで遺構の年代は変わる可能性がある。

第50～56図は、それぞれの報告書に掲載されている図版を、大きさを比較しやすいように縮尺を変更して転

載した。視認性を向上させるため、遺構番号やスケールなどを加筆している。報告書に図の掲載されていない北野遺跡S X3151は、調査時の実測図をトレースして掲載した。

表及び図版の作成に使用した報告書は以下の通り。

倉吉歴史博物館『国史跡倉吉跡発掘調査概報』1992、三重県埋蔵文化財センター『経塚中世墓発掘調査報告（研究紀要第19-2）』2010、三重県教育委員会「3. 東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970、三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』1995、三重県埋蔵文化財センター『横尾墳墓群（中・近世墓）発掘調査報告（研究紀要第18-2）』2009、三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』1996、三重県教育委員会『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告-第6分冊-岐山道跡左郡地区』1993。

⑩谷側に溝は存在しなかった可能性もある。その場合は、前掲註④の分類で「コの字形区画墓」に分類されるものである。

⑪A地区の227号墓・236号墓は、第52図には図示されていないが、「楕円形状」の墳丘が残存しており、周囲はその墳丘を取り囲むように丸く掘削されているとみて、今回は対象から外した。また、B地区の463号墓・464号墓は削り出しにより構築されていることから、これも今回対象から外した。

⑫第49図は、方形区画の短辺を縦軸、長辺を横軸としている。一方の長さの不明なものは便宜的に正方形と仮定して作図した。

⑬吉田史郎・栗木史雄・宮村学『桑名地域の地質』『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』通商産業省工業技術院地質調査所1991。

⑭北勢町『北勢町史』2000。

⑮美濃部春民『續員辨雑誌（天）』北伊勢地方史料刊行会1964。

⑯向平、下平、西貝野、畑木、塩崎、小原一色、二之瀬、田辺の8か村。

⑰現在も京ヶ野台地の西半分は「京ヶ野新田」の地区名となっている。

⑱北勢町風土記編集委員会『北勢町風土記』1978。

⑲北勢町『北勢町史』2000。

⑳「川瀬家文書」『三重県史資料調査報告書23 三重県い

なべ市北勢町 川瀬家文書調査報告書』三重県生活・文化部 2009、「川瀬文書」『三重県史 資料編 近世3上』三重県 2008。

⑪1647年。

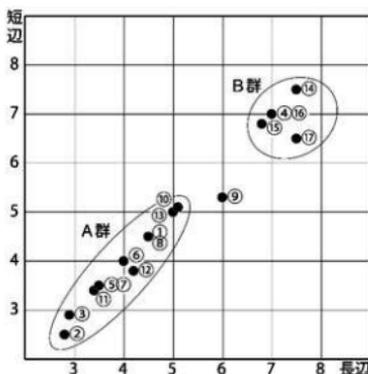
⑫1652年。

⑬北勢町『北勢町史』2000による。

⑭文政7年の「員弁郡京ヶ野新田明細帳」の記録を元に8か村の年貢を合計すると、京ヶ野新田全体では八斗四升二合の年貢となるが、『川瀬家文書』の年貢割付けに従って8か村の年貢を推計すると、17世紀段階で、京ヶ野新田全体の年貢が一石九斗三升以上になるため、これでは多すぎるのではないかという指摘。

⑮三重県『三重県史 資料編 考古1』2005。

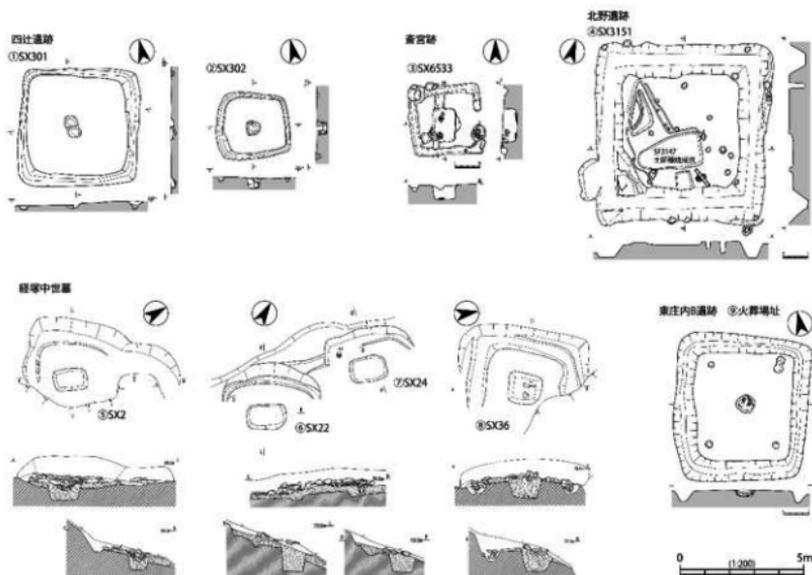
⑯関西縄文文化研究会『押型土器期の諸相』2011。



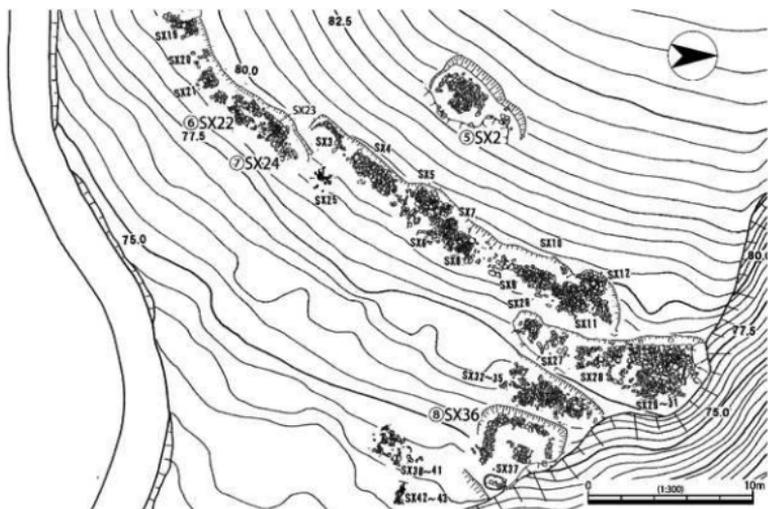
第49図 方形区画の規模 (m)

第10表 塚墓一覧表

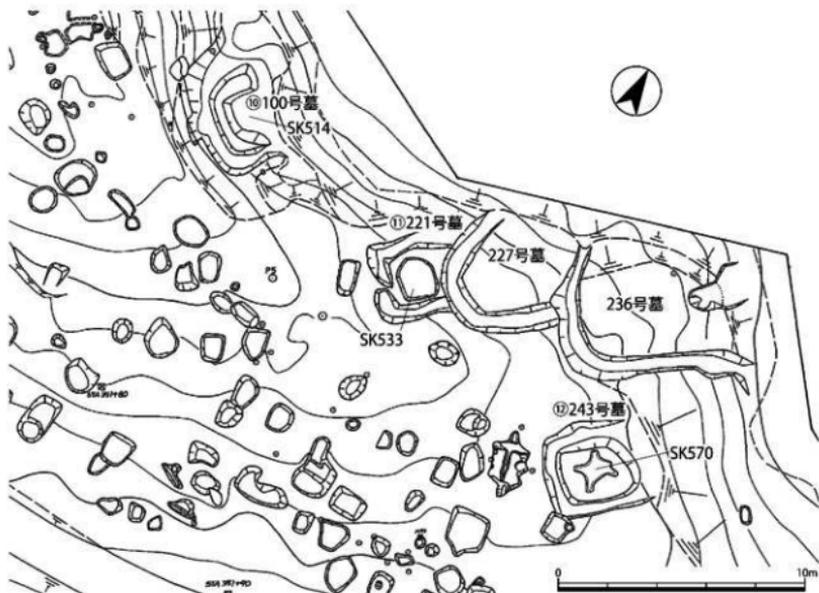
遺跡名	遺跡名	所在	横(西)		上土		年代	遺物	備考		
			長さ(m)	幅(m)	平面形	厚さ(m)					
①	SK301	西江遺跡 いなか一帯	4.5×4.5	0.7	0.4	0.3	14世紀	漆：土師器小皿(水穴付)			
②	SK302		2.5×2.8	0.4	0.2	0.4	14世紀	なし	上土の調査によるで編織 陶器(漆器)		
③	SK353	多文部 明和町	3.9×2.9	0.4	0.2	1.0×1.3	13世紀中葉	土灰：縄1・埴刀1・土師器皿 漆：土師器皿1・小皿1・刺繍針1・鎌子・山形輪 小皿1・土師器皿2・土師器(水輪)1・土師器 小笠2			
④	SK351	多文部 明和町	7.0×7.0	1.2	0.6	不明	16世紀	土灰：土師器(空灰・水・地)各1	発年代は推定可能性あり		
⑤	SK2	群原平塚墓 いなか一帯	3.5×不明	0.5	0.25	0.9×1.35	0.6	16世紀			
⑥	SK22		4.0×不明	0.3	0.1	0.8×1.3	0.7	16世紀	なし		
⑦	SK24		3.5×不明	0.4	0.15	0.25×1.3	0.55	16世紀	なし		
⑧	SK36		4.5×不明	0.6	0.35	1.3×1.3	0.7	16世紀	土灰：埴刀1 漆：土師器の刺繍に用いて(土師器(空灰))3		
⑨	大塚遗址	阿波市	5.3×6.0	0.6	0.4	円形 (漆器)	0.8	鎌倉時代	土灰：埴刀多数、木炭・釘30~40・線2・灯明瓦 漆：灯明瓦多数	西隣にビレット	
⑩	109号墓		5.1×不明	0.6~1.7	0.3	方形	2.3×2.6	14世紀	土灰：13~14世紀の青磁皿1		
⑪	221号墓	阿波市	3.4×3.5	0.6~0.8	0.4	隅丸方形 (漆器)	1.5×1.8	0.3	12世紀以降	土灰：灰化物・水筒骨・刀子1	陶器(西隣)
⑫	243号墓		3.8×4.2	0.5~1.0	0.25	△中平じ形 (漆器)	0.6×1.0	0.25	14世紀	土灰：灰化物・水筒骨・土師器小皿 漆：土師器小皿	
⑬	401号墓		5.0×5.0	0.3~0.6	0.3	不明	0.6×0.7	0.2	13世紀前半以降	漆：土師器(空灰輪)1・空灰印籠(陶輪)1	陶器(漆器)
⑭	402号墓	阿波市 ケガノ江・高内遺跡区	7.5×7.5	0.4~1.7	0.5	円形	0.9~1.0	0.5	16世紀か	大塚内中心・土師器(空灰・地)各1・「御宇文 記」の漆器多数	
⑮	SK305		6.8×不明	0.3~0.7	0.5	長方形	1.2×2.35	0.6	15世紀末 ~12世紀前半	土灰：土師器皿1・小皿2・刺繍針1・埴刀2・釘 漆：土師器皿1・線1・刺繍針1・山形輪3	木炭屑検出
⑯	SK309		7.0×不明	0.6~0.8	0.2	隅丸方形	0.75×1.5	0.2	古墳時代	漆(SX146)：土師器皿1・古墳時代の青磁器高足 2、土灰(SX189)：土師器小皿3	
⑰	SK215 SK229		6.5×7.5	0.5~0.8	0.3	長方形	1.0×2.3	0.2	古墳時代 不明	漆(SX215)：土師器皿・小皿・埴刀 土灰(SX229)：土師器皿・小皿	



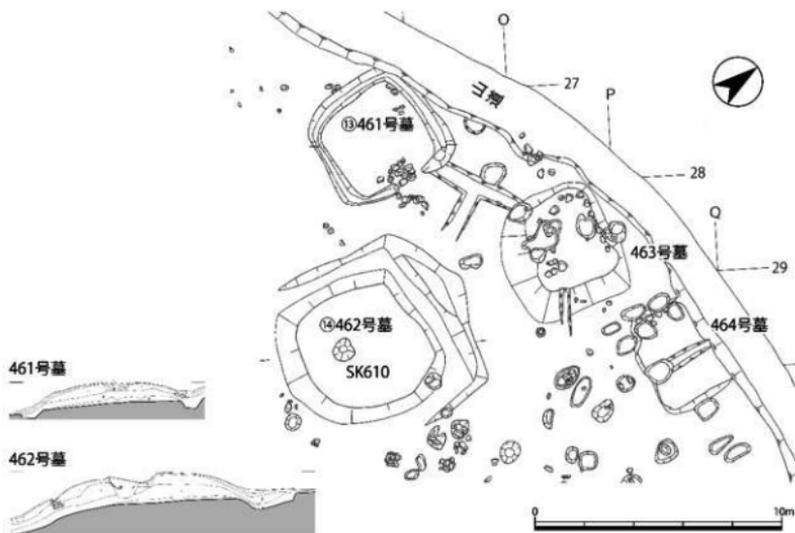
第50図 四辻遺跡の「塚墓」と類似例 (すべて1:200)



第51図 経塚中世墓 上層遺構図 (1:300) ※谷本2010に加筆

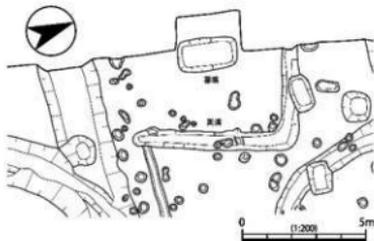


第52図 横尾墳墓群 A地区下層遺構図 (1:200) ※田阪ほか2009に加筆



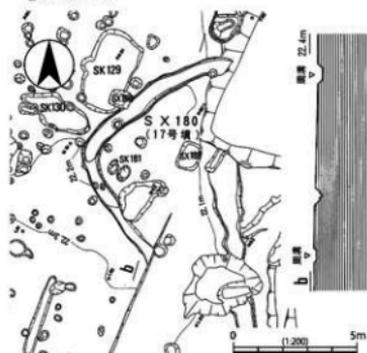
第53図 横尾墳墓群 B地区下層遺構図 (1:200) ・断面図 (1:150) ※田阪ほか2009に加筆

⑤SX305



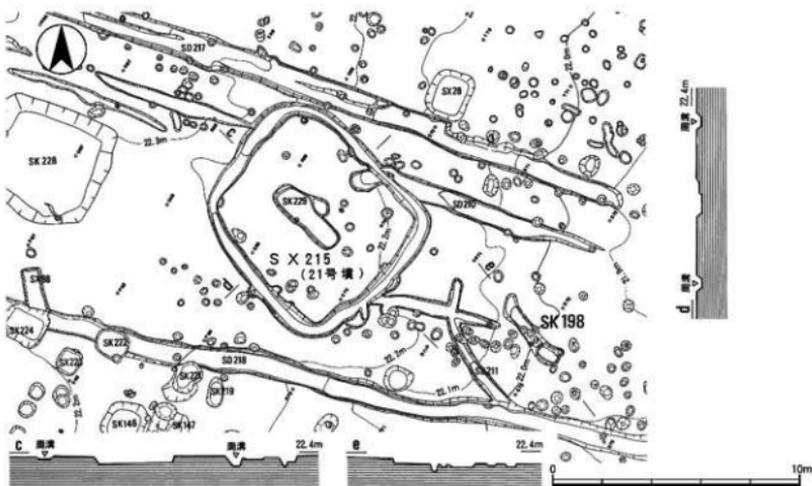
第54図 岩出遺跡群 S X 305 (1:200)

⑥SX180・189



第55図 岩出遺跡群 (旧称: 蚊山遺跡左郡地区)  
S X 180・S X 189 (1:200)

⑦SX215・SK229



第56図 岩出遺跡群 (旧称: 蚊山遺跡左郡地区) S X 215・S K 229 (1:200)

## 第Ⅷ章 日尾塚状地

### 第1節 前言

四辻遺跡の他に平成28年度には日尾塚状地の第1次調査を実施した。日尾塚状地は、いなべ市北勢町二之瀬に所在する遺跡である。養老山地西側山腹に位置し、山裾には日尾神社が鎮座する。標高は約250mである。地形が塚状に盛り上がっているため

第1次調査を実施した。なお、「調査に至る経緯」、「調査の体制」及び「位置と環境」については、それぞれ第1章第1節、同第2節、第Ⅱ章を参照されたい。

### 第2節 調査の経過

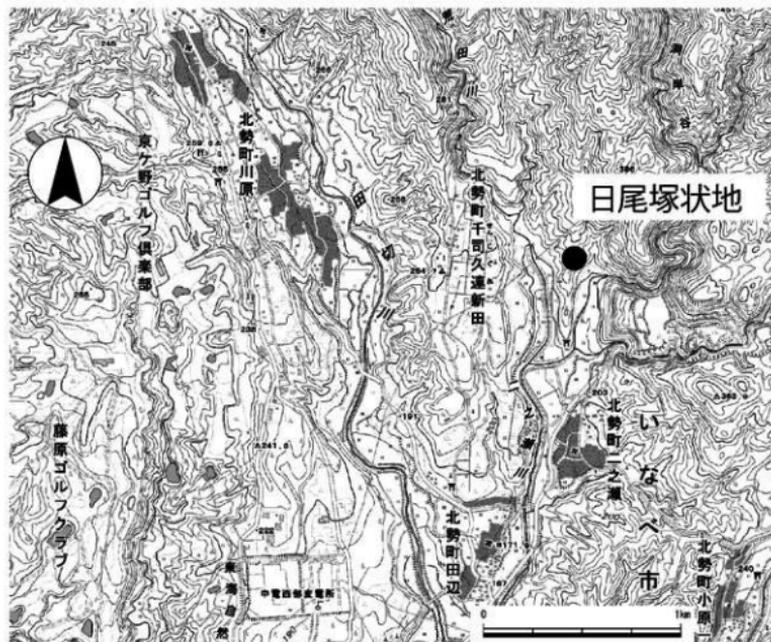
【平成28年度】

#### 第1次調査

期間：平成28年6月6日～平成28年6月17日

面積：32㎡

調査は人力掘削でトレンチを3本設定し、行った。人為的な掘削や盛り土は確認できず、自然地形と思われる。遺構・遺物は見つからなかった。



第57図 遺跡位置図 (1:25,000)

### 第3節 文化財保護法に係る諸通知

文化財保護法等に係る諸通知は、以下の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知（文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項）

・平成26年1月10日付け、国部整北調設第87号（国

土交通省中部地方整備局北勢国道事務所長から三重県教育委員会教育長あて）

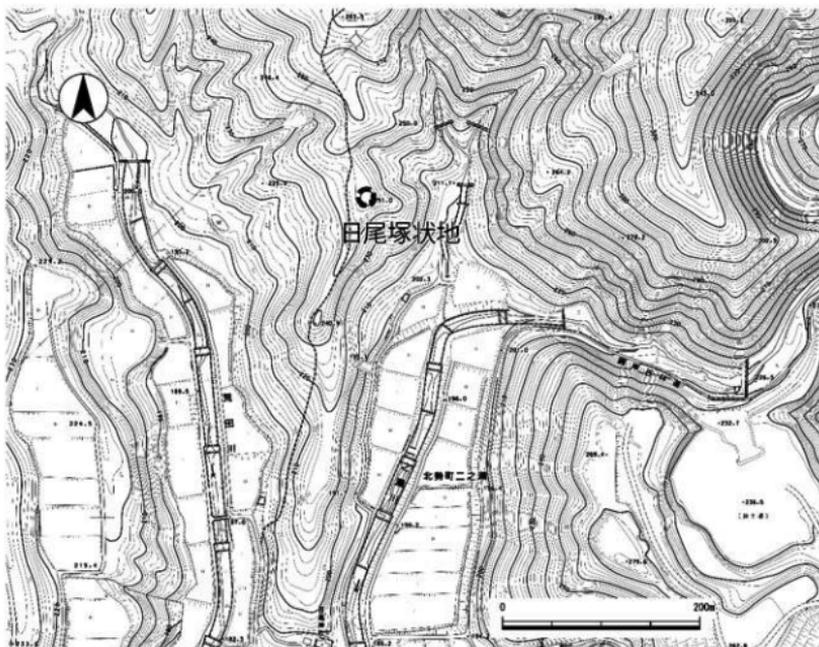
○発掘調査の着手報告（文化財保護法第99条第1項）  
【第1次調査】平成28年6月6日付け、教埋第72号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

### 第4節 調査の方法

**トレンチ設定** 第1次調査で設定したトレンチは、調査区の形状に合わせてトレンチを3本設定した。各トレンチの起点は調査区で最も高いところとし、トレンチの名称は各方位をつけることにした。トレンチの長さは、北トレンチが約12m、南トレンチが約14m、東トレンチが約3m、幅は北トレンチと南

トレンチが約1m、東トレンチ約2mで総面積は32㎡である。

**掘削と検出** 今回の調査は表土掘削からすべて人力で行った。スコップ、ジョレン、ステークホー等を用いて調査をした。掘削後、各トレンチの土層断面図を1/20の縮尺で作成した。

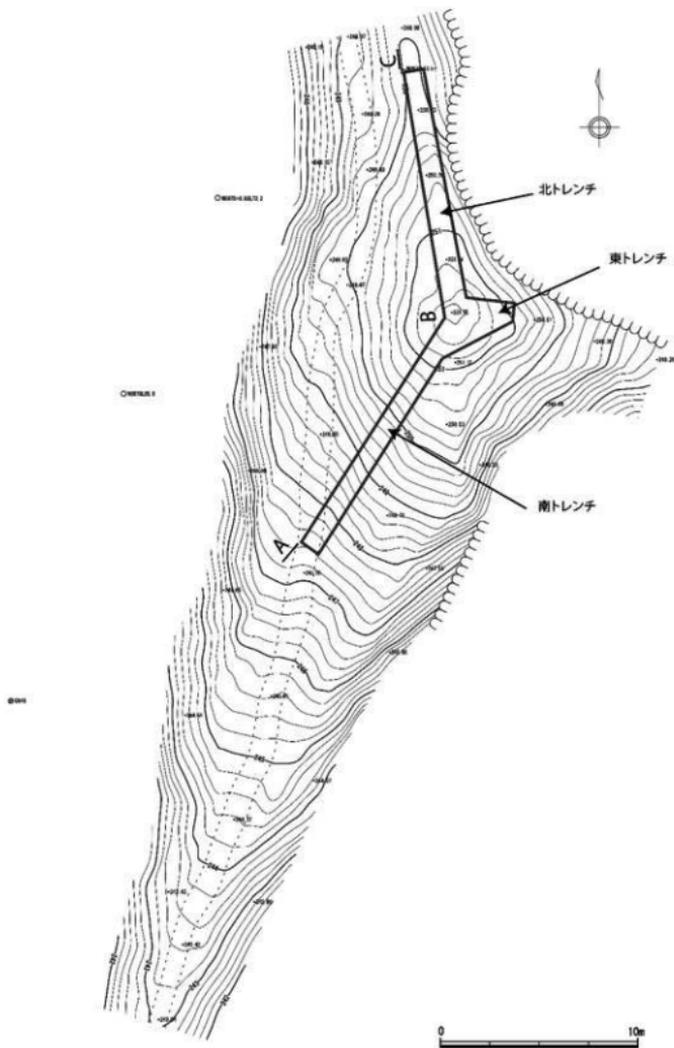


第58図 遺跡地形図（1:5,000）

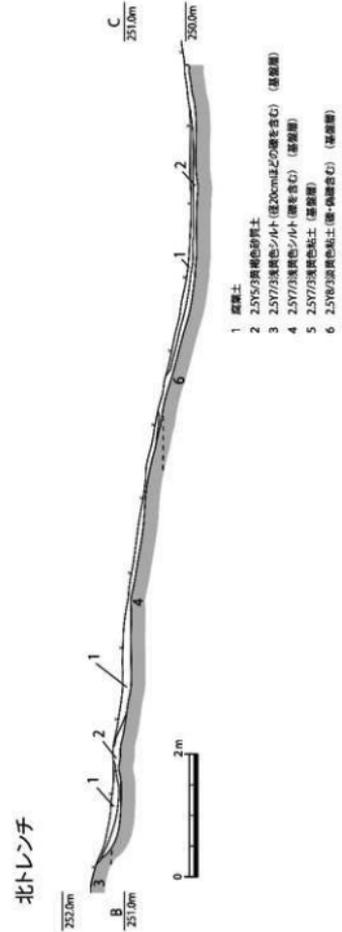
## 第5節 調査のまとめ

今回の調査では、遺構・遺物は確認できなかった。  
地形が塚状に盛り上がっているため調査を行ったが、

腐葉土・表土直下で地山となり、人為的な掘削や盛土は確認できなかった。



第59図 調査区位置図 (1:250)



- 1 腐植土
- 2 2.5Y5/3淡褐色砂質土
- 3 2.5Y7/3淡褐色シルト (厚20cmほどの層を含む) (硬層)
- 4 2.5Y7/3淡褐色シルト (硬を含む) (硬層)
- 5 2.5Y7/3淡褐色粘土 (硬層)
- 6 2.5Y8/3淡褐色粘土 (硬-粘層を含む) (硬層)

第60図 調査区土層断面図 (1:80)



# 写 真 图 版





写真1 四辻遺跡全景（北上空から）



写真2 1工区完掘状況（東から）

写真図版2 四辻遺跡②



写真3 2工区完掘状況（北から）



写真4 SD3南部完掘状況（北から）



写真5 3工区完掘状況（東から）



写真6 SD2完掘状況（東から）

写真図版4 四辻遺跡④



写真7 4工区完掘状況（西から）



写真8 4工区完掘状況（上空から 上が北）



写真9 S x 304人骨出土状況（東から）



写真10 S x 304完掘状況（東から）

写真図版 6 四辻遺跡⑥



写真11 S x 305棺痕跡出土状況（南から）



写真12 S x 306人骨出土状況（西から）



写真13 S x 307完掘状況（北から）



写真14 S x 308土層断面および棺痕跡出土状況（南から）

写真図版 8 四辻遺跡⑧



写真15 S x 308人骨出土状況（北から）



写真16 S x 308完掘状況（南から）



写真17 S x 309棺痕跡出土状況（南から）



写真18 S x 309人骨出土状況（南から）

写真図版10 四辻遺跡⑩



写真19 S x 309人骨出土状況近景（南から）



写真20 S x 309完掘状況（南から）



写真21 5工区完掘状況（南から）



写真22 5工区完掘状況（上空から 上が北）

写真図版12 四辻遺跡⑫



写真23 S X 301・S X 302全景（北東から）



写真24 S D 303完掘状況（西から）



写真25 S x 301完掘状況（東から）



写真26 S x 302全景（東から）

写真図版14 四辻遺跡⑭



写真27 S X 302中央土坑石出土状況（東から）



写真28 S X 302中央土坑完掘状況（北から）



写真29 6工区完掘状況（北から）



写真30 S D401完掘状況（北から）

写真図版16 四辻遺跡⑬



写真31 SH402検出状況（南から）



写真32 SH402完掘状況（北東から）



写真33 SH404・SH406完掘状況（北から）



写真34 SH404・SH406完掘状況（東から）

写真図版18 四辻遺跡⑱



写真35 S K 403遺物出土状況（西から）



写真36 S K 403完掘状況（南から）



写真37 S D405完掘状況（北から）



写真38 S K408磔出土状況（西から）

写真図版20 四辻遺跡②



写真39 S K 408磔出土状況近景（南から）



写真40 S K 408完掘状況（西から）



写真41 南トレンチ調査前（南西から）



写真42 南トレンチ掘削後（南西から）

写真図版22 日尾塚状地②



写真43 北トレンチ調査前（南から）

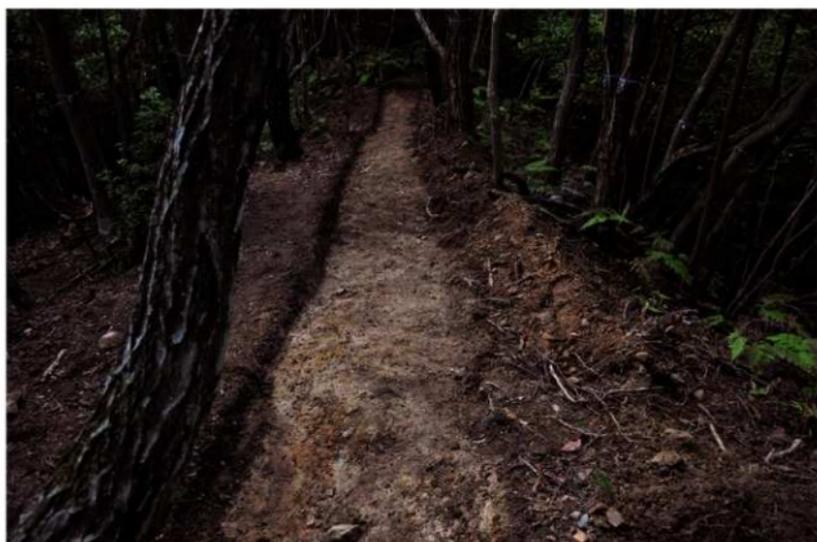


写真44 北トレンチ掘削後（南から）



写真図版24 出土遺物②





四辻遺跡出土 近世・近代の遺物



春光寺石塔群採集 四耳壺



四耳壺 肩部



四耳壺に入っていた火葬骨

# 報告書抄録

ふりがな	よつつじいせき・ひおつかじょうちはくつちょうさほうこく							
書名	四辻遺跡・日尾塚状地発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	186-10							
編著者名	勝山孝文・竹田憲治・出口真・松水達也							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tn 0596-52-1732							
発行年月日	2020(令和2)年11月2日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査回数 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
よつつじいせき 四辻遺跡	いなべ市北勢町 向平字四辻	24214	a84	35° 10' 37"	136° 30' 57"	20160617 ～20160912 20170525 ～20171010 20190422 ～20190729	第2次調査 1,001㎡ 第3次調査 2,000㎡ 第4次調査 1,000㎡ 計 4,001㎡	国道475号東海環状自動車道建設事業
ひおつかじょうち 日尾塚状地	いなべ市北勢町 二之瀬字日尾	24214	a86	35° 12' 32"	136° 31' 48"	20160606 ～20160617	第1次調査 32㎡ 計 32㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
よつつじいせき 四辻遺跡	集落跡 墓	縄文時代	竪穴建物3棟 土坑1基	縄文土器(押型文) 石器(石鏃)		遺物総重量: 1.37kg		
		中世	塚墓2基	土師器小皿				
		近世	溝7条	陶磁器碗・染付皿・櫛鉢				
		近・現代	墓6基	人骨・鉄釘・かいら(ビニール膜)・針金・網状小片)				
ひおつかじょうち 日尾塚状地			塚状地	なし				
要約	縄文時代早期の竪穴建物3棟・土坑1基、中世の塚墓2基、近世の区画溝7条、近・現代の墓6基							

三重県埋蔵文化財調査報告 186-10

**四辻遺跡・日尾塚状地  
発掘調査報告**

2020(令和2)年11月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 共立印刷株式会社







